

---

# みえるもの・できること

マオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みえるもの・できること

### 【Nコード】

N4453C

### 【作者名】

マオ

### 【あらすじ】

五皇国セイリオス・裏神官である少女ユイ・ヒガ。イグザイオの研究者である少年、ケイ・カゲツ。絶望を知った少年と少女は、世界を壊すために《破滅》を求めて所属国を裏切る。そして、禁忌の地で見つけた《破滅》とは？

## 序章・1

世界は腐っている。世界は<sup>よど</sup>みんでいる。

世界は歪んでいる。世界は病んでいる。

世界は汚れている。世界は壊れている。

世界は苦痛に満ちている。

世界は　醜い。

大量に人を殺す兵器を作り、使う。

子供にも人を殺させる。

毎日どこかで人が死ぬ。

貧富の差、差別……どこにも必ず存在する。

世界に絶望する理由などそこかしこにあふれている。

そこに綺麗なものなどありはしない。

世界自体が醜い<sup>みにくい</sup>のだから、どこにも綺麗なものなどない。

この世界は、汚い。

彼女たちはそう思っている。それが紛れもない世界の真実なのだと、ちつぽけな世界の中で絶望している。

世界には絶望の道しかないのだと。

世界には希望など無いのだと……。

穏やかな昼下がり。今日は天気がいい、ぼんやりと彼女はそう考えた。こんな室内ではなく、外を歩くとさぞ気持ちがいいだろうけれど、仕事<sup>しごと</sup>中の身には酷な願いだ。

特に　彼女のような存在には。

「あれがセトラ・オウンゴンの後継者か。幼いな」

そんな声を耳にし、少女は内心でうんざりしていた。

外見には出さない。そう教育されている。感情は表に出すものではない。まして彼女のような立場では迂闊な行動は命取りになる。目の前にいるイグザイオ国の軍人に嫌気がさしても平然としなくてはならない。

彼女のそんな心境にも気付かず、セイリオスの高司祭は軍人の疑問にどこか自慢げに答えている。

「まだ16歳ながらユイ・ヒガはとても優秀です。だからこそ六芒星を身に着けることを法皇様に許されたのですから」

また始まった、と彼女は呆れる。よくもまあ他人のことをこうも自慢げに語れるものだ。時折本当に不思議に思いたくなる。

あきれてわずかにうつむくと肩の上で切りそろえた髪が揺れた。髪留めは六芒星だ。襟元、スカーフの留め具、袖口、靴にまで六芒星がつけられている。

これらは支給品で彼女の趣味ではない。身に着けている物は一目で五皇国所属ごおうこくの者とわかる品だ。事実彼女　ユイ・ヒガは五皇国の一つ、神聖国家セイリオス所属の神官である。若干16歳だが、エリート中のエリートである証の六芒星を身に着けていた。

だが彼女は別段変わった力ちからを持っているわけではない。強力な魔法士でもなければ、能力者のうりょくしやでもない。呪文の勉強などしたことがないし、超能力という生まれ持った力もない。手にした傘など柄の部分に可愛いクマのマスコットがついている。

見た目など本当に可愛い女の子だ。とてもエリートには見えない、おっとりした雰囲気おんきの少女で、六芒星さえなければ制服とマントのせいで魔術学院の学生で通じるだろう。この外見ゆえにイグザイオの軍人も彼女の實力を疑っているのだ。もっともユイに實力を見せびらかす気など毛頭ない。

自分は言われたことをするだけだ。少ししてふうと息をつきユイは目線をあげた。さりげない様子で移動する。

ふと外の景色を見ようとでも言う動きだったので、司祭も軍人も気にとめなかった。ユイが突然手にした傘を広げるまでは。

ここは室内、傘を広げる必要などない、はずであった。

「ユイ？」問いかけに応えたのはユイではなく、わずかな音。窓ガラスに小さな穴が開き、一瞬後に彼女に向かって炎が広がる。

ふっ、とかすかな息を吐きユイは傘を振り上げ、振り下げた。柄の先のクマがぼんやりと光る。持ち主の意思に反応して防御機能が働いたのだ。

広がるかと思われた炎は傘にぶつかり、しばむように消え失せた。何が起ったのか理解できたのはこの室内でユイだけだったろう。軍人も高司祭も啞然としている。

ユイはかまわない。廊下側に声をかけた。

「狙撃されました。炎系の魔法弾です。外を調べてください。射角から計算して……狙撃位置はあの建物だと思われます。このタイプの魔法弾は超遠距離射撃ができませんから」

ドアを開けて入ってきた警備の人間にテキパキと指示する。

警備の人間はユイよりも大分年上だったが、彼女は臆することもない。それが当然のように指示をし、処理していく。その様子を頼もしげに見ながら高司祭は言つてのけた。

「セイリオス自慢の『神官』ですよ、彼女は」とても自慢げに。

指示を終えたユイはその言葉を聞いて蹴りつきたい気分になった。

自慢。自慢。

誰に対して？何に対して？ユイに身寄りはない。自慢したい相手もない。大体こんなことを誇つてなんになる？

「いやはや、全くだ。強いのだな、彼女は」軍人は感心した様子で頷く。

「さすがセイリオス秘蔵の『裏』神官だ。この腕前なら安心して座つていられる」

その言葉にユイは冷たく視線を向けた。

「あまり軽々しくその言葉は口にしないほうがよろしいかと」

『裏』その単語が指すものは一般人が知っていないものではない。

どこで誰が聞いているのか解らないご時勢だ、腐っても軍人ならそ

のあたりのことなど分かりきったことだろう。

わざわざ口にするとは、危機意識が足りないのではないか。

こんな男を何故自分が護らねばならないのだろう。今回の任務は本当に馬鹿らしいと彼女は思う。大体この高司祭もたいした重要人物ではないのだ。

わざわざ彼女がボディガードに就くこともないような男である。

他の者で充分だったはずだ。狙撃とて分かりやすい位置からのものだった。少々感覚強化の投薬を受けている者なら、感知はたやすい。

現にユイはたやすく感じ取った。SP程度でも充分だったろう。

あほらしい、とげなりする彼女の耳にノックの音。

「失礼します」

入ってきたのはユイよりも多少年上の少年だった。目立つ灰色の髪と赤い目。上着の肩の部分に彼女と同じような六芒星が刻まれている。ユイと同じように五皇国の配下だ。

一度見たら忘れられない容姿の少年である。ユイも彼を覚えている。

以前イグザイオに何度か行ったときに会ったことがあった。

「おお、ケイ・カゲツか。どうした」

「はい。狙撃されたと知らせを受けたので。閣下のご無事の確認に参りました」

殊勝にそう言うてのけるがユイは気づいている。ケイは馬鹿馬鹿しいと思っている。

自分と同じように。

「まあ、セイリオス秘蔵の神官ユイ・ヒガが護衛についているのですから、心配はさほどしていませんでした」

などと愛想笑いを浮かべているが目が冷たい。

「ふむ、確かに彼女は強い。ケイ、お前も彼女に鍛錬してもらったらどうだ？」

軍人はまったく何も気づかずにそんなことを言い出した。

「ご冗談を」

ちつとも穏便ではない笑みを浮かべてケイは言つてのける。

「私はこんな野蛮なことには向いていませんので」

……いつかこの男をぶん殴ろう。ユイは心にそう決めた。

「ふむ、お前はもっぱら頭脳労働ばかりだからなあ、軍に身をおく以上は鍛錬もしておくべきだぞ」

「ほっとけ、このハゲ」

素早く、微かに<sup>かす</sup>ケイが口の中でそう呟くのをユイは聞きとめたが、口には出さない。どうせ聞こえたのは身体強化されている自分だけだ。突っ込んでもこの男は異常に猫かぶりが上手いので、結局ごまかされる。

「もつともです。いい機会ですので、少々ご教授いただきたいものです、ユイ・ヒガ？」

しゃあしゃあと言うケイにユイもなんとか笑いかける。

「イグザイオ秘蔵の人間スーパーコンピューターに万が一のことがあつては大変ですよ、

考え直されたほうがよろしいのでは？わたしはこの警備がごさいますし」

彼女は任務にかこつけて回避したつもりであつたが、高司祭がそれを無に帰した。

「ああ、構わぬよ、ユイ。私たちは別室に移るから、彼の希望をかなえてあげるといい。警備ならほかにもある」

「おお！それはありがたい。なにせこのケイというやつは、機械を扱わせたら右に出る者はないのですが戦うことはからきしでして。仮にもイグザイオ軍に所属している者として情けなく思つておつたのですよ」

「ははは、そうでしたか。実はこちらのユイも機械はからきしでしてね。ちょうどいい機会です、ユイ、少し彼からノウハウを学んでいらつしゃい」

2人を無視して盛り上がり、高司祭と軍人は和やかに別室へ移つ

ていった。

置いていかれた形になった少女と少年はしばらく無言で立っていた。

「……なんでだ……」

思わず頭を抱えるユイ。

「こっちのセリフだ」

ケイも表情が苦々しい。

「大体どうしてお前がここにいる！？一人暗い部屋で機械と格闘するのがお前の仕事だろう！ケイ・カゲツ！」

「そうだな、暴漢と格闘するのはお前の仕事だ、ユイ・ヒガ」

フツと皮肉げにケイは笑う。

「何が悲しくてあんな自慢好きの男にくっついて外交に来なきゃならないんだか。くそ、サボる口実になると思っただが……お前ももう少し上手く断れよ」

「わたしのせいにするな。先に言い出したのはお前だろう」

「あんだけやらせんなこのボケと言っても通じないんだからな。仕方ないだろ。最近の人間は言葉を理解しない阿呆が多い」

言いつつユイを見ている。彼女もその一人だと言いたげだ。ムカツときてユイも言っただけ。

「そうだな、最近の男が情けないのと一緒にだなあ」

室内にひんやりとした空気が溢れた。外はいい天気なのに室内は凍りつきそう。

やがて、どちらからともなくふふふと含み笑いをし始め、2人同時に言い放った。

『お前など大嫌いだ……！』

綺麗に同じことをハモってから睨み合う。最初にあつたその瞬間から、こいつとは合わないと双方思っていたのだが、第一印象に間違いはなかったようだ。



## 序章・1（後書き）

長編を投稿してみようと思います。原稿に換算して大体三百枚ほどですが、よければお付き合ってください。

## 序章・合縁奇縁腐れ縁・2

ユイから見れば、ケイはいやみの固まりで、口を開けば腹が立つようなことしか言わない嫌な奴。

ケイから見れば、ユイは腕っぷしばかりが強くて脳みそのない、阿呆な奴。

ようは互いが一番嫌うタイプがお互いなのだった。温和に話などしようが無い。

こいつがいるなら来るんじゃないかった、と互いに深く後悔している。

本当なら同じ部屋にいるのも嫌だが、あんなことを言われた手前、実際に鍛錬する気は無くとも少し時間をつぶさなければならぬだろう。

「なんであんな男の護衛にわたしがとっていたが……お前がいたからなんだな、ケイ・カゲツ」

ムスツとした表情を崩さないままユイが言う。不本意な護衛は高司祭やあの軍人を護るためではなく、ケイ　この少年を護るためのものだったのだ。

「まあな、そうだろうな、俺が死んだらイグザイオの連中には大打撃だろう」

ケイはけろりと言い切った。

「わざわざセイリオスの『神官』を派遣させるほど、か。迷惑な」  
本当に嫌そうにユイは呟き、傘に手を添えた。見た目よりもずっしりと重いそれは、彼女が何であるのか否応にも感じさせるものだった。

ケイは何も言わず興味も無いと言いたげに壁際による。視線は窓、小さく穴の開いたガラスを捉えていた。

「三流だな……」

彼がそう呟いたのを確かに聞いた。まあそうだろうなと、ユイも

思う。狙撃してきた犯人からもユイがいたのは見えたはずだ。おそらくはセイリオスの裏神官ということも分っただろう。ユイのあちこちに六芒星がついているのだから、想像するのは容易だったはずなのに狙撃してきた。その時点で三流だ。

大抵は裏神官がついていると分った時点で、一流の暗殺者ならあきらめる。かなうわけがないからだ。極限まで身体改造を受けている裏神官に普通の人間がかなうはずがない。

その防御を突破できる術も無い。それこそ魔法士が能力者でもないかぎり対抗することは不可能に近い。いや、魔法士や能力者でも難しいだろう。裏神官はそれらに対抗する術も叩き込まれる。いついかなるときでも、何者にも対抗できるように　それが本人の意思かどうかに関わらず、機械のように。

「あまり窓辺に立つな、また狙撃されても知らないぞ」

そっけなく言うところケイは意外と素直に窓から離れた。まだ死ぬ気はないと見える。

「どこから狙撃されたんだ？」

そんなことを聞いてきた。

「窓から見て斜め右側の方角100mくらい先の建物屋上だと思う」「そこまで見えるのか、お前。目に望遠レンズでもはまってんじゃないか、化け物だな」

視力が悪いケイは眼鏡の奥で目を細めている。

「そこまではまだ覚えていない。これから先は分らないけど」

視線を落とす。可愛い傘を雨の日でもないのに携帯している自分。傘としても使えるがこれは『武器』だ。自分のために造られた特製の『武器』。

……人を害するための道具。

それは自分も同じだ。裏神官としてのユイ・ヒガ。特別にあつらえられた『人間兵器』。

ユイはぼんやりと思い返す。つい先日、任務で五皇国のひとつ、ヒニアを訪れた際のことを。そこでの任務はちょうど今日と同じく

要人の警護だった。

ヒニアでは貴族の反乱騒動が起こっており、それを沈静するため  
に同盟国セイリオスが協力体制を申し出た。それによって派遣され  
たのがユイと数名の裏神官であった。

他のものがどんな任務についたのかユイは知らないし、知らされ  
てもしなかった。

いつものことなので彼女はごく普通に警備をし、要人の安全を守  
り……そして刺客に襲われた。

難なく切り伏せ、撃退した彼女に要人はおおいに満足し、えらく  
褒めた。けれど彼女は嬉しいとは思わなかった。少しも嬉しくな  
った。

切り伏せた相手は彼女より小さな少年だったからだ。銃を持って  
いたからやむを得なく切り伏せたし、急所はずしたので死にはし  
なかっただろうが、捕まって死ぬよりつらい拷問を受けるのだら  
うと予想はできる。いつそ殺してやったほうがあの少年には幸せだ  
たかもしれない……。

今それを思い出すのは、切り伏せた少年に言われたことと同じこ  
とをケイが口にしたからだ。

『（五皇国に造られた）化け物！』と。

間違いはない。確かに自分は化け物だ。自覚はある。そこかし  
こで陰口をたたかれるのを耳にするたび、全くだと自分で思う。銃  
をつきつけられても脅えず、怯まず、あっさりと叩きのめす自分は  
化け物だろう。

腐るほど言われた言葉でもある。嫌になるほどの事実だ。どうし  
ようもないほどに事実だ。

じつと傘を見ているユイに、不審に思ったのかケイが声をかけて  
きた。

「なんだ？その傘相変わらず使っているんだな、馬鹿げた武器なの  
に」

「うるさい。わたしのような小娘が持っていて違和感がないものと

いう指定で持たされたんだ、仕方ないだろう」

無然とそう答える。ピンク色の傘は実に可愛らしいが、魔法技術・科学技術の粋を集めて作られた、れっきとした武器だ。

柄には仕込み刀、傘の部分は特殊な鋼系で編まれており、防弾、防刃仕様になっている。身にまとっているマントと制服のスカーフも同素材で、うまく使えば切り裂くこともできる武器になる。ようは全身くまなく武装しているということだ。

「違和感がない？……あるだろ、違和感バリバリだ」

ケイは窓の外を視線でさす。外は目に鮮やかな青空で雲ひとつ無い。

「うるさいっ、上からの指示だ、わたしの趣味じゃない」

「セイリオスの開発連中は何考えてるんだろうなあ、俺には理解できん……」

「しみじみお前に言われたくないぞ、機械オタク」

つんと傘でケイの懐をつついてやると彼はあわてて退いた。

「やめろ、お前の馬鹿力でつつかれたらいくら俺が作ったものでも壊れる！」

渾身の力でつついてやろうかとユイは一瞬考えた。

ケイの懐には彼が作った端末がおさめられている。ようは小さなパーソナルコンピュータだ。いつも持ち歩いているらしい。

機械を扱わせたら天才らしいが、ユイはその腕前を見たことが無い。ただ噂では知っていた。イグザイオの天才児。彼が軍にスカウトされてから、イグザイオは飛躍的に技術を向上させたという。

いったい何を作ったのだから興味も無いが、軍の中で作るものなど大体想像がつく。万人が幸せになるようなものではないだろう。

「ったく、これだから脳みそのしわが少ない奴等は……」

呟くケイに蹴ってやろうかと思うユイ。彼女の蹴りなら、骨の数本は折るくらい軽い。

「いじめてほしいのか、ケイ・カゲツ？わたしにはお前が蹴ってくれと言っているような気がしてならない」

「気のせいだ」

「そうかな」

「気のせいだっ！」

こころなしかケイの表情に焦りがあるので、ユイの気は済んだ。本気で蹴り飛ばす気はない。やったら国際問題になるだろうことは理解しているし、荒事にするのも馬鹿らしい。

人を化け物呼ばわりするは、馬鹿扱いするは、不快な相手なのは間違いないが、国家間では重要人物なのだ。たとえ人格に問題があるとしても。

「イグザイオの人間はお前みたいなのばかりか？だとしたらわたしは住みたくないな。いやみばかり言われて気が狂う」

「そんな繊細な神経持つてるのか？セイリオスの『神官』なんてやってる人間が」

じろりと睨まれ、睨み返す。しばらくそうして睨み合ってから、長く見ていたくない顔だと思い返して互いに顔を逸らした。

やっぱりこいつとは合わない、死んでも合わせたくない双方再認識している。

時間をつぶすのも苦痛になってきた。大体和気あいあいと雑談したい相手ではないのだ。

それでももう少しは時間をつぶさないとおかしいだろう。鍛錬やレクチャーをした、と言えるくらいは時間を使わなければ、あとで高司祭に何を言われるかわかったものじゃない。

「……お前端末を持っていたな、ケイ・カゲツ」

「？ああ、それがどうかしたか」

「見せろ」

彼女が言った言葉にケイは愕然とした様子だった。

「……熱でもあるのか、いや、お前にそんな情緒ないよな……気でもふれたか？」

「お前、わたしを何だと……いや、いい。それより端末を見せろ」「いやだ」

…… ユイは無言で傘の柄を引いた。すると銀の輝きが現れる。ケイがひきつった。

「マテ。刀抜くこと無いだろう」

「いやいや、必要だろう？ふふふふ」

不穩に含み笑う彼女にケイは苦い顔でしぶしぶ懷に手を入れた。

「何で見たがるんだ、機械オンチのくせに」

「一応機械操作のレクチャーを受けたという口実を貫くためだ、決まってるだろう。見るだけ見ておかないと言い訳も難しい」

「…… 本当に操作法を覚えるという選択はないのか、お前には」

ケイのつつこみは無視した。携帯すらやつとのユイに、それより扱いのややこしい端末を扱えというのは拷問に等しい。

本当に機械は苦手なのだ。

「見せるのはいいが、代わりにお前の傘見せる」

「傘？何故」

「セイリオスの技術が見たい。あ、あと端末は見るだけだぞ。あちこち触るな。壊れる」

ユイのことをよほどの機械オンチと認識しているのか、ケイは慎重にそう言った。

「触る気はない。見るだけだ」

ユイにもケイの端末をいじるつもりは無い。いじろうにもどこを触ればどうなるかの見当もつかないのだ。うかつに触って壊して、彼に恨みごとを言われるのもごめんだ。

口が達者なケイのことだから、心をえぐるような嫌なイヤミを散々繰り返す可能性が高い。

いくら強化されている裏神官でもそれは心底ごめんだ。

ケイから端末を受け取り、かわりに傘を手渡す。

武器を手放すのは警戒心が薄いなと自分で思ったが、よく考えなくてもケイにやられるとは思えないし、万が一ケイに襲われたとしても、この端末をブン投げてやればいい。

他の襲撃があっても素手で充分なんとかなる。ようは相手より早

く動き、相手を無力化すれば言いだけの話だ。

ケイの端末は、ユイが知っているものよりもずっと軽く、手のひらより少し大きい。

「これはどうやって操作するんだ？ボタンもなにもないぞ？」

どこを押せば電源が入って、どうすれば何ができるのか、ユイにはさっぱりわからない。

「馬鹿にはわからない仕様だ」

傘を広げて、裏側を眺めていたケイはそう返してくる。ユイは無言で端末をかかげた。

「わっ、分った！捨てるな！タッチパネル式だ、俺の指紋に反応して作動する！」

「……そんなことできるのか？」

端末をおろして見つめる。そんな技術があることなど全く知らなかった。

「俺が開発した。もっともまだ発表はしてない。現物もそれだけだ」  
さらりと凄いを言う。新技術を盛り込んだものを無造作に持ち歩き、それをしゃあしゃと他国の神官に言つてのける 並みの神経ではない。

「いいのか、わたしにそんなこと洩らして。セイリオスの神官だぞ」  
「いいぞ、ばらしたかったらばらしても。そのほうが世の中のためかもしれない」

ケイはぱちりと傘を閉じて暗い目をユイに向ける。

「どうせ軍に使われたら、ろくなことにならない」

この傘みたいに。ユイにはそう聞こえた。傘は本来なら雨をしのぐもの、なのにこの傘は、人を傷つけるものとして使われる……命を害するものとして。

「それはわたしに言っているのか」

『裏』神官のユイ・ヒガ。彼女の仕事は護衛だけではない。

「いや……別に」

ケイは苦笑いを口元に浮かべている。珍しい表情だった。少なくとも



ともユイは初めて見る。こんな顔もするのかこいつとちょっと驚いていると、傘を差し出された。

ケイの好奇心は満足したらしい。交換に端末を返す。

どこがどうかさっぱり分らなかった。大体電源すら入っていないのだから理解のしようがない。それでもレクチャーは受けたとの言い訳くらいはできるだろう。

「少し護身術らしき形でも教えてやろうか？」

彼女の申し入れに彼は首を振った。

「いらん。お前の教え方は獣と変わらないだろうからな」

「……お前のイヤミよりは優しいと思うが」

視線の間ではしつと火花が飛んだようだった。

ふっふっふつとかなり不穏に笑いあう。お互いに同じことを考えていることはよく理解できた。

『お前なんか大嫌いだ！！！！』

部屋の外まで響き渡る大声が発せられたのは一瞬後のことだった。「な、なにがあつたのですか?!」廊下から警備兵が駆け込んでくる。いったい何事かと表情が語っていた。また襲撃されたのかと危惧したようだ。

「あ、いや、なんでもない」

いまにも剣か銃を抜こうとしている警備兵を手で制して、ユイはこほんと咳払いをした。

「たいしたことじゃない、意見の相違だ」

ケイも目を逸らしてぼそりと言う。

「はあ……そうですか」いまいち納得のいかない表情をしてはいたが、警備兵はとりあえず武器を納めた。

「さて、親交も深めたことだし、そろそろ閣下の話も済んだころだろう。行くぞ」

ケイはさつさと部屋を出て行った。これ以上ユイに付き合って時間をつぶす必要はないと判断したようだ。ユイも同感だった。これ以上ケイといると本気で彼の横っ面をはりとばしかねない。

「めずらしいですね、ユイ・ヒガ。あなたが声を荒げるなど」セイリオスの警備兵がその声をかけてきたので、ユイは彼を見返した。彼女の視線に警備兵はビクリと身をすくませる。

「す、すいません、軽口を」別段怒ったわけではなかった。彼女はごく普通に視線を向けただけである。それでも兵は彼女を恐れた。彼女が裏神官と知っているからだ。

ユイは無言で部屋を出た。こういう態度には慣れている。付き合い方も無かった。

恐れられる理由は充分に理解している。

セイリオスの裏神官　一般的にはエリートと言われているが、実情は違う。

セイリオスのためならいかなることも厭わない、機械のように感情を持たない『道具』だ。

それこそ人を殺すこともためらわない、必要とあらば子供でも殺さねばならない。

セイリオス　五皇国のために。

そこに自分の意思など無い。必要ないからだ。

窓の外からの笑い声にユイは目を向けた。

青空の下、犬と戯れている少女と少年がいる。

知っている顔だった。もっともこちらが仕事上知っているだけで、向こうは彼女を知らないだろう。セイリオス高司祭の子供たちだ。

たしか年齢はユイと同じ16歳の双子。

同じ年だが、ユイと彼女たちは違う。決定的に違った。彼女たちがいる場所は陽がさす場所。ユイがいるのは……影の中だ。それはケイも同じだろう。もっとも二人ともその場所から出て行く術を知らない。

ここから、陽のあたる場所へどうやって出て行くのか、それ以前に出て行くという、そんな気持ちすら持っていない。

自分にその資格がないとユイは思っている。

手にした傘が今は少し重く感じた。傘の柄の中には刃が隠されて

いる。今までたくさんの血を吸った鋭い刃が。

うらやんだことは無い。うらやんでも仕方ないとわかっている。

彼女には他にできることもなく、その選択肢もないからだ。

だからユイは背を向けた。そのまま歩き出す。自分には陽は当たらない。当てる必要も無い。彼女は振り返らなかった。

庭では高司祭の子供たちが楽しげに笑っている……。

## 序章・合縁奇縁腐れ縁・2（後書き）

ここで序章が終了します。

出会い最悪、仲も悪い主人公二人。

裏神官と人間機械。これから彼女らは？  
続きます。

## 壱章・発端……始まり・1

いつからだろう、ユイはぼんやりそう考えた。

暗い廊下を明かりも靴音もなしにすいすいと歩く。今宵は新月、月すら顔を出さない闇の日だ。夜の住人がひそやかに動く日。そんな中ユイは静かに暗闇に行く。

手にはいつもの傘。外は雨。雨音だけがほとんど、ほとんど耳を打つ、静かな夜だ。

ぼつんぽつんとユイの傘からも雫が滴っている。彼女が歩を進めるたびに廊下に染みが落ちていく。外の雨はかなり激しくなりそうだ。都合がいいといえいい。雨が激しくなれば目撃者も減る。

星明りのみの新月の日に雨が降るとは、ついていないことだ。この館の住民にとって。

ユイは見えるものもないだろう暗闇の中でひよいと何かをまたいだ。

もはや動かない何かを。同時にぐしゅりと濡れた感触が靴裏に伝わるが、彼女は意に介さずそのまま進む。目的は果たしたのだ。長居は意味が無い。

階段まで来たときふと思い出した。そういえばここには息子がいたはずだ。両親は確認したが、息子の確認はしていない。するべきだろうか、と考えたとき視界の隅で何かが動いた。考えるより先に動いている。袖の中に仕込んでいた小さなナイフを投じていた。

「……ッ」悲鳴はなかった。

闇をすかして見ると倒れている人影が確認できる。逃げようとしたのか、それともユイが何者なのか確認しようとしたのか分らないが、愚かなことだと彼女は思う。

ユイの視界にこの暗闇はなんら妨げにはならない。暗視スコープなど必要ないのが『裏』神官なのだから。

近寄って何者なのかを確かめる。顔の造作からこの館のメイドの

一人だろうと判断した。すでに息は無い。ユイのナイフは首に突き刺さっていた。無造作に回収、メイドのパジャマで血をぬぐって、彼女は階段下をうかがう。

……他に誰かが起きてくる気配はなさそうだ。

けれど彼女は階段をおりるのはやめにした。くるりと振り返り、すぐ脇の窓に手をかける。

3階の窓には掛け金すらかかっていなかった。こんなところの防犯など考えもしなかったのだろうか、あるいは警備システムを信用していたのか。システムなどすでに彼女の手によって叩き壊されているというのに。

警備室など真っ先につぶした。中にいたガードマンも同様に2度と喋ることはできない。

いつからだろう、彼女は再びそう考える。雨がたたく窓を開きながら。

いつからわたしはこんなことが平気になったのだろうか？

ばしゃばしゃばしゃ。雨はひどくなり始めている。まず彼女は窓枠につかまり、体をくるりと外へ出した。見る間に雨が体を濡らしていくが構わない。

片手の腕力だけで自分の体を支え、もう一方の手で窓を閉める。それからためらいなく彼女は雨の中に身を投じた。

数秒の自由落下の後、少女は難なく地面に着地している。ぱちぱち当たる雨粒にかまわず、ユイは走り出した。裏庭を走りぬけ、すぐに館を取り巻く塀にたどりつき、足を止めずに跳躍する。

5mはある塀をユイは易々と飛び越えてのけた。外へ出てからようやく傘をさす。

もはやずぶぬれの身には意味がないようにも思えたが、証拠隠滅にはちょうどいい。雨が全てを洗い流してくれる。

彼女のマントから滴る雫は紅い。制服は雨で濡れていたが、マントは違った。傘から滴るものも紅かったが、雨の勢いですぐに色を失い透明な雫になった。

それを見届けてから、ユイは手袋を外した。指紋を残さないため、けれど指先の感覚を鈍くしないために、外科手術に使うような薄手の透明な手袋だ。支給品のため捨てることはできないので、スカートのポケットに突っ込む。

これで見えた目は普通の女子高学年だ。

もつともこんな時間に女子高学年の生徒がうろろしていたら、まず間違いなく補導だろう。ややこしいことになる前にさっさと移動するに限る。

迎えが来る予定の場所は走ればすぐのところだ。彼女の足なら数分とかかるまい。

けれど彼女は走ろうとはしなかった。少し考えたかったのだ。湧いた疑問は瞬間的なものではない。もうずっと前から、度々たびたび思ったことだった。

『何故、こんなことをしなければならぬのだろう？』

それは1人手にかけるたび大きくなる疑問だ。

『わたしはこんなことがしたかったのか？』

未来ある少女の疑問としてはあまりにも痛々しい。

『どうして、こんなことをしているのだろう？』

その疑問を抱くことすら今までではしてこなかったし、できなかったのだ。

『わたしはこんなことをして楽しい？嬉しい？』

否。それだけははっきりと言える。

『なにがしたかったの？』

答えは出ない。彼女はその答えを己が内に持っていない。

ただ分るのはこんなことは嫌だということ。今夜手にかけてのは、見知らぬ家族。

両親と祖父の三人。何故殺すのか、彼女はその理由すら知らない。任務だから詳しく知る必要もなく手を下した。それがおかしいことは気がついている。

『やりたくないこと』なのにやらなければならないこと。

抜け出す方法をユイは知らない。

『裏』神官をやっていることに耐え切れなくなり、逃げたものの末路を知っている。

どうあがいても逃げられないのだ。機密を知っている『裏』神官が一般人に戻るなど許されない。

結果は、自身の死だ。

逃げた者で逃げ延びた者はいない。少なくともユイの知るところではないかった。

いったん裏神官になった者が表の世界に戻ることはほぼ不可能。たとえそれが、なりたくてなったものではなくとも、だ。

そしてユイには裏神官をやめてもどう生きたいのか分らない。それ以外の生き方を許されないように、物心ついたときにはもうすでに訓練が始まっていた。売られたのだと、10歳になったときに聞いた。貧しい家に生まれた彼女を生活に困った親が売ったのだと。

よくある話だった。貧しくてどうにもならなかったのだろう。その後自分の家族がどうなったのか、彼女は聞こうとはしなかった。どこかで幸せにやっている、それでいい。今会っても自分は家族と分らない。覚えていない。ならばいないのと同じだ。

彼女はそう思っている。

それがどれだけ殺伐とした感情なのかも知らずにいる。

雨の中で、彼女の足はしばらく止まった。

『このまま、迎えの車に行かずに、立ち去ったらどうだろう?』

そんな感情がふと湧いた。戻らずにどこかへ行く。

それはとても魅力的な考えに思えた。どこでもいい。何処か遠くへ。

ありえないことだ。どこへ行っても五皇国内にいる限り、すぐに居所は知れる。

五皇国のネットワークは、彼女がアリの巣にもぐっても見つけ出すだろう。



セイリオスの裏神官だけでなく、殺戮者セトラの後継者とまで言われている彼女が、逃げることなど許されない。

……不本意だ。『銀の殺戮者<sup>しろがね</sup>』セトラ・オウンゴン。ユイに技術を教え込んだ女性。

いわば師とも呼べる存在だが、ユイはセトラが嫌いだった。後継など冗談でも嫌だった。

それなのに感情と相反するかのように任務達成率は高く、今回の任務もその腕前を見込まれたからだ。意に反して『セトラの後継』としてのユイの名は、どんどん回りの重鎮に知れていく。

そして回されてくるのは困難な任務だ。『セトラの後継』ならこのくらいは当然できるだろうと。

『……ここから出て行けるかな？』

しとしとと降りしきる雨の中、彼女は足を踏み出した。

向かう先は、一台の車が止まる場所。

外見はごく普通の乗用車、窓がスモークになっているのが少し不自然だ。ユイにはすぐ分った。迎えが業を煮やして来てしまったらしい。

定刻など決めていなかったはずだが、ひよつとすると何かあったのかもしれない。

……もう次の任務という可能性もある。

傘で自身の顔を隠して彼女は息をついた。

まるで監視でもされているかのようだ。いや、実際されているのだろう。どこで何が起こっても即座に無かったことにするために。

彼女はセイリオスにとって捨て駒だ。

代わりはいくらでもいる。身寄りのない子供をつれてくればいいだけのことだ。訓練に時間はかかるだろうがセイリオスにとってさほどの手間ではないだろう。

ただの駒。代わりは利<sup>き</sup>く。いくらでもいる。彼女でなくてもいい。足が重い。車に近付きたくない。こんな風に思うのは初めてだった。

戻りたくない。

でも逃げられない。

どこへも、行けない……。

『ほんとうに？』心がささやく。

『ほんとうに、どこにもいけない？』問いかけは弱く、心もとない。初めての自身の疑問。

今まで任務ばかりで、自分では何も考えてこなかった少女の、想い。

『わたしは一体なにがしたいんだろう？』

夢も希望も抱くことが許されなかった。今も抱いてはいない。けれど何かが確実に彼女の中に芽生えつつある。

ヒニアでの少年の言葉。

いけすかないケイ・カゲツとの会話。

あの日庭で楽しげにしていた双子。

あの人たちと自分の違い。

それは一体、なんだろう。

車が近付いた。窓が開く。

「おむかえにあがりました。ユイ・ヒガ。全て滞りなく済みしましたか？」

無骨な男が顔を出し、彼女にそう聞いた。ユイはうなずくだけで、言葉は発さず後部座席に乗り込み、用意されていたタオルで体を拭く。

じんわりとわずかに紅く染まるタオル。まだ多少返り血がついていたらしい。雨は全てを洗い流してはくれなかったようだ。

確か、と彼女は思い返す。

確か最初はこんなことは嫌だと何度も訴えていた。やりたくない。怖い。嫌だ、こんなことさせないでと子供心に必死に訴えた。血をみるのが嫌だった。

いつから平気になったのだろう。こんなに無造作にやれるようになったのだろう。

多分自分はあの日庭で戯れていた双子でも任務とならばあっさり手を下した。

そしてなんとも思わずに次の任務に向かっただろう。今夜のように。

確かに化け物だ。

自覚しなくては。どうやってもこの生き方以外はできない。  
人間兵器『裏』神官である以上、他の生き方など許されな。

『……ほんとうに？』

わずかに頭を振ってささやきを追いつく。こんなことを考えても意味が無い。

## 壹章・発端……始まり・2

タオルを投げ出し、差し出された携帯を受け取った。任務の最中には邪魔にしかならないからと預けておいたものだ。もつとも持っていたとしても彼女はめったに使わないし、使えない。本当に機械オンチなのだ。持ち歩くのもうつとおしいくらいである。

便利は便利なのだろうが、どうにもなじめない。これで監視もされているのだろう。

そのくらいの技術があることはいくらユイでも知っている。

「メールがきていたようですよ」車を走らせながら男が言う。「こんな時間にメールなんて、彼氏でもいるのですか？」妙に軽口をたたいた男だ。バックミラーでちらちらと彼女を見ているのがうかがえた。興味があるらしい。

こんな少女が裏神官なんてと思っているようだ。確かに珍しいだろうが、珍獣扱いされているようで気に障る。

ユイは相手にしなかった。男はしばらく彼女の気を引こうと話しかけてきたが、やがてあきらめたようだ。

しばらく車中に沈黙が満ちる。窓に流れる水滴を目で追いながら、ユイはふと思い出した。

メール？ わたしに？ 誰から。彼女に恋人など存在しないし、メールなど使ったことが無いのでやり取りをする相手もない。携帯は電話機能だけで手一杯だ。

もちろんこんなもので任務の有無のやり取りなどしない。メールの相手に心当たりなどまったく無かった。携帯を手に取り、見てみる。

どこをどう見、いじったらいいのかも分らない。駄目だ、と彼女はすぐにあきらめた。

どうせいたずらか悪質な勧誘、詐欺メールの類たぐいだろう。

そう見当をつけて携帯をしまった。その頃には降りる場所に着い

ている。

運転手役の男はここまでだ。何も言わずにユイが車から降りるのを男は興味津々で見ている。何か言ってほしいのかも知れないが、彼女に男の興味を満足させる義理も義務も無いので無視して傘を広げる。雨足は大分弱まってきていた。水たまりをよけずに歩く。

背後で車がなかなか去って行かないのを感じ、あの男はだめだな、と思う。

好奇心が強すぎる。いらないことまで聞きたがるタイプなのだろう。

そういう人間は裏に関わると早死にする。

今回ユイが手を下した家族のようにいずれ消される。

まあ、どうでもいいことだ。どこで誰が死のうが生きようが、自分には関係ない。

ひたひたと歩きながら、雨の音に耳をすませた。他には何も聞こえない、夜の静かな雨。

今日泊まるところまではもう少し歩かねばならない。尾行をさけるためとはいえ、面倒なことだが、こんな夜なら悪くない。

ユイ意外誰も歩いていない。辺りは暗く、建物の明かりも見当たらない。

普通なら心細く感じるところだろうが、ユイは違う。

闇は彼女の友だ。長くそうである。闇にまぎれて彼女の存在はあるのだから。

雨も優しい。この冷たさすら、彼女には優しいものだった。それ以上の優しさを彼女は知らないのだから。

己が哀れな存在だと知らない少女。だが、知らなければなんということもない。

……ほどなくして、今夜の宿が見えてきた。教会である。

セイリオスがあがめる『唯一神セイリオス』の教会だ。セイリオスという国の名はこの神からいただいたものだ。教会は問いている。

本当かどうかユイには分らない。大体、神学の教義などともに聞

いたことが無いのだ。学位としては一応修めているが、単位ぎりぎりだった。彼女が持つ学位などほとんど書類上のものだけで、実質、学など無いも同然だ。必要最低限のことだけ分っていれば良い、とあまり教えてもらえなかったこともある。

妙な知識を与えると、なまじ強化されている裏神官だけに、危険なことになりかねないというのが教官サイドの言い分らしい。

別段不便は感じていないし、勉強が嫌いなユイにはむしろ願ったりだったが。

「すいません、『子羊』です。一夜の宿をお貸し願えませんか」  
コンコン、コンコンと一定のリズムでドアをノックする。ノックの仕方が合図になっているのだ。すこししてドアが開き、老女が顔を出した。

「まあまあ、こんな時分に若い娘さんが……どうぞ中へ。まよえる子羊にセリオスの加護を」　そう言つてユイを招き入れた。微笑んでいるが隙が無い。

鍵を閉めて老女は「こちらへ」とユイを案内した。

さほど長くも無い廊下を歩きながら、

「ちよつとアンタ」いきなり若々しい声で老女　　いや、少女は言う。

「聞いたわよ、ケイさんに会ったんですって？」老女の顔のままで。  
「ラニ・ソルト……わたしは今、仕事中」

一応ユイはそう言つて注意を促したが、彼女は聞いていないようだ。

「ケイさんに会ったなら教えてつて前に言つたでしょ？　メールもしたのに返事こないし」

「ああ、メールお前だったの。見てない」

あつさり答えるとラニはふり返つた。「見てないいいいい？？」

地の底から響くかのような声である。しかも老女の顔のまま。

恐ろしいことこの上ないが、ユイは平然として、いくぶん碎けた口調で言い返す。

「わたしが機械に弱いのは知っているでしょ」

「知ってるわよ。でも見るくらいはできるでしょ!？」

「できない。さっぱりだった。一応見ようとはしてみたんだけどね」  
キツパリ言うとなニは黙った。気配から察して怒っていると言うよりは、呆然としているようだ。

「……アンタ、本当に現代人？」疑わしげにそう言ってきた。

「そうだよ」

「いまだきメールもできない奴なんていないわよ？」

「いや、わたしできないけど」

ここにいないかと自分を指差してみせるとなニはまた黙り込んだ。

「原始人……？」しばらくしてからぼつりとそうつぶやく。失礼だ。失礼だが、ユイには言い返せない。

「そんなにひどいのかな、わたしの機械オンチは」

本人としてはとくに困ったことが無いので、気にしていなかった。ビデオの録画ができなくても任務に支障などないだろう。

「ひどいというか……ふつうじゃないわ」断言された。「おかしいわよ」とまで。

むう、とユイは眉を寄せる。ケイに言われたぐらいではなんとも感じなかったが、同僚に言われるとまずい様な気がしてきた。なニ・ソルトはユイと違って、情報収集が主な任務と分っている。

「まあ、見てないのは仕方ないけど……裏神官アンタがそれじゃまずいわよ。携帯くらいは使えるようになるのね」そう言っとなニは首の下に手をいれ、マスクをはぎ取った。

あらわれたのは、ユイとあまりかわらない年齢の金髪の少女だ。なかなか美人である。

「アタシがケイさんのこと聞くと便利だし」そう、強気ににっこり笑う。

「結局それ？」

ユイはげんなりした。なニ・ソルトは奇特なことにケイ・カゲツ

に想いを寄せているらしい。ユイとしては、あんなイヤな奴を好きになるなんて理解できない。

以前ラニにもそう言ったことがあるのだが、ラニは「そこがいいんじゃない。ユイはまだ子供だからわかんないのよ」とハート乱舞で言い返してきた。

……わからなくていい、と思ったことはラニには内緒にしている。「で、ケイさんどうだった？ いつもどおりかつこよかった？ 素敵だった？」やつぎばやに質問してくるラニの勢いに、少々どころでなく引きながらユイは首を振った。

「わからない。いつもどおりだったとは思っよ。イヤミ言われたし」自分がケイに関して言えるのはそのくらいだ。大体嫌いな相手だ。犬猿の相手でもある。

「いいなあ、ユイばかりケイさんに会えて」唇を尖らせるラニは普通の男なら、ころつと転がりそうなほど愛らしい。

「そのうち会っ機会はあるよ」

ユイはそう言って会話を終わらせるつもりだったが、ラニは離してくれなかった。

「ねえ今度ケイさんに会ったらアタシのメルアド教えてきてよ」と携帯を取り出している。

ユイはため息をついた。

「他国の男とメール交換するつもり？ 知れたらどうなるか考えている？」

「大丈夫よ！ 同盟国だし！ なんとって相手はケイさんだし！」と理屈になっているのかいないのかよく分らないことを言う。

「……一応、わたし達は『神官』なんだけど、わかってる？」

念のため、そう訊いた。「わかってるわよう」とラニはまた唇を尖らせる。彼女のクセだ。

「ケイさん相手なら文句も無いでしょ。だってあの人をセイリオスに引き抜けたらすごい功績よ？ その可能性を考えると反対もされないと思うわ。べつに情報もらすわけじゃないし、ただ個人的にメ



ール交換するだけよ。それでケイさんがアタシのためにセイリオスに来る気になったら万々歳」うふふと幸せそうに言うラニにユイは突っ込めなかった。

……ケイ・カゲツが断るという可能性は考えていないのか、と。あまりにもラニが幸せそうなので、水をさすのも悪いような気がして黙る。夢を抱くのはいいが、巻き込まないでほしい、とも思った。あまりケイには関わりたくないのだ。任務でも嫌なのに、この上個人的にまで関わるのはまっぴらだ。

このままラニがケイとメール交換を始めて、あまつさえうまくいつて、ヤツがセイリオスに来て仕事仲間なんてことになったら。

「……………っ！…！」

寒気がした。しんそこ嫌だ。

「ラニ・ソルト」

「なに？」

「もういいだろうか？ 休みたいの。寒気がしてきた」

寒気にかこつけて話を終わらせようとする。

「あら、珍しい。雨に濡れたせいかしら」さすがにラニも話を打ち切って部屋に案内してくれた。

「シャワーがついているから、浴びてあったかくして寝るのよ？

アンタに風邪でもひかれたらアタシがアンタの代わりしなくちゃならないんだから、風邪なんかひいちゃだめ」実際にラニがユイのかわりに任務につくなどありえないだろうが、彼女なりの心配の仕方なのだろう。言い方はあまり可愛くなかったが。

「あ、それから明日携帯の使い方レクチャーしてあげる」などというらんことまで言い出した。

「いいよ……使わないから」

ゲンナリとそう答えるとラニは眉をつりあげた。

「だめ！！ アンタにはケイさんにアタシを紹介する義務があるのよ！！」いつからわたしはそんな義務を負ったのだろう？ ユイは心にそう問いかけた。

答えは無い。あるわけがない。ラニが勝手に、かつ強引に決めたのだから。

「じゃ、明日ね。おやすみ、いい夢をセリオスが与えてくださることを」祈りの言葉を残してラニは退室した。閉められたドアを見て、

「わたしに選択権は無いのか……？」

ユイはつぶやいたが、もう遅い。ラニの勢いに押し切られてしまった。あの強さはどこからくるのか、時折真剣に聞きたくなる。

彼女を見ていると恋するというのはすごいと思う。かつてのラニはあんなに明るくなかったし、気も弱かった。今からは考えられないくらいだ。

「……あの男のどこがいいんだろう……？」

マントを外しながらユイは心底からつぶやいた。自分はまだ恋の一度すらしたことはないから、よく分っていないだけなのだろうか？ しかし、あんな男に恋するくらいなら分らないと思うのもまた事実だ。

『裏』神官などやっていると恋なんてしている暇など無いとも思うが、同僚のラニは立派に成立させている。片思いでも恋は恋、ある意味超人だとユイは思った。

よく両立させる力があるなあと、感心してしまう。

### 壱章・発端……始まり・3

「ラニ・ソルトは、すごいな……」

彼女は機械による身体改造を受けていない。もしケイと交際を始めてうまくいってもなんら支障はないのだ。普通の交際というのは難しいだろうが、もともと裏神官をやっている彼女と、軍の要職についているケイなら、お互い多忙なことは間違いないがさほど違和感などなく付き合っていけるに違いない。

ユイが橋渡しをしてやるのは、セイリオスのためにもなることだろうが、はつきり言って気は進まない。

携帯をいじるのも、ケイにラニの連絡先を知らせるのも、ひたすら厄介なこととしか思えない。大体、ケイが素直にラニに連絡するだろうか。

「……うまくいくと思えない……」

あの冷血男が、にやけた顔でラニにメールするところとか、デートでラニと腕を組んで歩いているところなんかを想像しようとして、できなかった。

「き、気色悪い」

真剣に鳥肌を立ててしまうユイだ。比喻でなく寒気がしてきたので、考えるのをやめた。

まあラニが本気というのは良く分っているので、メールのあて先だけでもケイに教えるくらいはやってもいい。それから先は当人たちがすることだ。

なにせユイはこういうことにひどく疎い。今だ初恋すらしたことがない辺りで知れよう。

ラニに相談を持ちかけられても答えようが無い。もっともラニも相談というよりはケイに関する報告を聞きたいだけのようだが。

しかし、あの熱意はまるで芸能人でも追いかけているかのようだ。裏神官の任務を、ひと時でも忘れたいからではないのか、ともちら

りと思った。

ラニのような娘には裏神官の任務は酷<sup>こく</sup>すぎる。彼女はユイと違って人を傷つけることを怖がる。人の痛みをきちんと感じることできる娘だ。

壊れているようなユイとは違う、優しい娘なのだ。だから特性なし、特殊戦闘には向いていない、と情報収集にまわされた。それでもいろいろ苦労があるのだろう、時折泣いていることをユイは知っている。

他の人に心配をかけないように、一人静かに声を殺していた彼女はとても優しいと思う。

自分とは違う。ユイはそう思った。自分は人のためには泣けないだろう。

そもそも泣き方も忘れてしまった。この先泣くこともおそらくない。

「ラニ・ソルトはすごいな」

もう一度そうつぶやいて、ユイはベッドに横になった。制服は着たまま、スカーフや六芒星の髪飾りを外す。特にスカーフは外さないと寝ている間に首が切れる可能性があるのだ。スカーフを枕の下にいれて目を閉じる。

眠気はすんなりやってきた。いまさつき人をこの手で仕留めてきたのに、ユイの心に罪悪感はない。そんなものを感じる心すら日々の任務で削り取られていった。もう残っていないのだ。この心には、罪の意識すらない。壊れている。

ユイはそれを自覚していた。眠気の中、うつすらと思う。

なんとも思わないことは、果たして幸せなことなのだろうか？

心の痛みも、他人の苦しみも、悲しみも、わからなくしてしまうのは幸せか？

（それはほんとうに『

』？）

寸前に思ったことは眠りにかき消された。

翌日、早朝いつもの時間に目が覚め、シャワーを浴びてから身支度をしているとドアがノックされてラニが顔を出した。金髪美少女ではなく老女の顔で。

「おはよう。食事の用意ができてるわ」顔は老女、声は少女で話しかけてくる。違和感はとんでもない程にあるが、ユイは平然と対応した。

「ありがとう。少し待つて。すぐ支度する」

支度といってもスカーフを巻き、髪飾りをつけ、マントを羽織るだけだ。制服は寝巻きとして使っていたにもかかわらずしわ一つない。特殊素材でできているだけあって、めったなことでは着崩れもないのだ。それでも一応パタパタと手で軽くはらって整える。

置かれていたブラシで髪をさっとかして、支度は終了。

「おまたせ」

「早いわね……」あきれたようなラニの声にユイは少し首をかしげる。

「早いのが悪いの？」

「悪くはないけど」まじまじと顔を覗き込んでくる。

「な、なに？」

「かわいい顔してるのに……」ぶつくさと呟く。

さすがにユイも眉を寄せた。何が言いたいのか良く分らない。

「何の話」

「いくら神官だからって、アンタもうちよっとおしゃれに気を使いなさいよ、年頃なんだから！」……どうリアクションをとればいいのか。

人間兵器がおしゃれ？そんなことをしてどうする。

ユイは明確に必要性を感じないのだが、ラニは熱弁をふるう。

「いつ見初められるかわからないのに！ 特にアンタは各国の偉い

人と会うことが多いんだから、いつプロポーズされてもいいように身だしなみには気を使わなきゃ！」コブシを振り上げる彼女の熱意はどこからくるのか。根拠はないだろう、間違いなく。

「いや、ラニ・ソルト？　ちょっと待て？」

とめても無駄かなと感じつつ、声をかけてみる。

「ありえないだろう、それは」

「なんでよ？　アンタ可愛いもの、絶対その内どっかからお声がかかるわよ」妙に自信たっぷりと言いきっている。理解できないほどの自信だ。

「まあべつたり化粧しろっていうわけじゃないから。でもちよつとくらいは化粧も覚えたほうがいいわよ。せつかく可愛いんだから」老女の顔でウィンクしてそんなことを言う。

さっぱり理解できなかった。裏神官がおしゃれなどして意味があるのか。

情報収集ならば色仕掛けなどを考えたが、ユイの仕事は『暴漢』の『排除』だ。言わば肉弾戦闘ばかりである。自分より遥かに大きい男でも躊躇なく叩きのめしてのけるユイを、どこの誰が見初めるというのだ。こんな化け物を娶りたいというのならばよほど奇特な人物だろう。いるわけがないし、ユイ自身にそのつもりなど毛頭ない。微塵もない。

「ありえないと思うが……」

部屋を出て、キッチンに向かいながらつぶやくと、ラニは反論してきた。

「だから、なんでよ？」こっちこそ理解できないと言いたげだ。

「神官だぞ、わたしは。しかもセトラ・オウンゴンのなんちゃらか言われてるくらいの」

「いいじゃない、別に。機械改造受けてないんでしょ？　セトラ・オウンゴンは機械化してるだろうけど、アンタはまだ投薬くらいでしょ？　なら子供産むのだって支障ないはずだし」……どうも会話にずれがあるように思えてきた。ラニの視点と自分の視点とではそも

そも見ている角度が違うようだ。

「だーいじょうぶよ、アンタは可愛い！ アタシが保証してあげる」  
などと言われても困るだけなのだが、反論するのも無駄のような気がして黙ってラニの背後で苦笑した。

まあ、悪口ではないし、あまり拒否するのも悪い気がしてきたので、とりあえず礼を言うことにする。

「そうか、ありがとう」

「……無感情に言われてもあんまり伝わってこないわねー……」って  
アンタ本当にそう思ってる？ めっちゃめっちゃ棒読みだったわよ？」  
疑わしげな声が返ってきた。

「わかった、もう言わない」

「……それもいやだわ……」 今度はムツとした声が返ってきた。  
どうしろと言うのだろう。対応に困り、無言で通す。

キッチンでテーブルについて、ようやく違うことができると思っ  
たが、ラニは離れなかった。テーブルの上では野菜たっぷりのコン  
ソメスープ、とろけているチーズが乗ったパン、カリカリのベー  
コンエッグなど質素だが味は悪くないだろう食事が並んでいるのに、  
食べられない。

「アンタ好きな人とかいないの？」……話題を変えたい。ユイは心  
底からそう感じていた。

これみよがしにぶつくさと普段はやらない食前の祈りをささげて  
ごまかそうと試みる。

「ねえ」ラニは許してくれなかった。仕方なく答える。答えなけれ  
ばいつまでたつても食事にありつけそうにない。

「いないよ……前にも言ったじゃないか、興味がないって」

「それじゃ困るのよ」唇をとがらせる彼女。

「困る？ 何故」

ユイの異性観で何故にラニが困るのだ。これはおかしい。さすが  
にそう思っただけでラニを睨む。

「上層部からか？ わたしの何を調査している？」

「なにも。これはアタシの個人的興味」うつふつとラニは異常に楽しそうだ。

「ほんとうに？」

「ほんとうに」うそだな、とユイは確信した。ラニの目がわずかに泳いでいたからだ。ユイの強い視線に気の弱いラニが隠し通せるわけがない。

しかし、これ以上彼女を問い詰めても彼女を追い詰めるだけだろう。上層部の命令で何かを調べているのなら、口にできないことのほうが多いはずだ。

ユイはわかったと答え、食事を始めた。心の中には疑問が広がっている。

上層部に調べられるようなこととは何だろう？ わたしは気がつかない内に目をつけられるようなことをしたのだろうか？ 調査が入っているのなら遠からず聖都に召集されるだろう。

査問会を受ける羽目になるのだろうか？

しかし一体何を？ 任務はごく普通おこなに行っている。失敗もしていない。大体失敗はそのまま死を意味するのだ。ここにこうしている以上失敗はありえない。

2日に一度の定期報告もちゃんと入れている。命令無視もしていない。

調査を受ける理由は全く思い浮かばなかった。まして自分の異性観など調べてどうするのか、さっぱりわからない。

食事が終わるころにはユイは考えを捨てた。調べなければ調べるといい。

困ることはないし、言いがかりで処罰されようと構わない。

自分にこだわりなどなかった。人の命をなんとも思わないようにユイは自分の命もなんとも思っていないかった。いずれどこかで死ぬだろう。早かろうが遅かろうが構わない。

どうせ他にやりたいこともない。ならば命に価値もない。

いっそ、とちらりとテーブルの隅に置かれた聖書に視線を向ける。



聖書にある一説が頭に浮かんでいた。

禁忌・破滅・ふれてはならぬもの。それはありふれた終末の伝説。五皇国のどの国にもある、けれどどの国でも解釈が違う、禁忌の存在。

セイリオスでは、太古に繁栄していた「銀砂ぎんさの民」が生み出した、世界を滅ぼすほどに強力な最終魔術だと言い伝えられていた。

そんなものが禁忌の地には封じられている、と。

『禁忌に触れて全てを無にしてしまおうか』

そんな考えがユイの心にするりと入り込んだ。一瞬後には彼女自身によって否定されたが。

世界を滅ぼすほどに強い魔術などありえるはずがない。大体、禁忌の地にはなにもない。『裏』神官になってから一度行ったことがあるのだ。

五皇国の中心、ラグドラリヴと名付けられた土地だが、本当に何も無い場所だった。

あるのは森、川、草原と自然だけだ。住んでいる者もない。禁忌の地と言われている所に住む奇特な者などいないのだろう。たとえそれが迷信でも、やはり気持ちのいいものではない。

『全てを滅ぼす力が眠る地』などと眉唾がいいところだ。それでも行きたがる者はまずいない。住むなどもつてのほかだ。

ユイとて好きで行ったわけではなかった。

指名手配になっていた逃亡犯が入り込んだせいで、立ち入り禁止のラグドラリヴに行く羽目になったのだ。行ってみればなんと言うこともない、ただ自然の広がる場所だった。

バカンスや休息には向いているだろう。宿泊施設などはないからアウトドアの心得がないと不便だろうが。

行ってみてなんでこんな所が立ち入り禁止区域になっているのか、しみじみ疑問に思ったものだ。その時の指令も『逃亡犯を見つけてもラグドラリヴ内で排除はまかりならない。必ずラグドラリヴから出てから処分すること』などという不思議なものだった。

裏神官にはどこだろうと犯罪者を『排除』する資格があるというのに、その時はその特例すら認められなかった。  
『ラグドラリヴを血で汚してはならない』 そうも言われた。  
何もない場所をなぜそこまでして護るのか？

## 壱章・発端……始まり・4

大体、各国の言い伝えがバラバラな時点ですであやしいだろう。セイリオスでは前述の通り、『銀砂の民』が残した最終魔術。

イグザイオでは百年前に存在した天才科学者が発狂し、発明した恐るべき兵器が封印されている、らしいとのこと。

女王国家シルメリアでは古代の血まみれ王子に生け贄にされた者たちのミイラが、死してなお呪いの声を上げている場所と言われている。

これだけです。眉唾なのに、あとの二国でも言い伝えは全く違う。

和の国ホマレでは荒ぶり猛る火の神が眠っていて、眠りを妨げたものには灼熱の業火で答えるという。

そして水上国家ヒニアでは決して触れてはならない致死の呪いがかかった宝玉が安置されているという言い伝えだ。

各国実にバラエティに富んでいる。富みすぎていて、かえって疑わしい。

共通しているのは『世界を滅ぼす力』のみだ。

そんな言い伝え今時子供でも信じない。大方国の威光を示すための作り話なのだろう。

世界を滅ぼすようなものでもちゃんと封じているのだよ、だから我が国はすごいのだ、と。

笑い話だ。ラグドラリヴには何も無い。彼の地に破滅の力など存在しないのだろうに。

「……ラニ・ソルト、一つ訊きたい」

食事を終えて食器を片付けながら、そう言つとラニはわずかにぎくりとした。

先ほどの話を蒸し返されると思ったらしい。

「な、なに？」視線を逸らしている。

「ラグドラリヴがなぜ禁忌の地なのか知っている？」

突然そう質問されたのはラニの予想外のことだったのだろう。話題としても全く関連性がないのだから当然だろうに、それがおかしく思えるほど彼女は目に見えてうるたえた。訊いたユイのほうに驚いたくらいだ。

「な、何よ急に？」動揺を隠そうとして紅茶を口に運ぼうとする手がかすかに震えていた。

「いや、別に意味はないの。ただなんとなく聖書が目についたからあの中でラグドラリヴのことが禁忌の地だと表記されているのに、前に行ったときそんなふうには見えなくて」

取り繕うようにそう言いつつ、ユイは彼女の様子を観察していた。ユイの言葉にラニはほっとし、動揺はすぐ消えたようだが、彼女もこちらをうかがっている。

何かの含みがあるのではないかと。

ユイにはその反応だけで充分だった。今の今までラグドラリヴのことは全て迷信、世迷言よめごころだと思っていたが、情報収集が主のラニがああいう態度を取るということは、あそこには何かがあるのだ。伝説とは笑えないものが存在しているのだ。

「あそこはいいところだったよ？ ほのぼのしていて牛でも飼って牧場をやるのによさそう」

「そ、そう……アンタ凄いいこと言うわねえ、禁忌の地で牧場なんて……」

なにかを恐れている。裏神官のラニが。

一体、何を。

「ともかく、あそこに興味を持つなんてことやめときなさい。いいことないわ」ひらひらと手を振ってラニは会話を終わらせた。

逆効果だったことを彼女は知るまい。

ユイは今までの自分の考えが幼かったことを知った。ありえないと思うことにこそ真実があるのではないか？

子供でも信じないようなでたらめを並べ立てて、五皇国は何を考

えている？

ラグドラリヴ……あの場所にはなにがあるのだろう。

もしか本当に世界を滅ぼす何かが存在しているのか？

魔術、兵器、ミイラ、神、呪いの宝玉……そのいずれかが本当に存在していたら。

それを解き放つことで本当に世界が終わったら。

………ありえない。そう思いつつもユイはその考えを捨てることができなかった。

世界が無くなるという考えは何故かとても魅力的に思えた。何も期待していないから、何もかも無くなってしまうことはとても素晴らしいことなのではないか、と。

食器を洗いながら、ラグドラリヴの風景を思い起こす。

あの時は平和な場所に見えた。それはごく表面だったのかもしれない。見えないどこかで何かが行われているのかもしれない。

調べてみたら、真実がわかるだろうか？

どう調べよう？

自分は情報収集には向いていない。他人に協力など頼む気はなかった。

後ろでテーブルを拭いているラニにはもちろん駄目だ。へたをすれば彼女から本部に洩れる。ラグドラリヴを調べているなどと知れたら、どんな処罰を受けるかわかったものではない。最悪、処刑だろう。

ユイがそんなことを考えているとは知らずに、ラニが声をかけた。

「ユイ、本部に連絡入れときなさいよ、まだアンタから報告してないでしょ？」言われてああ、と思い返す。そう言えば任務成功の報告をしていない。昨夜の迎えの男とラニから報告は入っているだろうが、一応ユイ本人にも報告の義務があるのだ。

「わかった。しておく」

答えたとき、玄関の方からノックの音がした。今日は礼拝の日で

はないはずだ。敬虔なセリオス信徒なら、休日平日関係なく訪れて祈るので、誰かが来ても不思議はないが。

「アンタは奥に行つてちゃんと報告するのよ」先ほどとは一変して老女の声をつくり、ラニは玄関に行つてしまった。

報告は端末を使わなければならず、本人がやらなければ意味もない。機械オンチなユイには気の重い作業だ。

仕方なくといった様子で廊下を歩き、端末が置いてある地下へ向かう。ドアには暗証番号が必要な鍵がかかっている。これはどこへ行つても共通だ。死ぬ気で暗記した19桁の数字を入力する。個人個人にあてがわれている番号でこれが入力されると誰がどこにいるかそれで皇都本部に知れる。ようは首輪だ。強力な力を持つ裏神官を野放しにしないためのもの。

「……面倒くさい……」

呟きながら中に入る。ユイが足を踏み入れた瞬間に室内に明かりがとる。先ほどの暗証番号と人の体温に反応する仕組みらしいが、機械オンチに理解することは至難の技だ。

魔法的な技術も絡んでいると聞いたことがあるけれど、魔術師でも能力者でもないユイにはやっぱり理解できない。少し奥に入ったところに仰々しい機械がどっしりとかまえている。あちこちにパネルやボタンがついていて、一見何の機械か分らないようになっていいる。一定の順序を踏まないと起動すらしない。どこか一箇所を押せば起動するような市販品の機械とは違う。

機密情報をやりとりするわけだから当然と言えば当然なのだろうが、このとつつきずらさはどうにかならないのか、と触るたびにユイは思う。

「ええと……まずは、ここからで……」

ここのパネルにさわり、あっちのボタンを押し、隙間から指を入れて外からは見えないスイッチを入れて 起動させるだけで順序が7ついる。

それからさらにドアを開けるときに入力した19桁の数字を入れ

て、ようやく起動できるのだ、やり終わるまでにユイはいつもどこかを間違えてしまう。

間違えたらもう一度最初からなのでげんなりする。間違えたことも本部には伝わるため、大概たいがい繋がったときには怒られる羽目になるのだ。

「何年『神官』をやっているんだ？ユイ・ヒガ。いい加減に端末の使い方を覚えろ」

今回も本部のオペレーターに言われてしまった。反論できないのでさっさと済ませようと手短に報告する。

「目標の『排除』は完了。なお、目標以外の『削除』は……」

淡々と昨夜自分が行ったことを述べていく。そういえばあの家の息子はどうしただろう。

命じられた任務は両親と祖父の『排除』だったから、とりたてて気にしていなかったがひよつとして一緒に『排除』したほうがよかったのだろうか。

なんなら今からちよつと行ってきて後を追わせてやろうか。残るよりはシアワセかもしれない。人の命などなんとも思っていないようなことを考えながら、言葉を続ける。

「ご苦労だった」報告が終わり、あとはいつものセリフ「追って次の指令があるまで現状で待機」が来て終わりだろうと予想していた。「ユイ・ヒガ。次の指令だ」しかし、休みなく次の任務があるという。

「次？……なんです」

珍しい。いつもなら1日から1週間は待機時間が与えられるのに、別段動くことに不都合はない。ないがムツとする。いいように使われているのが分るのだ。

「今すぐカンジューラへ向かい、そこで次の任務まで待機せよ」カンジューラ……隣町だ。

「？　いますぐ、ですか？」

「そうだ。この通信を終えたらすぐに向かえ、とのことだ。これは

致命である「腑<sup>ふ</sup>に落ちない指令だ。

待機ならここでも充分だろうに、わざわざ隣町で休暇をとらねばならない理由とは何なのだろう？

「わかりました」

了解を伝え、通信を切る。それ以上の情報など訊いても答えてはもらえまい。

聞く必要はない、といわれて終わりだ。

道具に答える義務などないということなのだろう。使われる身だ、仕方がない。

指令に従って隣町に移動しようとユイは地下室を出た。

出たところでラニにばったりでくわした。

「あ、済んだの？」訊かれてうなずく。

「隣町に移動する。世話になった」

「へ?!」ラニはひどく驚いたようだ。ただユイが移動するということだけで。

「? 指令があつた。おかしい?」

「あ、いえ、おかしくないけど……」唇を尖らせている。

「急だなあとと思って」何かが不満らしい。彼女が何を不満に思っているのかユイにはさっぱり分らなかった。

「なにか都合が悪いの?」

ふくれつつらの彼女にそう問う。

「うー、わるくはないけどお……」歯にものがはさまっているかのような物言いだ。

「なに?」

無表情でラニにつめより、はっきり答えると雰囲気<sup>オーラ</sup>が促<sup>うなが</sup>している。

「……アンタに携帯のレクチャーとあと彼氏のタイプを訊こうと思つてたのよっ!」つめよられてラニは悲鳴のような声で答えた。ユイの指先が傘の柄を握っていたからだ。

「かれし?」

目が点になるユイである。そんなもの訊いてどうするのだ?



「何故？」

「個人的興味……」消え入りそうな声でラニが言う。目線は落ち着きなくユイの手元を（つまりは傘の柄を握る手を）見ていた。ユイに本気で抜く気はないが、充分すぎるほどの脅しになっているようだ。

「ふうん……『こじんてききょうみ』ねえ」

納得したわけではないが、指令を受けた身だ、ぼんやりしてられない。

「まあいいや、今度聞かせてもらおうから」

「こ、こんど？」どもるラニ。

「そう、今度。じゃあまたね」

笑いかけてユイは身を翻した。ラニには肉食獣の笑みに見えたのかもしれない。

笑顔を返そうとしてひきつつていた。

かまわずにまず昨夜泊まった部屋へ向かう。

任務に向かう前に自分の荷物を置きっぱなしにしていた。ベッドのわきに放り投げておいたクマのついた（これも上からの配給品。どうやら上はユイにはクマグッズと決めているようだ）ウェストポーチをつけて、それから裏口へ向かう。

ラニはぶつぶつ何かを呟きながらついてきた。耳を澄まさなくても「武器に手をかけることないじゃないのよう」とか言っているのがわかる。さっきまで自分のことを可愛いとほめていたのに完全にふくれてしまった。

同じ裏神官なのに、自分はそんなに怖いだろうかとユイは内心首をかしげた。確かにユイとラニとではユイのほうが圧倒的に強いだろう。受けた訓練量が違うし、経験も遥かに違う。ラニのほうが2歳ほど年上だが、実戦経験量はユイのほうが遥かに上だ。

しかしそれは単に向き不向きというのがあるだけの話で、ラニが弱いというわけではない。一般人から見たら充分ラニだって強い部類だ。ただ、上には上がいるということ。

ユイにもまだ勝てない相手がいるように。

「気をつけてね」なんだかんだいいつも、ラニは裏口まで見送りに出てくれた。しわがれた老女の声でまたねと言い、ユイに紙袋を渡した。

一見すると、なにかお菓子でも入っていそうな質素な紙袋だが、本部からの給付金　　ようは給料が入っている。一定の任務をこなす度にこうやって支払われるのだ。

普通は現金でなく口座に自動的に振り込まれるものが一般的だが、ユイはいつも半額を現金でもらうことを希望している。銀行などに行くヒマがないからだ。安全に引き落とすことができることにいつもいられるとも限らない。

内乱が続き、銀行などがまともに機能していない地域に行くことだつてあるのだ。引き落とすことができずに裏神官が飢え死になどしたら笑えない。現金は必要だ。こんな仕事をしているといつ何が起きてても不思議はないから。

……自身の死も。

無造作に紙袋をウエストポーチに詰め込んで教会を後にした。

「あとでメールするからちゃんと見なさいよ？」とのラニのささやきは悪いがかなう事はないだろう。

その時はそう思っていた。

自分が機械オンチだから。

ただそれだけのつもりで、そう思っていた。

手を振るラニの気配を感じながら、振り返りもしないで教会を後にした。

移動手段は特に指定されていないので、ごく普通にローカルエリア線を使って隣町カンジューラへ向かう。

切符を買って改札を抜け、適当な席を見つけて座った。平日の車内はすいている。通勤や通学に速度の遅いローカルエリア線を使う者はあまりいないのだろう。

ただ、料金は安いので急ぎの用がないときはこれを使う人は多い。ユイも今は特に急ぎではないだろうと見越してハイエリア線でなくこちらを使った。

六芒星がついてはいても、よく知らない人から見れば、彼女の見た目はどこかの学校の女生徒で通るだろう。マントをつけているので魔術校の生徒とも見える。ほぼ寮生のため、ほとんど外に出てこない魔術校の生徒と勘違いして、物珍しげに眺めてくるような失礼な者もいたが、声をかけてくるほどでもなく平穩に隣町に着いた。

着いたはいいがこれからどうしようとエリア前で考え込む。ここには裏神官の滞在している教会はないので、滞在する場所は自分で調達しなければならない。

幸い、給金が入ったばかりなのでどこに行こうと余裕はあるが……カンジューラにくるのは初めてなのでどこになにがあつてどの程度の施設で値段はどのくらいなのか、目安がわからない。

エリア前にはたいいてい街や市の案内魔術板があり、訊きたいことがあればたいいてい答えてくれるのだが、この案内板は壊れていた。何を訊いても「イラストシャイマセ」を繰り返すばかり。人に尋ねるしかないが気は進まない。以前家出ではないかと疑われたことがあるからだ。

平日。

しかも制服姿。

そのうえ女の子一人。

あまつさえ少し大きめなウェストポーチをつけて宿泊施設の有無を訊く。

その軽装な格好から旅行などの様子でもなく、保護者もついていないようだ。

おまけに曇ってもいないし、天気予報でも雨が降るなどとは言っていないのに傘を持って。

どう見ても変である。

まともな大人なら保護しようとするだろう。

これだからこの武器（クマさん傘）嫌なんだ、とユイは肩を落とした。

晴れている中で傘を持ち歩くことがどれだけ違和感があるものなのか、上層部の連中は考えたことがないに違いない。クマ傘自体は可愛いからそれほど嫌いではないけれど、どうにも普段持ち歩くにはちと変だ。

せめて折りたたみ風ならまだ「雨が降ったときのために」と言い訳もできるだろうに。

「……ここでもうしても仕方ないよな」

つぶやいてユイは歩き出す。人に訊くのはやめにした。補導されるのはまっぴら御免だ。

裏神官ともあるうものが一般の人間に補導された、などと笑い話にもならない。

下手をすれば再訓練だ。それも御免である。あの厳しい訓練をもう一度やれというなら補導しようとしてくる人間を切り捨てて逃げる。

始末書や査問会のほうがずっとましだ。

歩いているうちにどこかで案内板があるだろうと見越して、適当な方向に向かう。

指令が「どこそこのホテルで待機」というものならもう少し楽しかったなと今更思い返した。

それにしても、今までにない妙な指令だった。何かをしるという

わけでもなく、ただ移動しろなどとは。

そのうち任務が言い渡されるのかもしれないが、それならば滞在先が指定されるはず。

連絡先も分らない所で待機など異例である。一応携帯もあるし、定期連絡は入れるつもりだが、ここでは端末を探すのも骨だ。

自分で端末は持ち歩いてはいない。過去何度か壊したことがあり、それ以来上層部は彼女に端末を持たせようとはしていない。やたら高価な端末を壊されるよりは懸命な判断ではあるが、どちらにせよ機械オンのユイには不便にさほどの差はなかった。

携帯でいろいろ検索をかけられるのは知っているけれど、機械オンのユイには荷が重い。

結局案内板を探して歩き回るのが彼女にとって一番無難なのだった。

歩き回っているとやがて観光案内所と看板が出ているところを見つけた。これ幸いの中に入ってみる。

小さな町だが観光できるところはそれなりにあるらしく、中は観光地のみやげ物が並んでいた。休憩もできるようにスペースがとられていて休めるようになっていた。

宿泊施設を探す前に、少し見ていこうかという気になった。ヒマだし、やることもないので、時間つぶしにはいい。

ジャムらしい瓶が置いてある棚を覗き込んでみる。この町の名産はポポロという果実のようで、瓶にはポポロジャムとあった。りんごのような梨のような形の黄色い果実の絵がラベルに描かれている。ジャムも黄色い。なんとなくすっぱそうな印象を受けた。

「試食してみますか？」売り子に声をかけられ、首を横に振る。

ジャムなど買っても持ち歩くのが億劫だ。大概一人で行動する上に、ひとつ所に留まることは少ないのだから、全部食べ終わる前に傷んでしまう。食べ物など日持ちすれば味は二の次だ。

ひどく味気ないことを考えていると知らずにユイはみやげ物を見ていく。ほとんどが食べ物だ。乾物なら買ってもいいかなとぼんや

り考えたが結局何も買わなかった。

買物にあまり執着はしていない。同じ年頃の同僚などはふとこ  
ろが暖かくなると、嬉々として買物に出かける。

ところがユイは違う。別段欲しいものもなく、やりたいこともな  
いので金の使い道もない。服なども動くのに邪魔にならなければそ  
れでいいという観念の少女なので、金の使い道は任務時の宿泊先や  
飲食、交通費くらいだ。

任務での出費は経費で落ちるような代物ではないので、その分給  
与は高くなる。

高くなるとはいえ、使い道がないと楽しみもない。同世代の少女  
がはしゃぎ、楽しそうにショッピングをしているのを見かけると、  
なぜあんな風に楽しめるのかユイには理解できなかった。

自販機でお茶を買い、休憩スペースに座る。平日の午前中に何故  
学生が？と奇異の視線を売り子などから感じた。いろいろ想像して  
いるのか、こちらを見ながらヒソヒソ話している者もいる。

……そのうちどこかへ通報されそうだ。長居しないほうがよさそ  
うである。

平日に未成年が行動するのはいろいろと厄介だと痛感した。

そうかと言って大人になるのは嫌だ。

この国の大人に限らず、あちこちでいわゆる『立派な大人』であ  
るらしい要人を見てきたが、尊敬出来るような者は一人もいなかった。  
こんな人間を守る価値があるのかと感じるような者ばかりだっ  
た。

大体にして、未成年に裏神官などをやらせるような大人がいると  
いうことからして世の中が腐っている証拠だろう。自分たちの手は  
汚さず、年端のいかないう少年や少女にやらせる。そのくせ富を蓄え  
ることはいとわず、どんな手でも使う。

政敵を『排除』させるなど珍しくない。昨夜ユイがしたように。  
彼女は世界に絶望していた。特定の誰かが憎いとか、恨んでいる  
とかではなく、ただ世界が嫌いだった。とても醜いものだと思っ

ている。

シルメリアで薬もなくやせ細って死んでいく幼児を見た。その高官は毎晩、高級酒場で豪遊していた。高価な酒を飲み高価な食事を食べ、贅沢の限りを尽くしていた。死んでゆく子供など知らぬと言いつつ切った。

イグザイオでゲリラ相手に戦ったことがある。ゲリラとは名ばかりの、実際は貧しい家族を守るために戦っていた農民で、武器を持ったこともないような相手はいともあっけなく『排除』されていた。例をあげればきりが無い。どこにでも腐った人間はいる。ゴキブリと一緒に。いや、叩く者もないからより性質が悪いかもしれない。そういう人間はたいてい『権力』を持っている。そして自分の身を守ることに恐ろしく長けているのだ。

この世界には醜いものしかない。裏神官の彼女はそう思っている。腐りきった人間が導く国など綺麗であるわけがないのだ。そこに住む人間もやがて腐り、壊れていくのだろう。自分のように。ちっぽけな世界だ。ちっぽけで醜いことこの上ない世界だ。どうしてこんな世界でみな生きてゆこうとするのだろうか？ 自分も生きているのだろうか。

大切な何かがあるわけでもないのに。全部が醜く暗いと知っているのに。

馬鹿らしい。生きていて、何か意味があるのか。

手にしたお茶はじんわりと温かいがユイの心までは届かない。

……そして、少女の絶望を深める出来事は次の瞬間起こった。

休憩スペースに置かれた通信画面に速報が流れたのだ。

文字が流れる。少しして画面が切り替わり、速報ニュースになった。

あわただしく司会が急を告げる。

それを見てユイは画面に釘付けになった。

司会者が告げている場所。告げている名前。

「本日9時33分、ラクリマ・ラニ市のセリオス教会が何者かによ

って襲撃されました。

礼拝日ではなかったため、一般市民に犠牲者はありませんでしたが、教会の関係者が一人犠牲になった模様です。詳しいことが分り次第、順次お伝えしていきます……」

放送は続いていたがそのほかはどうでもいい。

ラクリマ・ラニ市。

セリオス教会。

それは隣街だ。先ほどまでユイがいた街だ。つい一時間前までユイが滞在していた教会だ。

同僚のラニ・ソルトが情報収集の足がかりにしていた教会だ。

彼女が滞在している間は他に教会の人間はいなくなる。一時的に『教義を広める』との名目で他国や遠方の町へ出張させられる。

だから今あの教会にいる『関係者』は……彼女<sup>ラニ</sup>一人だ。

誰かが犠牲になったのならそれは間違いなく彼女だ。

他に人がいないのだから、結論はそれしかない。

そして不可解な指令の謎も解けた。

今すぐに移動しろと厳命したのはユイにこの襲撃を避けさせるためだろう。

上層部は襲撃があるのを知っていたに違いない。そうでなければあの指令はおかしい。

知っていて、なおかつそれを『阻む』のではなく『避ける』ように指示したのは何故だ？

納得がいかない。阻むことのほうが簡単のはずだ。ユイもラニも裏神官。二人もいるなら普通の兵士一個中隊が来ても立ち向かえるくらいの技量は余裕である。そこらのゲリラやテロリストでも二人ならどうとでもできたはずだ。

それなのに上層部はユイを教会から退けた。

結果ラニが犠牲になった。調べるまでもなく唯一の犠牲者は彼女だろう。

上層部はラニを見捨てたのだ。ユイにはそこから離れると厳命し



ておいて、ラニには何も言わなかった。そこに何らかの思惑が絡んでいるのは間違いない。

なにせよラニは上層部に殺されたようなものだ。彼女を守る意思が無かったのだから。

ユイよりよっぽど忠誠心のある彼女がどうして見捨てられたのだ？  
 magari なりにも裏神官の彼女が何故やすやすと殺されたのだ？

上層部はいったい何を考えている？

「……所詮、捨て駒か……？」

低くつぶやく。ラニにはもう会えない。

それほど親しい仲ではなかった。ラニは面倒見が良く、誰に対してもあんな感じだったから、特に感慨かんがいはない。ケイ・カゲツ関連のことに關してはうるさいとさえ思っていた。

それでも見捨てられるような少女ではなかったはずだ。見捨てられるならユイのほうこそふさわしいとさえ思うのに、現実に見捨てられたのはラニだった。

納得がいかない。疑問が残る。

どこに問いただしても答えなど得られないだろうが、それでも解ることはある。セイリオスはいともたやすくラニを捨てたということだ。

裏を返せば、それはユイもいつかこうなる可能性があるということ。

「そうか……そんなにまで腐っているんだな」

空の紙コップを握りつぶし、ユイはしぼり出すように呻いた。

自分はいつか死ぬだろうと思っている。くだらない理由で死ぬだろうと感じていた。

どうせ死ぬのなら。

「……ラゲドラリヴ……」

ユイは決心した。

「世界など滅んでしまえばいい」

壹章・発端……始まり・5（後書き）

ここで壹章が終了しました。

彼女の絶望は深く、大きい。そしてその果てに待つものは？ 続きます。

## 式章・破滅の地……厄災の間・1

### 式章・破滅の地……厄災の間

ラグドラリヴ　そこは五皇国のほぼ中心に位置している。  
どの国からも行けるのにどの国から入ることは許されない。  
そこは禁忌の地だからだ。  
破滅の力が眠っているからだ。

『眠るそれに触れてはならぬ。  
起こすことなどまかりならぬ。  
それが目覚めてしまえば世界は滅ぶ。  
何人たりとも彼の地に近付くことならぬ……』

五皇国の住民は子供のときからそう言い聞かされて育つ。  
どの国でも同じだ。ラグドラリヴに関する『禁忌の地』という  
認識は同じだった。

眠る『何か』の言い伝えは各国でそれぞれ違うというのに、それ  
が破滅を呼ぶということに変わりはない。

古くからの言い伝えなどあやしいものだ。どれが正しいという保  
証もない。

だが、ラグドラリヴには何かが確かに存在している。一般人には  
知らされないような何かがあるのだ。

魔術か、兵器か、それとも未知のものか？  
いずれにせよ、ろくなものではあるまい。

国が隠すようなことなど、知っても得にはならないようなことば  
かりだ。国の中枢部にいたため、そのことをよく理解していたが、  
行動に迷いはなかった。

世界を滅ぼすと決めた。こんな腐った世界など、こちらから見切りをつけてやる。

もし何もなくとも、五皇国に一泡吹かせるくらいはできるだろう。その後おそらく自分は消されてしまっただろうが、それならそれでいい。こんな醜い世界で、長生きなどしたくない。なにひとつ希望などないのだから。

『それに触れてはいけない』

眠るものが何なのか、それすらもうどうでもいい。

これで世界が終わるなら、破滅のスイッチがそこにあるなら。

……押してやる。

……問題はどうかやってラグドラリヴへ入るか。

ユイ・ヒガは地図を手に悩んでいた。セイリオスへの反乱で、ラグドラリヴに眠る『破滅』を起こすことに決めたが、潜入する手段でまずひっかかった。国境には厳重な警備が敷かれているし、交通手段などもちろん整備されてはいない。以前に行ったときは任務だったから時間制限付きで送り迎えがあった。

今回それを期待することは当然できないので、自力潜入するしかない。とにかく次の定期報告までにラグドラリヴに潜入しないと、機会はなくなるのだ。新しい任務が言い渡される前、そしてまだ本部に自分の離反が知れる前に、迅速に行動しなくては。

ウエストポーチに常備している国境付近の地図を睨みつける。警備の状況なども書かれている裏神官専用の地図だ。警備は詳しく書かれているが、観光目的には使えず、ホテルなどで掲載されているのは国営のものだけである。

これに観光ホテルなども載っているならいつも案内板を探すこともないのだが、そううまくもいかない。これ一つがすでに国家機密かたまりの塊である。

あまり余計なことを書き加えるわけにはいかないのだ。もつとも、彼女のような少女がそんなものを持っているとは誰も思わず、通行人は気にも留めていなかった。

旅行なのか家出なのかと眉をひそめている者は多少いたようだが、ユイは気にしていない。しばらく眺めて、警備に数箇所の穴を見つけた。無論、普通の人間なら全く気づかないほどの穴である。もし気付いても、決して実行する気にはならないし、まずできないだろう。

身体強化をされているユイだからくぐれる穴である。

なんとか見直し、やれそうだと見切りをつけ、ユイは地図をしまった。

まずやることは寸前までの交通手段の確保。行くまではさほど時間はかからない。

この町からなら半日もかからず着けるだろう。あとは一日分の水と食料だ。世界が終わるスイッチを押すまでは、ちゃんと考えなければならぬ。たどりつく前に阻まれてもいけない。行動は慎重にかつ敏速に。

ユイは何気なく歩きながら、小さな観光ホテルの脇までたどりつく。そこから路地裏に入り、リュックから携帯を出す。人目はない。2 mほど跳躍して携帯を壁のどつぱりの上に置いた。ここなら人目にはつかないから誰かに拾われるということもないだろう。そしてこれで、もし携帯からユイの居場所を探せばこのホテルにいる、とごまかせる。機械オンチな彼女は機械にあまり期待はしていないが、ちょっとした時間稼ぎくらいにはなるはずだ。

携帯を置き去りにし、次はハイエリア線に向かう。急ぎなので朝のようなローカルエリア線は使わない。こうなってみると給金が出たばかりなのはタイミングが良かった。

気にせず使うことができる、そう思ってユイは苦笑した。

世界を滅ぼすための交通費を五皇国の一つ、セイリオスが出したという皮肉に気がついて。

一生懸命に自国を守るために鍛えた裏神官が離反し、世界を滅ぼそうとしていると気がついたら、上層部はさぞ慌てるだろう。

適当な座席に乗り込んでそんなことを考えたら、少しおかしくなっ  
って小さく笑ってしまった。

向かいの席にいた中年の男がこちらを見ていぶかしげな表情をしていたのも、なんだかおかしかった。おそらくは学校をさぼってどこかへ遊びに行こうとしている素行不良の少女とでも思われているのだ。

違うよ、と言ってやったらどうするだろう？

わたしはこれから世界を滅ぼしに行くんだよ。

……正気扱いはされないなあと、ユイはうつむいて苦笑した。

たしかに正気とは思えないようなことをしようとしている。

存在すら怪しい『破滅』を目覚めさせるために行動するなど、普通の人間なら考えまい。ましてそのために命をかけるなど、どう考えてもおかしい。

行けばまず確実に自分は死ぬのだ。『破滅』があるなしに関わらず、禁忌の地に入り込んだ罪は重い。たとえ裏神官であろうと消されるのは間違いない。

自身の死を目前にしても彼女の心はそよとも揺らがなかった。さんざん他人を手にかけておいて、今更自身の死が恐ろしいなどという神経はないのだ。

これで全てのしがらみから開放されると思うと、いっそ気が楽になった。

どんな形であれ、自身が選んだ終焉が待っている。

ラグドラリヴで何もかも終わるのだ。

ゆるやかに列車が発車する。夕べの雨が嘘のように青く晴れた空が見えた。

雲はわずかで、晴天といってもいい天気だ。

世界が終わる日とは思えないが、いざ滅亡する日というのはこんなものなのかもしれない。

何の変哲もない日が世界の終わる日。

誰も予想しない終わりの日。

普通の人は洗濯日と思うだろう。そんな日だ。

窓から入ってくる陽射しがやわらかく暖かい。うっかりすると眠ってしまいそうだ。

コツンと窓に頭をもたれて、ユイは外を眺める。スピードにのって景色はめぐるしく流れていくが、彼女の目には支障なく見えた。町並みは整っていて、歴史的な価値もあるのだろうが、彼女には美しいと思えなかった。

ぐんぐんと町は遠ざかり、次の町、また次の街を通り過ぎてゆく。灰色の世界。どれだけ花に彩られようと、華やかに飾られようと彼女には全て無意味だ。

裏側で生きてきたユイに、表の美しさはどうしてもまやかしに見えてしまう。

さほど楽しくもない列車の旅は二時間ほどで終わった。

ついたのはオークスというちょっとした規模の街である。国境に近いため交通の便が良いところだ。

国境まではまだもう少し距離がある。ここいらで食料などを買い込んでおこうと、目に付いた店に入った。全国的に展開しているチェーン店のひとつだ。弁当などが多彩で、ユイも何度か利用したことがある。どうせ長い間食料を持ち歩くわけでもないので、保存のことは考えなくとも良いだろう。

手軽に片手で食べられるものがないとケースを覗き込む。

スモークサーモンとハム、チーズのサンドイッチが目にとまり、それにした。あとはお茶と果汁を一本ずつ。

一応念のために、保存に適していて栄養価も高いチョコレートを二つ買っておく。どれもクマウエストポーチに詰め込んだ。準備はこんなものだろう。忍び込むのだから身軽なほうがいい。武器はいつもの傘と 自分。

それで充分。



買い物済ませ、店を出るのに要した時間は10分ほどだった。混んでいなければ5分もかかっていなかっただろう。年頃の娘にしてはうまいぶん、決断力があるが、味気ないことこの上ない。

とうのユイ本人はなんとも思っておらず、さつさと店を後にしたのんびりしては、時間が過ぎるだけ無駄になる。

前を見据えて歩き出す。彼女の先にあるのは希望ではなく終焉への切望だ。

国を守るべき者が滅亡を望むなど笑い話としても質が悪い。なお悪いことに彼女は本気だ。現実の中で滅亡を引き起こそうとしている。

あるかどうか分からない『破滅』に自分の全てをかけて。

……愚かなことだ。彼女自身も馬鹿なことをしていると感じてはいる。

それでも、止める気はない。戻る気もない。

歩みには何の迷いもなく、惑いもなく、目的に向かって進むだけだ。

オークスの街中で案内板を見つけ、国境近くまでの移動方法を探す。幸い、交通の便はいい。方法はいくつもあつたが、やはりラグドラリヴに入るまでは行かない。

この際近くまで行くことができれば充分だ。そこからは自力で国境を突破する。

エリア間をつなぐバスに乗る。これが一番早い移動手段なのだ。

30分ほどで国境近くのエリアについた。他の乗客に混じってバスを降りる。

一旦エリア内に入ってから、別の出入口から出る。あとは国境に向かうだけだ。

エリアが近い場所は土産物の店が多かったが、歩いていくうちに店は少なくなり、ごく普通の民家が続くようになってきた。

平日のためにあまり人の姿はない。好都合ではあった。わき目もふらずに歩くユイの様子はどう見てもおかしいだろう。思いつめた

様にも見えるので、下手をしたら自殺でもするのではと心配されそうだ。

まあ、これから彼女がすることは、間接的な自殺でもあるので間違いいではない。

世界を道連れにしたえらく迷惑な自殺なのだが、成功するかどうかも分からない不確実なものだ。彼女も成功するとは考えていない。五皇国に一泡吹かせてやりたいだけとも言える。

セトラの後継者などと言ってくる、上層部の勝手な者たちがこの自分の裏切りを知ったら、少しはあわてるだろうか？それを考えたら愉快だ。

捨て駒のように自分たちを使うのに、その捨て駒に噛み付かれる事など考えもしないのか。噛み付いてやろうではないか。喉首を噛みちぎってやる。

捨て駒にも意地があるのだと思い知るがいい。

そんなことを考えて歩いていたら、すぐに目的地に着いた。国境近くの森である。ここを抜けると隣国シルメリアにたどりつき、森を抜け切る前に脇に逸れるとラグドラリヴだ。

方向さえ間違えなければ、ラグドラリヴに入ることは可能だろう。森の中には定期的に国境警備が巡回しているが、こちらは一人で身軽。まして森の中だ、隠れようはいくらでもある。その上、巡回の間隔、警備状況なども分かっているのだから抜けるのは容易だ。

ユイは何の迷いなく森に踏み込んだ。山歩きには到底向いていない格好ではあるが、彼女にとって不都合はない。

歩いているうちに一度国境警備に出くわしたが、すぐに伏せたために気づかれることはなかった。

裏神官である彼女には国境警備など倒すのは容易だったが、この時点で体力を消費するのは良くないと判断し、回避を選んだ。ラグドラリヴで何があるか分からないのだから、無駄に体力を使うのは良くない。山歩きというのは意外と神経を使って疲れるものだし、用心するに越したことはない。

そうこうして、やがて森の中ほどに達したころ、一旦休憩をとることにした。

背の高い木に遮られて日の高さは分からないが、昼はとうに過ぎているだろう。腹具合もそう告げている。

国境警備に見つかると厄介なので、風上を選び、丈夫そうな木に登った。視界の通らないそこそ高くまで登り、腰掛けて傘を脇にひっかけ、ウエストポーチからお茶とサンドイッチを取り出し食べる。時間がたっているので生ぬるくてあまりおいしくないが、文句も言わず平らげた。

お茶を飲み乾いた喉を潤し、一息入れる。ここからまたしばらく歩くのだ。彼女の足なら、日が暮れる前にはラグドラリヴに入るこ  
とができるだろう。

問題はそこからだ。一言にラグドラリヴと言っても広い。どこに何があるのかさえ分からないのだ。『破滅』がどこで眠っているのかも分からない。手当たり次第探すことになるのだろうが、骨が折れるのは確かだ。

厄介だ。調べようにもここではどうしようもないし、そもそも機密情報だ、ただでさえ頭を使うのが苦手なユイにはラグドラリヴの詳細を調べることなど至難の業である。こんな調子では、セイリオスの追っ手がかかる前に問題の『破滅』までたどりつけるかどうか  
も怪しい。

せめてどの辺りを探せばいいか目算でもあればいい。大体この辺という目安があれば、大分体力の配分が違ってくる。帰ることは考  
えていない。一旦ラグドラリヴに入ってしまったえばまともな体で出てくることはありえないだろう。

世界ごとなくなるか、あるいは死ぬのは自分だけか……そのどちら  
かだ。

どちらでもいい。彼女はあっさりと割り切って木から降りようと  
し、思いとどまった。

人の気配を感じる。とくに気配を消そうともしていないので、山

菜でも採りに来た一般人かあるいは密入国を図った者か。さつき巡回したばかりなので、国境警備の者ではないことは確実だ。

逃亡犯という可能性もある。まともな人間ならこんな森の中を通りはせずにちゃんと整備された道を通るはず。

ユイは油断なく周囲をうかがった。自身の気配はこの森に入ったときからずっと消している。彼女の姿は森の梢が隠してくれているので、むこうからこちらは分かるまい。

一体何者だ？ ガサガサと木を掻き分ける音がする。森の中を歩くことに慣れていない様子がうかがえた。地元の人間が山菜取りに来たというわけではなさそうだ。

梢の隙間をすかして見ていると、やがて姿が見えてきた。まず見えたのが、森の緑にまぎれない灰色の髪。

「……?!」

思わず呻きそうになったのをなんとか噛み殺す。こんなところにいるはずのない人間だ。

そしてユイの会いたくない人間ランキングTOP3 確実な男である。

ケイ・カゲツ      イグザイオの軍人が何故こんなところにいる?!

弐章・破滅の地……厄災の間・1（後書き）

ここから第二章です。今しばらくお付き合いください。

## 式章・破滅の地……厄災の間・2

ケイは樹上のユイに気づきもしていないようで、森の中を歩くのに四苦八苦している。不慣れなのが丸分かりだ。大体、部屋で機械をいじるのが仕事のケイなのに何故セイリオスの森の中を歩いているのだろう。

もう追っ手がかかったのだろうか？それにしてはケイが来るというのはおかしい。

イグザイオの軍人、しかも武闘派とは対極にあるようなひ弱な彼が追ってきて、武闘派裏神官のユイを止められるわけがない。

かと言って何らかの任務で彼が護衛もなしにこんな森の中を歩くだろうか？

現に今だつて木に引つかかって転びそうになっている。山歩き、森歩きなどしたことがないのだろう。

機械の虫なのだからありえない話ではないが、だとしたらなおさらここにいる理由が分からない。

一体何の用があつて他国の軍人であるケイがセイリオスの森の中を歩いているのだ？

それも。たった一人で。

……ユイはしばらくケイの様子を見ていたが、彼はこちらに全く気づいておらず、ユイがいる木の下にたどりついて息をついている。いつもの格好だ。肩に六芒星がついたひざ下まである上着、六芒星のイヤリング、メガネ。珍しく不釣り合ふつりあいな大きいリュックを背負っている。それが重いのか彼は息を切らしていた。腰をおろしてふところから端末を出し、起動して覗き込んでいる。

真下のため、端末に何が映っているのかまではさすがに見えない位置だが、これを利用しない手はあるまい。一応もう一度周囲をうかがって見たが、やはりケイは一人だ。

お供も警護も連れていない。これはチャンスだ。

彼と彼の持つ端末ならラグドラリヴの情報も手に入る可能性がある。  
る。

警備のついていないケイなど彼女にとっては赤子も同然。すぐさま捕まえる決心はついた。

ひっかけておいた傘を手に取り、迷いなく飛び降りる。

梢の揺れるザザザという音の後、彼女の姿はケイの目前にあった。  
「ッ?!」

さすがのケイも驚いたらしい。あわてて立ち上がろうとして、瞬時にユイが突きつけた傘に阻まれる。

「久しぶりだな、ケイ・カゲツ。二週間ぶりくらいか」

無表情にそう言う彼女に、ケイは苦いものをまとめて嚙んだような顔になった。

「もう来たのか……」

しぼり出すように呻く。ユイには意味が分からなかった。のど元に突きつけた傘は外さないで訊いてみる。

「もう? 何のことだ」

言つとケイは眉を寄せた。

「……俺を追ってきたんだろう」

「は?」

ユイも眉を寄せた。二人揃っていぶかしげな表情で向かい合っている。

「何故わたしがお前を追わなければならんだ?」

ケイの言っている意味が分からない。

「何故つて……待て、本当に俺を追ってきたんじゃないのか?」

ケイも彼女の言っていることが分からないらしい。

互いに互いの言っていることがかち合っていないと気がつくまで、そんなに時間はかからなかった。

「俺を追ってきたんじゃないなら……なんでここにいるんだよ、セイリオスのエリート神官が」

「それはこっちのセリフだ、イグザイオのエリート軍人。なんでこ

んなどころにいる。ここはセイリオスだぞ」

お互いの会話がかみ合っていないと分かってても、会話が成り立つかどうかはまた別だ。

どうやらケイは事情を話したくないらしく、言葉を濁す。その態度から何かの任務を受けているのではと予想できたが、それとユイの都合とはまたまた別の話だ。

彼女に彼を解放する気はない。ここで自分に見つかったのが運のつきだと思ってあきらめてもらう。

「まあいい。お前の都合などわたしには関係ない」

言い捨てて、傘で彼の喉を軽くつつく。

「協力してもらうぞ、ケイ・カゲツ」

「……何にだ」

少しのけぞってなんとか傘の先から逃れようとしながらもケイは問い返してきた。

「ラグドラリヴに入るために」

逃さずユイはそう答える。

「ラグド……ラリヴ？入ってどうする」

警戒しているのだろう、彼の声は低い。

「世界を、滅ぼす」

淡々と彼女が告げた言葉に、彼は目を見張り、それから彼女をまじまじと見返した。

「……お前、正気か」

当然の質問だ。ユイがケイの立場だったら同じことを問いただしだろう。

「さあな。おそらく正気ではないんだろう。だが、わたしは本気だ」  
キッパリと言い切る。ケイがどこかに連絡を取ろうとするそぶりでも見せれば、即座に殴るつもりもある。とりあえず昏倒させて、などと物騒なことを考えていると、予想外の反応が帰ってきた。彼は真顔で訊いて来たのだ。

「本当に、本気か」



問いかけというよりは確認のようなニュアンスだ。彼女のその意思が確実なものなのかどうかを確かめるように。

「本気だ。そうでなくてなんでこんなところにいる」

とくに意識もせずそう返したが、ケイは腕を組み考えはじめた。つきつけられている傘など、もう気にもしていない様だ。

「おい？」

この態度は一体どういう意味なのか測りかねて、ユイもちょっと戸惑った。なにせ重要な情報源だ。少し不審だからと言って、いきなり切り捨てるわけにもいかない。

ユイではケイの端末は扱えない。端末だけ奪うという手は意味がない。ましてラグドラリヴでどんなことが起きるかも分からないのだ。ケイの頭脳はあつたほうがいい。

いけ好かない男だが、頭だけは本当にいいのだ。本心ではあまり頼りたくないけれど、好き嫌いを置いてラグドラリヴ内で遭難するのはさすがにあほらしい。

「……馬鹿だな、ユイ・ヒガ」

突然そう言われ、傘で突き殺したくなった。

「殺してほしいのか」

半眼で睨みつける。この手にあともう少し力を入れたらケイは即座に死ぬだろう。彼もそのことは良く分かっているようで、おとなしく両手をあげた。

が、口は止まらない。

「だってそうだろう？あるかどうか分からないような『厄災』のところへ行って世界を滅ぼそうとしているんだ、あほだろ。この（  
検閲削除）」

殺すか、とユイは正直にそう思った。ケイがすぐにこう言わなかったら実際に手を下していたかもしれない。

「……俺と同じことをしようとしてる馬鹿が他にもいるとは思わなかった」

……………。

沈黙が森に満ちる。長い沈黙が過ぎてから、ようやくユイは口を開いた。

「ちよつと待て。今なんと言った？」

「（検閲削除）か？」

「切り殺すぞ」

真剣に殺気をこめた視線を向けられて、ケイは肩をすくめた。

「聞いたとおりだ。他に意味はない、他意もない」

ふざけた風を装ってはいるが、ケイは本気だ。それはユイにも理解できた。自分と同じものを感じたからだ。

本気で世界を壊そうとしている　ユイと同じように。そんな馬鹿なことを馬鹿と分かっているにもかかわらず、世界を見限っている。

「本気か」

先ほどされた質問を今度はユイがした。

「正気ではないだろうが、本気だ」

同じようにケイも返す。その目を見て、ユイはようやく傘をおろした。

「……お前と同じことを考えているなんて死ぬほど不快だ」

「こっちのセリフだ」

「でも、世界が終わるまでなら協力してやってもいい」

「それもこっちのセリフだ」

じつとりと睨み合う。火花が散ったような一瞬の後、戦いは始まった。

「なんで素直に助かるとか、よろしくとか言えないんだ？！お前という男は！？」

「それもこっちのセリフだッ！素直に助けてくださいとか言えんのか、お前という女は？！」

「口が裂けても貴様には言わんっ！！そっちこそ土下座でもして一緒に連れて行ってくださいとか言えんのか？！」

「お前だけには死んでも言わねえッ！！」

セイリオスとイグザイオのエリートの口論としてはやたらと低レベルだ。

口げんかなどいうものはそんなものかもしれない。

しばらく立場を忘れてぎゃあぎゃあやっていたが、先に我に返ったのはケイだった。

「待て、こんなことやってる場合じゃないだろ」

それもそうだとユイも思ったが、彼に言われると腹が立つ。そもそも先に腹が立つようなことを言い出したのは誰だ、などとも思ったが口には出さなかった。時間が惜しいと思い直したのだ。

息をついて気持ちを整えてから、落ち着いて話をすることにした。

「……まず最初に言っておく。わたしは『破滅』の存在する場所を知らない。ラグドラリヴ内に入ってから探すつもりでいた。ケイ・カゲツは『破滅』の情報を持っているか？」

正直にそう告げると、ケイはあからさまなため息をついた。だが、馬鹿にするつもりではないらしい。

「あー……まあそうだろうな、国家間でもSSSの機密だ。いくら裏神官でも知らなくて当然か」

こりこりとこめかみの辺りをかきながら、持っている端末の画面をユイに見せた。

覗き込むと地図が映し出されている。小型の画面なのに、画像は信じられないくらいにクリアで見やすかった。さすがケイの自作である。おそらくはまだどこの国にもない技術だ。

イグザイオにも公開していないと彼は言っていた。

「これは今いる場所……セイリオスの森だ。で、こうすると……」  
なにやら画面を操作すると、立体映像になった。見たことのない地図が目前に出現する。

ユイにさえ見覚えのない地図。ということは、これは公的に存在しない地図だ。

裏神官さえ知らない地形。

「これ……ラグドラリヴなのか？」

「ご名答」

自信たっぷりに笑いケイは映像の一点を示す。そこは小さく紅く光点がともっていた。

ラグドラルリヴのほぼ中心地だ。

「ここか」

「俺の見立てでは、な」

ケイはそう言ってから説明を始めた。不可解な熱源反応、魔法反応があること。何もないはずのラグドラルリヴの中心地で、そんな反応がありえないことだというのはユイにも理解できる。

そこには何かがあるのだ。確実に。

「ラグドラルリヴでそんな反応があるのはここだけだ。ほかにはない。だから十中八九ここだろう」

「ダミーである可能性はないのか？」

至極当然のことをユイは問いただした。そう簡単に反応が出るなどかえって怪しい。偽の情報を流して、本物は隠すという手はよくあることだ。

「それはないな。そんなことする必要もない」

ケイは断言した。

「なぜなら、誰もここに入らないからだ。一般人はもちろん、各国の『裏』さえもここには入れない。入るものがないところにダミーを作る必要もない」

「……誰も入らないのに地図はあるのか？それともそれはお前が自分で作成したのか」

指摘するユイを意外そうにケイは眺めた。

「……ちよつとは考えるんだな、驚いた」

本人としてはほめているつもりらしい。けなしているようにしか見えなくても。

「そうだ、地図はある。俺が作成したんじゃない。これは俺が軍のコンピューターにハッキングをかけて手に入れた。誰も入らないはずの場所なのに地図はあるんだ」

ケイの言いたいことはユイにも分かった。

「地図が必要な誰かがいるんだな？中に入る誰かが存在しているのか……」

「そういうことだ」

ではやはり何かが存在しているのは間違いなさそうだ。

限られた人間のみが知る、何かがある。

弐章・破滅の地……厄災の間・2（後書き）

なんとか合流しました。でもやっぱり仲の悪い主人公たちです。

### 式章・破滅の地……厄災の間・3

「イグザイオがからんでいるのか？ イグザイオのコンピューターにデータがあったということは」

軍事国家イグザイオならなんらかの兵器だろうかと考えたユイだが、ケイは首を横に振った。

「いや、他の国でも同じだった。念のために他国のあちこちにハッキングかけて調べたから確かだ。どの国にも同じ地図が存在している。セイリオスでも、ヒニアでも。だから、どこかの国が率先して兵器開発や魔術開発しているってわけでもないらしい」

どこの国にも同じデータが存在していたということで、ケイは何かの存在を確信したと言う。五皇国のどれもが恐れる あるいは敬う、何かがある、と。

「何かが存在しているのは間違いない、か……問題はその『何か』が何なのかだけだ」

「ま、他人を救うものではないだろうな」

あっさりとケイが断言する。その点ではユイも同感だった。万人の役に立つようなものなら隠す必要はない。隠すということはその時点ですでにやましいということだ。

おおやけ  
公にできない何か。きな臭いことこの上ない。

「お前でもそれが何なのか調べられなかったのか？」

「無理だった。そもそもデータが存在していない」

「？ どういう意味だ」

汲み取れずに聞き返す。

「データ化しているなら俺の手にかかれば間違いなく見つけることができる。俺が見つけれなかったんだからデータ自体がないってことだ」

「だから、どういう意味だ？」

「……脳みそ使えよ、データ化すらできないってことだろ。いいか

？ データとして残すのもやばいってことだ」

そう説明されて、ようやくユイも理解した。痕跡も残せないほどのもの。少しでも残ってしまったらまずいもの。

「なるほど。それは確かに『破滅』っぽいな」

ケイが断言するだけのことはあるのかもしれない。

なにはともあれ、これで向かう先の見当はついた。ケイのナビがあればさほど迷うこともないだろう。ここで彼の手を借りることができたのは幸運だった。世界には気の毒なことだろうが。

「……そう言えば、お前何故セイリオスにいたんだ？ ラグドラリヴに行くならイグザイオからだって行けるのに」

方角を確かめてから、ふと気づいてそう訊いた。

「あ？ ああ、一応力モフラージュだ、休暇とって旅行を装った」  
「それで大荷物を背負っているのか？ 置いて行け、邪魔になるだけだ」

親切心からそう忠告した彼女にケイはかえっていぶかしげに返す。  
「お前は何でそんなに身軽なんだ？ まさか食料とか用意してないのか？」

「……ってそれ、食料なのか？！ 一体何日かける気だっ？」

「いや、着替えとかも入ってる」

あきれて脱力しかけたユイだが、かるうじて問いかける。

「……なんのために」

「ここに入るまでは私服だったんだ！ 旅行の名目で来てんだから当たり前だろう！」

森に入ってから制服に着替えたということらしい。何が起るかわからないのだから、防弾、防刃の制服に着替えるのは間違っていない。間違っているのは他のことだ。

「……ケイ・カゲツ」

「なんだ」

「お前山歩きとかしたことないだろう」

「……ねえよ」



ため息をついてユイは言った。

「悪いことは言わん、荷物は置いていけ。置いていくのがいやなら、もう少し持っていく物を絞りこめ。途中でばてたお前を背負っていくなんてわたしはいやだ」

先ほどとは立場が逆になった。今度レクチャーを受けるのはケイだ。

不要なものは置いていくに限る。帰ってくることを考える必要がないのだから、身軽に動くことのみ考えればいい。ようは『破滅』のもとへたどりつき、それを目覚めさせれば終わるのだ。世界も、自分も。

後のことを考える必要はない。『破滅』を目覚めさせた瞬間に終わり訪れるのだから。

目覚めなくとも自分たちはそこで終わる。どのみち先などない。「水と食料は最低限でいい。あと、着替えも必要ないぞ。いくらなんでも今日中にはつくだろうし……まあ、上着の一枚くらいにしておけ」

「わかった、そうしよう」

ケイは素直にユイの言葉に従った。得意な分野が違うというのは理解しているのだろう。変に意地を張るのも馬鹿くさいと思っっているようだ。

「武器のたぐいは……お前がいるからいらないな？俺は銃とかナイフとかの扱いは、はつきり言って素人しろうとだからな、あてにするなよ」「あてにしると言われても絶対にしない」

ユイは断言した。ケイに格闘などを期待する気は毛頭無い。

「お前は頭だけ使っていればいい。戦うのはわたしの役目だ」

「……男前だな……性別間違ってないか？ユイ・ヒガ」

「殴るぞ」

「やめろ。お前に殴られたら軽く死ぬる」

まがりなりにも軍人のクセに、体力に自信のないケイはあっさりと白旗をあげた。

大体、体を鍛えたことなどない少年だろう。鍛える暇があるなら、そのあいだに機械を一台作り上げるはず。もちろん山歩きなど初体験に違いない。

「それから、俺が足手まといなのは確実だ。だからって置いていくなよ」

「そうしたくてもできない。お前のナビがなければ遭難しかねないから」

殺伐とした相談をし、お互い一蓮托生だいちれんたくしょうと再確認した。

ユイの戦闘能力、ケイの頭脳、どちらが欠けてもたどりつけないだろう。

「よし、こんなもんか」

さほど時間をかけず、ケイの荷物整理は終わった。リュックから出した物は茂みの中に押し込んで置いていく。

方角は大体ユイの身体感覚で分かるので、森の中で迷うことはないが、万が一ということもある。ケイが彼女の後ろからフォローするということと前後に並んで歩く。

見た感じは、華奢きゃしゃな少女の背中に背の高い少年が庇われているという、すごく情けない光景である。実際は少女のほうが遥かに強いのだが、いかんせん見た目が可愛らしいためとてもそうは見えない。親鳥を雛が守っているような印象だ。

本人たちには違和感はまるでなく、当然だと思っている。適材適所という言葉通りに。

自分たちの得意分野をきちんと自覚しているのだ。迷いはない。

深い森の中二人連れ立って歩く。時折時間を計りながら、国境警備とかち合わないよう気をつけた。無駄を省き、ひたすら先を急ぐ。一人のときとは違い、体力的に劣るケイが同行しているため、時間のロスは増える。日が暮れる前にはラグドラリヴに入るつもりだったが、このペースでは日が暮れてからの潜入になりそうだった。

かえってそのほうが都合は良いだろうという気もする。潜入は視界が利かない暗闇の内に、というのが彼女にとっての常識だ。夜の

闇は裏神官の彼女にとって妨げにはならない。

問題は同行者ケイの夜目がきくかどうかだが、最悪、手を引いて引きずってやればいい。

触るのは嫌だが、用が終わるまでならなんとか辛抱できるだろう。

「……変な感じだな」

後ろを歩くケイが不意にそう呟いたのが聞こえた。

「なにがだ？」

振り返らず、歩みも止めずに訊き返す。

「よりによってお前と世界を滅ぼしに行くとは思わなかった」

「それはそうだろう。わたしだってお前がいるとは思わなかった」

最初は自分一人でラグドラリヴに行くつもりだったのだ。ケイの力は確かにありがたいが、あまり口に出したくない。ユイはそう思っ  
てそう言ったのだが、

「……本当に知らないのか？ ユイ・ヒガ」

ケイは心から意外そうにそう訊いて来た。

「……？ なにを」

問われる意味が分からない。

「……いや、知らないならいい」

「何だ？ 気になるだろう、言え」

気になると言いつつも振り返らないユイである。彼女が振り返らないのでかえって安心したのかケイは話し出した。とんでもない爆弾発言を。

「……あと何日か後に俺とお前の結婚が決まる」

バランスを崩してユイは転びそうになった。

かろうじて踏みとどまり、傘に手をかける。刃を引き抜きたくなるのを必死にこらえながら、なんとか声をしぼりだした。

「な……ど、どういうことだっ？」

「俺が知るか。セイリオスとイグザイオの上層部が勝手に決めたんだろう。当然俺の意思じゃない。お前の意思でもない……よな、その様子だと」

ケイは心底からほっとしたようだった。その心境はユイにも分かる。

「当たり前だっ……！」

「良かった……どうしても俺と結婚したいと言われたら、俺はここで舌を嚙んで死のうとか思ってたぞ」

失礼この上ないことを言う男である。しかも心底安心した様子で言っている。

「こっちのセリフだ……なんでお前なんかと……うわあああ、冗談でも嫌だ！」

ユイはユイで鳥肌を立てている。しかし二人とも足を止めないのはさすがだろう。

「どこから出たその話っ！？ どのどいつが企んだっ！？」

「企んだのは両方の国だと言ってるだろ。で、話が始まったのはこの間の一件からだ」

ケイが指した『この間の一件』というのは先日の護衛の話だろう。本来ならユイが行く必要もない仕事だったアレだ。高司祭と軍人の護衛は名ばかりで、実際はケイの護衛だったのだと思っていたあの一件。

「アレがすでに見合いの一環だったらしい。変だとは思ってたんだよな……やたら簡単に俺を置いていったし、護衛のお前を連れて行かないで別室に移っていったりして」

言われてみればおかしいことだった。護衛として連れてきたユイをあつさりと置いていったことも、体を動かすのが苦手なケイに少し鍛えてもらえなどと言うのも変だった。

あの時はどうでも良かったのでいい加減に受け流していたが、こんなことだと知っていたら断固として拒否したものを。

「そういうわけで、俺は世界を滅ぼそうと思いついたわけだ。世界が滅びるかどっちかが死なない限り結婚の話は消えないだろ。お前が死ぬのを待つよりは世界を滅ぼそうとしたほうが早い。どっちも駄目なら最後に自殺を考える。イグザイオにもいい加減うんざりし

てたしな、ちょうどいいきつかけだった」

人から見ればいい加減極まりない理由だ。本質はそれだけではないのだろう。だが、きつかけの一つになったのは間違いない。

「恐ろしいこと考えるよな、俺の頭とお前の身体能力をかけあわせようと企んだんだろうが、逆だったらどうすんだ？　頭ばーで体も鈍いなんて最悪だろ」

「ヤメロ。想像させるな。おぞましい」

ユイの拒絶にケイは乾いた笑い声で答えた。

「はっはっはっ、俺だって知りたくもなかったわこんな話！　だが一人で鳥肌立てるのも嫌なんだな！　おまえも味わえこの悪寒を！」

「い、いらんことを言いやがって……！　ほんとうに嫌な男だなお前は！」

ざかざかと乱暴に進みながらユイは自分の腕をさすった。本気で鳥肌をたてている。

おそらくは背後のケイも似たような状態なのだろう、足音が乱れている。

こんなことをきいた以上、後戻りはできない。絶対にしない。帰れば待っているのは心底嫌な奴との結婚だ。彼女の意味も彼の意思も関係ない、政略結婚というのも生易しいほどの強制だ。ただ優秀な兵士を作り出すためのだけの道具。

五皇国は簡単にユイ達を切り捨ててうえに、簡単に左右するのだ。人生も、生き死にも、何もかもを全て。

「……しかし、どうやって知ったんだ？　わたしはまだそんな話かけらも」

言いかけて、ユイは言葉を飲み込んだ。

そういえば、と思い当たることがあったのだ。

今朝方、ラニと交わした彼女との最後の会話。

彼女はユイの異性観を訊いて来た。

その前の晩、送迎をした運転手も彼氏がどうこうと言ってきた。ラニは個人的興味と言い、運転手もそうだろうと思っていたが、

実は上層部からの命令だったのではないか？

ラニの態度はあからさまにおかしかったし、運転手も今考えるとあんな態度は変だ。

どうやらユイ本人の知らないところで国はちやくちやくと準備を進めてきたようだ。

「……アレがそうだったのか……」

「？　なんかあったのか？」

「なにかというか……調査はされていたらしい。今朝方同僚に異性観を訊かれたばかりだ」

ゲンナリと答える。ケイも似たような心境らしい。脱力したような声で言ってくる。

「うわ。直球か」

「本人は個人的興味とか言っていたが……」

「なわけないな、このタイミングで」

断言された。ユイもそう思う。

「ちなみに俺は日課のハッキングでその情報を拾った。ガセじゃないぞ。信じられなくていいだけ調べたからな」

嘘や冗談ならどれだけ良かったか、などとも呟いている。全く同感だった。冗談にしては質が悪すぎる。訊いた本人たちが死にたくなるようなことを企むとは。

おそらく互いの恋人の有無を調べていたのだろう。素行調査もかねていたはずだ。ふさわしくない相手とつきあっていないかどうか、いわゆる不純異性交遊というやつ。

そんなヒマなどないような生活をしているということくらい分かっていそうなものだが。

「……ラニは知っていたのかな？」

ふとそう思った。あれだけケイさんケイさんと騒いでいたのに、ユイとケイの結婚話のためにユイの異性観を訊いてくるなどおかしいではないか。

「ラニ？」

「ああ……同僚だ。午前中に事件に巻き込まれて犠牲になったとTVで見た」

お前に惚れていた奇特な娘だよと言つてのける。今はもういない彼女。ケイに連絡してほしいと願っていた彼女。

「……ラニ・ソルトか？」

「？ 知っているのか」

「いや、直接は知らん。ただ、今朝のハッキングで見た名前だった」  
セイリオス国内の情報を探っていた時に見た、とケイは言った。

「……『処分』の筆頭にあげられてたぞ」

「?!」

式章・破滅の地……厄災の間・3（後書き）

本当に仲悪いな、この主人公たち、と作者でも思います（笑）



## 式章・破滅の地……厄災の間・4

彼は続ける。無慈悲に無造作に。

「理由は一つ。俺とお前の結婚の障害になりそうだというだけだった」

ケイに恋していたラニ。どうしても彼と連絡を取って、恋人になりたいと望んでいた。

結ばれたいと願っていた。その橋渡しをユイに頼んでいた。ユイ本人は知らなくても結婚話の本人に。

ユイとケイを結び付けようとしている各国の上層部には邪魔な存在だったのだ。

「じゃあ……彼女は消されたんだな、セイリオスに」

「イグザイオにも、な」

裏神官の彼女がやすやすと殺されたわけが分った。事件を装って襲ってきたのはおそらく同じ裏神官だ。ラニを『処分』するように命令された裏神官。戦闘に向いていない彼女には過ぎた相手だったろう。国に見捨てられたのだ。どこからも助けは来ない。

ユイへの命令の不審さも紐解けた。確かにユイに滞在されてはまずかるう。ラニと違って実戦に慣れている上に、結婚話の本人だ。もし負傷、あるいは万が一死亡でもしてしまえばすべて水の泡である。だからこそあの不可解な命令が下された。

今すぐにそこを離れて隣町で待機せよ　あれはユイを遠ざけ、確実に邪魔な存在を消し去るためのもの。

ラニは情報収集専門の裏神官だったため、補充はすぐにきくと判断されたのだらう。

そして彼女はあっけなく消された。

前夜、ユイに送ったたった一通のメールのために。

ユイが見もしなかったあのメール。任務中に送られてきたそれを盗み見たのはあの運転手しかない。始めから携帯をチェックする

密命を帯びていた運転手は、着信を知ってすぐに内容を見たのだから。

何食わぬ顔をして任務を終えたユイに携帯を返し、彼女を送った後で本部に報告を入れた。

ラニ・ソルトはケイ・カゲツに好意を抱き、どうやらその橋渡しをユイ・ヒガにさせようとしているらしい、と。

確実なことではない。ユイが橋渡しをするかどうか分からないし、したとしてもケイがOKするかどうか分からない。

そもそも結婚話からしてまとまるわけがないと言うのに、『邪魔になるかもしれない』そんな理由で彼女は殺された。

不確定な未来のための理不尽な死。

仲が良かったわけではない。少なくともユイから見たラニは親友とかそんな関係だったわけではない。ただの同僚だ。

自分に任務が言い渡されていたら、ユイはラニを『処分』しただらう。

その程度の仲だ。けれど世界の腐敗を理解するには充分な『死』だった。

世界に見切りをつけるには充分だった。彼女の死がユイに世界との決別を促したの<sup>つな</sup>は間違いない。

「友人だったのか？」

ケイが背後から訊いてくる。

「いや、ただの同僚だ。でもいい子だったよ。わたしと違ってとてもいい子だった」

それは心底から思う。ラニはいい娘だった。こんなくだらない理由で死んでいい娘ではなかった。死ぬべき者は他にいっぱいいるはずなのに、どうしていい人から死んでいくのだろうか？

悪い人間が殺すからだ。自分のことしか考えない人間がいるからだ。腐りきった人間が大半を占めるからだ。

間違いない自分もその中の一人だと、ユイは知っていた。

やはり世界は滅びるべきなのだ。ごく一部の心正しい人間だけが残ればいい。

夜の中を風が駆けていった。草原を撫でてゆくざわめきは、やがて闇の中へ飲み込まれていくのだろう。そして訪れるのは静寂だ。ここにはなにもないから、雑音も存在しない。至極当たり前に山があり、谷があり、川があり、人がいない。

あるものは自然だけ。それがなによりの宝だと思う者はこの世界には少ない。

だからここには人間はいない。

ラグドラリヴには誰もいない　表面上には。

「さて、ここからどう進む？」

人のいないはずのラグドラリヴの平原で、深い草に隠れて少女と少年は顔を見合わせた。ユイは油断なく傘を手にし、ケイは端末を起動させている。

ラグドラリヴにはすんなりと潜入できた。あつさりすぎて拍子抜けしそうになったぐらいだ。事前にユイの持っている地図から国境の人的警備の穴をつき、ケイがすみやかに機械警備を無効化した。さすがに天才児と他人から言われるだけあって、ケイの機械操作はユイから見れば神業にも思える。死んでも口には出さないが。

「問題は魔法だな。機械や人間なら俺とお前でどうとでもできるが、魔法はなあ……こればかりは魔法士でないとどうにもならん。一応知識としてある程度のことはわかるが」

「わたしも似たようなものだしなあ」

「お前、任務で潜入とかしてなれてるんじゃないのか？」

「魔法的な警備をしているところはあまり行っていない。大体そういう困難なところより、もっと簡単に『処分』できる場所を探す」「そりゃそうか、好きこのんでわざわざ困難なことする奴はいない

わな」

「そういうことだ」

魔法的な警備、トラップがしかけられていたら二人には少々荷が重い。

ならばどうするべきか？ 答えは単純なもの一つ。

「……ひっかからないように注意するしかない」

幸い、ケイの端末には感知機能も搭載されている。さほど広範囲を感知できるわけではないので、かなり至近距離まで近付かないと反応しないのが不安だが、ユイの反応速度ならひっかかるまえに無効化、破壊することは可能だ。彼女の傘には魔法に対する防御機能もついていることだし、なんとかなるだろう。

「がんばれ。お前の反射神経にかかってるぞ、ユイ・ヒガ」

ひっかかってしまえばそこで終わる。一緒にいるケイもいわずもがな。

仕方ない、と再びユイが先に立つ。

月の光だけがある平原を少女と少年が歩いていく。時折、遠くで狼か何かの遠吠えらしき声がする。おとぎ話の中に入り込んでしまったかのようだ。

穏やかで優しい夜のお話。

けれど主人公の彼女たちが望むのは世界の終わり。

そのために幻想的な夜の中を歩いている。

「……月って意外と明るいもんだな」

背後でケイが呟いた。夜なのに、照らすものが必要ないほど明るい。それはユイも同感だ。ここはとても綺麗だとも思った。

ラグドラリヴは美しい。以前来たときもそう思った。昼間も夜も、どちらも綺麗だ。

どうしてだろう？ こんなに腐った世界にも綺麗と思えるところがあるなんて不思議だった。

しばらく歩いて、目的地についてから理由が分かった。

あきらかに人工的な建物が視界に入る。不愉快だった。こんなに

綺麗な場所になんて不恰好なものを建てるのだろっ。そう感じてから、ラグドラリヴを美しいと思ったことを理解した。人間がいなかったからだ。今まで歩いてきたところは人の気配が微塵もなかった。人工的なものが何もなかったから、美しいと思ったのだ。

「醜い」

はき捨てるようなユイの声に、ケイも同意した。

「ああ、この場所にはそぐわないな」

ラグドラリヴにそぐわない人工的な建物。そこそ二人が目指す『破滅』がいるとされる場所だ。何も存在しないはずの場所に、あるはずのない建物。

それなのにカモフラージュもされていない。塀も門もない。警備の人間が立っているわけでもなく、また、機械や魔法の反応もない。何の警備もされていないようだった。かえって怪しい。

「本当にここなのか？」

「そのはずだ。地図を見ても場所は間違ってる」

「……警備網も何も無いように見えるぞ？」

「そう見えるな……何でだ？」

「聞いているのはわたしだ、ケイ・カゲツ。お前もしかしてガセネタをつかまされたんじゃないのか？」

「それにしても何も無いのは変だろ。ここまで俺たちを野放しにするわけもないだろうし」

それもそうかとユイは改めて建物を眺めた。人の気配はしない。少なくとも目に見える範囲にはない。やはりどう考えても警備はされていないような気がする。

「どうする？」

背後に問いかけた。これは罠かもしれない。中に入ったら一瞬で囲まれて殺される可能性がある。

「今更だろ」

ケイの返答は明確だった。ここまで来て何もせずに帰るなどあほらしい。

「そうだな」

軽く息をついて、ユイは足を踏み出した。ケイもすぐに続いてくる。今更死を怖がるようなら始めからここには来ていない。

それでもできる限り油断なく進んでいく。自分が緊張しているのはわかった。何があるのか分からない場所。何が起るのか未知の場所。

一步一步進んでいく。遅すぎず、早すぎず確実に。

たどり着くまでにそれほどの時間はかからない。拍子抜けするほどのあっけない到達だ。

扉が目の前にある。監視カメラさえついていない。一応鍵はパスワード式らしく、何ケタかの数字を入れるものだったが、ケイが自分の端末とコードでつないでなにやらいじるとすぐに開いた。あっけない。

「ちよつと待て、ここから中を調べてみる」

ケイはそう言って端末を操作し始めた。その間ユイは油断なく周囲をうかがっている。

「……変だな」

少しして、そんなことを呟く。

「何が？」

「何も作動してない。結界や自動砲の反応はあるんだ、でもどれも作動していない……」

警備の機能はあるのに、そのどれもが動いていないという。おまけに言えば中には人の反応もあり、警備の人間も存在していることを示しているのに、動きはないのだという。

「いい加減な警備なのか？それともやつぱり罠？」

「わからん。入ってみないとなんとも言えん」

ケイは少し端末を操作してから、コードを外した。

「妙なんだよなあ、監視カメラもあるのに全部中なんだ。外には何一つ警備がない」

「？ 普通は外に向けるだろう」

警戒すべき侵入者というのは外から来るものだ。

「だろう？ でも中なんだ。まあ映像に細工したからしばらくは力メラも役立たずだけだな」

自信たつぷりのケイを信じてユイは扉を開けた。自動ではないので押し開ける。

中は暗かった。窓がないため月の光も入らない。ユイには不自由ないがケイには問題だろう。

「も・の・す・ご・く・く！！ 嫌だが、手をつないでやろうか」

「いらん。暗視スコープを持ってる」

あっさりそう返され、すごぶる安心した。しかし、何でも持っている男である。持っていくものは絞れといったはずだが、一体何を置いてきたのか。

「そんな物まで用意してたのか」

「備えあれば、ってホマレでは言うだろ」

他国の言葉だ。ユイは知らなかった。答えず歩くことにする。

弐章・破滅の地……厄災の間・4（後書き）

いよいよ、ラグドラリヴです。



## 式章・破滅の地……厄災の間・5

今までどおりケイがナビ、ユイが斥候だ。時折監視カメラが動いているのを発見したが、ケイの細工はうまくいつているらしく、確実に自分たちは映っているだろうに警備の人間が何らかのアクションを起こすことは無かった。

「下へおりるぞ。作動していないとはいえ地下のほうの警戒が厳重だ。なにかある」

ナビに従ってエレベーターを見つけるが、動いていない。ケイの腕ならすぐに動かせるだろうが、動いたら動いたで問題がある。

「乗るのはさすがにまずい。いくらなんでも気づかれるだろうし、他に下における方法は？」

「ない。階段もない。ここだけだ」

簡潔に説明され、ユイは仕方ないとエレベーターの扉に手をかけた。

「開けるから、乗れ」

言うなり頑丈な扉がメキメキと開いていく。華奢な少女が顔色も変えずに重い扉を開けるのを、背後で少年が啞然として見ている。

「なにしてる？ 乗れ」

「あ、ああ」

ユイが支えている間にケイは中に入り込んだ。続いてユイも入り込み、扉を閉める。

「どうすんだ？ 中に入っても動かせないのは一緒だぞ」

「こうする」

傘の柄を引き抜き、刃を露出させ、彼女は迷わずに床に突き立てた。

強化されている人間ではないケイが視認できたのはそれぐらいだろう。気がついたときには彼女はすでに刃を納めており、できた切り口に手をかけて床をひっぺがしている。

「うつわ、力技。怪獣かこの女」

「やかましい。蹴り落とすぞ」

外した床を壁に立てかけ、ユイはウェストポーチのベルトから鋼線を引っ張り出した。

「……まさか、それを伝って降りる気か？」

恐る恐る問いかけてくるケイににんまりと笑ってやる。それから天井をひっぺがして鋼線を上のワイヤーに結びつけ、準備完了。

「おい、本気か」

「他に方法か？」

「つつたつて下まで五十mはあるんだぞ?!」

「目をつぶってわたしにつかまっている。不本意だが守ってやる。五十mくらいならこのワイヤーは足りるし、死なん」

「死ぬ! 下につくまでにお前はともかく俺は死ぬぞ!」

なおもぎゃあぎゃあわめく彼の襟首をユイはしっかりつかんで、につこりした。

「突き落としたほうが良いならそうするけど?」

……ケイはおとなしくなった。突き落とされるよりはユイにつかまって下におりたほうが『破滅』にたどり着ける確率があると判断せざるを得ない。

「……たどり着く前に死ぬのは嫌だぞ、ユイ・ヒガ」

「うるさい、分かっている」

会話はそこまで。手のひらを焼かないようにマントを巻きつけ、ユイは迷わず床の穴に身を躍らせた。勢いよくワイヤーを滑り降りてゆく。途中何度か壁を蹴りながら、勢いを殺したため怪我も無い。ケイが何か叫んでいたような気もしたが、着くころには静かになっていたのだよしとする。

「たどり着く前にお前に殺されるかと思った……」

何度か深呼吸してようやく言った言葉がそれだ。マントをまといなおし、整えながら突っ込んでやる。

「元氣じゃないか」

「マジで死ぬと思ったわい!!」

言い返す元気があるなら大丈夫だろう。ユイはそう判断した。  
文句男は無視して扉をこじ開ける。

「行くぞ。早く出る」

「ああわかったよ、怪獣女」

『破滅』にたどりついたらその場でこの男を斬ろうかと、危うく決心しそうになったがなんとかこらえる。

外は上と違った様相だった。岩肌が露出している。洞窟のように思えた。地下は人の手が入っていないようだ。自然の地下洞窟を人が地上とつなげたのだろう。

広いが、暗くはない。地上からの光ではなく、壁に生えたコケが光を発しているせいだ。ふわふわとした優しい光がとても美しい。暗視スコープなどという無粋なものは必要ない。

「……すごいな……綺麗だ」

他に言いようがない。何か上手に形容できればいいのだが、この景色のまえでは陳腐な言葉など浮かんでこない。

こんなに綺麗な場所に『破滅』など本当に存在しているのだろうか？

誘われるように進んだ。時折コケが舞い上がり、優しい光が舞う。進むうちに壁の光がぼつんぼつんと途切れ始めた。なんだろうと残念に思いながら壁を見ると、そこには人の手が入った跡がある。

「呪符……？」

封印の札だ。これを一定の範囲に貼られると、対象が猛獣でも動けなくなる。強弱の差で時間差がつくが、効果は大体同じだ。対象の動きを封じるもの。進むうちにどんどん増えていく。札に書かれている対象の名は魔術文字のため読み取ることが出来ない。本職の魔術師でなければ意味はさっぱりだ。一体何が封じられているのか？期待か、不安か、ぞくぞくしながら歩みを進める。

コケが少なくなり、増えるのは封印の札だ。それもえらく強力な呪符である。近付くだけで魔術師でもない二人がビリビリと魔力を

感じるほどの。

「上、見てみる」

ケイに促されて頭上を振り仰ぐと、そこには頑丈で大型の銃が見えた。作動はしていないようだが、見ていてぞっとする。アレで撃たれれば人間の体など半分が吹き飛ぶだろう。

「内側を向いている。どうしてだろうな？」

ケイがにやりと笑う。意味はユイにも伝わった。

警戒しなければならぬ何かの内側に存在しているのだ。外からの侵入などより恐ろしいものが、ある。

ここに『破滅』が眠っている！

「進むぞ」

告げてもはや余所見<sup>よそみ</sup>はしない。まっすぐに進んでいく。それについて呪符や銃などのごつごつした警戒が増えていく。全て作動してはいないため、二人は気にもしくななかった。

どれくらい歩いただろうか、ケイの息が上がってきたので少し休憩したほうがいいかなと考え始めた時だった。大分コケが少なくなつて闇の密度が上がってきた通路の先に、扉のようなものがぼんやり見えた。

「！！」

着いた、と思った。走り出したくなる気持ちをおさえて慎重に進む。目的地だと安心して警戒を忘れるのは危ない。一步一步進むにつれて、扉の全貌が見えてくる。

扉は大きかった。通路と同じくらいの高さと幅がある。もともと洞窟に存在するものではないようだった。明らかに人の手で作られた扉だ。

断言できるのは、扉の表面にあらゆる封印方法がされているからである。

全面に呪符が張られ、その上から特殊ワイヤーが張り巡らされている。あげく、パスコード式の機械錠も十個はついていた。ユイが視認できたのはとりあえずそのくらいだが、ケイの見た感じではも

つとあるらしい。

「……法王、国王、女王、大統領の寝室でもここまでの警備はしてないだろうな」

なかばあきれてケイが呟く。端末からコードを引き、機械錠に繋がれた。

「こっちは俺が解除する。お前は呪符とワイヤーをたたつ斬れ。お前の傘なら反動もやりきれるんだろう？」

「そうだな、分かった」

ケイが端末をいじる気配を背後にユイは刃を抜き放った。前に立つだけで肌にびりびりと来る呪符の威力だ、うまく反動をやり過ぎないと無力化どころか即死する。後ろのケイに反動が及んでもいけない。至極困難なことだが、ユイは迷わなかった。この程度で死ぬなら世界を滅ぼすことなど出来はしない。開いた傘を盾のように左手に構え、刃を右手に一度深く息を吐いた。凧ぐ水面のように静かな心境だった。覚悟はできている。

彼女は刃を振り下ろした。

迷いなく、まっすぐに。

世界を滅ぼすであろうその一刀を。

参章・開放……ツバサ（前書き）

ここから第二章です。

## 参章・開放……ツバサ

開封の反動はすごかった。傘をかまえていたユイの両脇の地面がえぐれたほどだ。ケイは彼女の真後ろにいたため影響は受けなかったが、少しでもユイの背後からずれていたら、今頃は壁に激突して肉団子になっていただろう。

少し遅れて機械錠も解除され、ユイは扉に手をかけた。

……重い。なまかな力では開かない。

「手伝え、ケイ・カゲツ」

彼女に呼びかけられケイはぎよっとした。

「俺が？」

「ないよりマシだ」

一応男なのだから子供より力はあるだろう、その程度の期待だ。仕方ないなとケイも扉に手をかけた。そのまま二人並んで、全力を込めて扉を押してゆく。

重量を感じさせる軋み音をさせながら扉は徐々に開いてきた。

「全部、開ける、ことは、ないだろ？ 隙間でも、入れれば、それでいい、よな」

滑らかにしゃべると力が抜けそうになるので、ケイの声はアクセントに力がこもっている。

「そうだな」

うなずいて、入れるくらいのスペースが開くまで押す。幸いというか、ユイもケイも体型はすらりとしているのであまり大きく開ける必要はない。

扉を開けるだけで体力を使い果たすなどごめんである。中の『破壊』を目覚めさせるまでは力尽きるわけにはいかない。

「これくらいでいいだろ」

30cmに満たないくらいの隙間だが、体を少し斜めにすれば問題なく入れるだろう。

これまで通り始めにユイが、続いてケイが中に入る。

「……………」

中は明るかった。通路と違ってコケなど見える範囲には見当たらないのに、だ。

一瞬戸惑い、ここは地下のはずだと辺りを見回す。

そして二人は息を呑んだ。

まず見えたのは光。

光は形を成していた。

その真ん中に生まれたままの姿の少女がいた。

ユイよりずっと年下に見える。まだ小学年くらいの少女だ。

光は少女の背から現れている。すらりと大きく、柔らかく。

それは宗教画の一枚にありそうな光景だ。

「……………天使……………？ そんな馬鹿な！」

思わずそう呟いてから気がついた。少女は大きなカプセルに入っている。

幾重にも嚴重に封をされたカプセルだ。扉にあった封印と同じくらしいものがあちこちについている。

その中で何かの液体に浸<sup>ひた</sup>されて、小さな体は浮かんでいた。

光の翼を持つ少女は目を閉じて眠っているようにも見える。

「……………生きては、いないよな。これじゃあ……………」

ケイの呟きは同意できるものだった。少女は全身、頭まで液体に浸<sup>ひた</sup>かっている。

……………まるで標本だ。

近くへ寄って見てみる。よく見ると翼は背中だけでなく、鳥の尾羽のように腰からも生えていた。それも光で出来ている。

「この子は、一体……………」

答えなど返らない。少女は目を閉じたままだ。おそらくこの先の少女が目覚ますことなどあるまい。これはホルマリン漬け、すなわち死体を保存しているのだろう。

「これが『厄災』の正体なのか？ この女の子が？」



この少女は一体何者なのか。能力者が魔法士なのだろうが、こんな風に翼が生えている人間など存在するのか？

ケイがカプセルに手を伸ばすのを見て、ユイはとっさに彼を突き飛ばした。

「げふっ」

手加減はしたつもりだったが、ケイには強すぎたらしい。呻いている。

「な、なにすんだ、怪獣女……っ」

「すまん、つい。この子が裸だから」

「っ?! 俺は幼女の裸体に興奮するような変態じゃねえっ!」

ケイは断言したが彼が変態ではなくても近寄らせるのはまずい気がした。なんせ少女は裸なのである。

「大体、死体に興奮するような性癖もないぞ?!」

「ああ、まあそうかもしれないが、とにかく寄るな。この子が可哀想だ」

ユイは少女をかばうように背を向けた。カプセルに入れられて、こんな所に封印されている少女がなんだか哀れでならない。

この子も五皇国の犠牲者なのかと考えるとなおさらだ。

「この子は一体なんなんだろうな」

「分かん。訊くなら俺に調べさせるよ」

「ん~~~~、それはやっぱり嫌だ」

少し考えてみたが、やはり気が進まない。自分だって死んだ後に裸でこんなカプセルに入れられて、あまつさえ事細かに調べられたらと思うと嫌だ。

調べる相手がケイならなおさら嫌である。

「なんだ? 冷酷無比な裏神官サマがずいぶん甘いことを言うんだな」

とは言つものの、ケイ自身も無理に調べるつもりは無いようだ。先ほどのユイの指摘があつてから微妙に視線を少女から逸らしているところを見ると、案外いいやつなのかもしれない。それと好き嫌

いは別だが。

ユイはため息をついた。ここまで来たのに、見つけたものは羽の生えた女の子の死体だ。

珍しいといえば珍しいが、そんなものに世界を滅ぼす力などあるわけがない。

「他に何かないか？ 機械とか、魔術とか、宝玉とか！」

言い伝えが事実なら、何か他にあるはずだ。事実でなくとも何かあるはずだ。

辺りに視線をやる。むやみに広い室内だ。少女からの光が届かないところに何かあるかもしれない。

「探してみるか……」

ケイも力が抜けたらしく、脱力した声でそう答え周りを見渡した。くるりと視線をめぐらせて一回りして ケイは硬直した。彼の視線はユイの背後を指している。目を見張ったその様子にユイはすぐさま自分の背後を振り返った。

彼女の後ろにあるのは少女の入ったカプセルだ。その後ろから何かが現れたのかと思ったのだ。彼女の勘は間違っではないなかった。

目があった。

水色の瞳がユイを見ている。

ユイは硬直した。裏神官の彼女が、だ。

先ほどまで閉じられていた瞳が開いていて、今はユイとケイを見ている。

カプセルの中、液体にぷわぷわと浮きながら、翼の生えた少女はしっかりと目を開けていた。

「?!」

驚きで声も出ない。死後硬直かとケイは一瞬考えたが、すぐに違うと分かった。

少女の瞳には生氣がある。きらきらと輝いている。

少女はこちらをきちんと認識していて、二人を見ているのだ。息も出来ないだろう液体の中で！

「な、なんだ?!」

「この子、生きているのか!」

叫ぶなり、ユイは体を動かしていた。即座に刃を抜き放ち、カプセルに切りつける。

生きているのなら出してやらなければ! ひょっとして、この中に入れられたばかりなのかもしれないのだ。

音とともに刃が跳ね返る。ユイの腕と特殊合金製の剣でもカプセルにはほんのわずかの傷がついただけだった。

「くっ!」

ただのカプセルではない。おそらくはユイの剣より頑丈な物質と魔法で造られている。

少女をここから出してやりたいのに、これでは時間がかかりすぎる。

手こずっている間に、この子は力尽きるかもしれない。

「ケイ・カゲツ! どうにかできないか?!」

「お前の馬鹿力でも壊せんのか? おまけに中の子供は生きてるし、この子が傷つかないように壊さなきゃならんのか」

ケイは難しい顔だ。

「どうにか考えろ! それしか能がないんだろうが!」

「待て、考えてるんだ。黙ってるユイ・ヒガ」

珍しくあせっているのが伝わってきた。彼も少女を見殺しにする気はないらしい。

## 参章・開放……ツバサ・2

考えるのは彼に任せて、ユイはとにかくカプセルに斬りつける事にした。何度もやっていればその内壊せるかもしれない。チャレンジしているうちにケイがもつといい手を考えるかもしれないし、とにかく何にしてもやってみるのが先だ。

「待ってて、今出してあげるからね」

中の少女に笑いかける。少しでも怖がらせないようにと思ったのだが、少女は笑い返してきた。ほんわりと、月のように。

意外なほど穏やかなその表情に、ユイは一瞬見入ってしまった。気付いたのはその一瞬後である。少女がちよつと首をかしげて、ユイのほうに手を伸ばしてきたことに。

「ああ、大丈夫だよ、出してあげるからね」

助けを求めてきたのだと、彼女はそう考えて少女の伸ばした手に元気づけようと自分の手を重ねようとした。カプセルがあるため実際には触れられない。

そのはずだったのに。

「？」

ユイはあれ、と思った。カプセル越しのはずなのに、やわらかい感触がする。

視線をやる。小さな手が自分の手に触れていた。

カプセルを通り越えて。

「?!」

さすがに仰天した。思わずその手をつかんで引っ張ってみたあたり、やはりユイは普通ではないだろう。少女の体は何の抵抗もなくカプセルをすり抜けた。

「なななな?! おい、ケイ・カゲツ! 通り抜けたぞ?!」

「なにい?! おわつ、本当だツ?!」

少女はユイに手を引かれ、にこにこしている。そこだけ見ると可

愛らしい女の子なのに、背中と腰には光の羽が生えている。

「えーとえーと……の、能力者なのかな？魔法を使った感じはしなかったし」

魔法なら必ず呪文の詠唱が必要になる。熟練者は何らかの方法で呪文の短縮化を図るが、この少女がそんな方法を使った様子はない。大体すっぱだかである。短縮化できるようなアイテムなど裸の少女が身に着けているわけではない。

となると、可能性としては能力者なのだが。

「物質透過……？ そんなことできるのか？ できるとしたらかなりのレベルの能力者だぞ。少なくとも各国のトップレベルくらいの」  
ケイの指摘に、こんな少女が？ とユイは少女を見下ろした。小柄で、抱きしめたら折れてしまいそうなくらい細身の、とても愛らしい女の子だ。身長などユイの胸までもあるだろうか。

「ええと……大丈夫？ 体、なんともない？」

少女に問いかける。あれだけ嚴重に封印されていたカプセルから出た影響はないのか。

少女は首をかしげた。その表情からしてどうやら問いかけの意味が分かっていないようだ。

不思議そうにユイを見ている。身長差があるのに視線はほぼ同じ位置にあった。少女は浮いている。

背の翼には本当に浮遊能力があるのか、それとも無意識に能力ちからを使っているのか。

判別は難しい。それでも少女が類たぐいまれな能力者であることは間違いない。

「いつからここにいたんだ？」

ケイの問いかけ。そちらを向いて、やはり少女は首をかしげる。

「言葉が通じていない……？」

言うなりケイはいろんな国の言葉で話しかけた。彼が使える言語の全てで同じことを繰り返し尋ねる。どれかに反応があればと期待したが、結果は同じだった。

この少女は話せないのかもしれない。言葉を理解しているかどうかもある。

教育を受けていないのは間違いないだろう。困ったなとケイとユイは顔を見合わせた。

早いところ『破滅』を開放したいのに、この子に構っていると時間はどんどん失われていく。かといってほうっておくわけにもいかず、どうしようと思った時だった。

のんびりとした雰囲気を取り裂いてけたたましい警報が鳴り響いたのは。

「！ ばれたか！」

侵入が警備の人間に知れたらしい。

「何故だ？ カモフラージュはうまくいっていただろう」

ユイの言葉に、ケイは頭痛でもしていそうな表情で答えた。

「……エレベーターの惨状が見つかったんだろ」

「あ」

忘れていた。確かにあのままのエレベーターが見つければいくらなんでも侵入者だと分かる。

「急がないと」

この部屋のどこかに『破滅』が眠っているはず。とりあえず女の子を部屋の隅にでも追いやることはできなかった。

ガシャン。室内のどこかで音がした。言いようのない予感に突き動かされて、ユイは少女をケイのほうへと押しやる。

「この子連れて退<sup>さ</sup>がってろ！」

彼女の様子から何かまずいことが起こりそうだと判断したのだろう。ケイは言い返すこともなく少女を抱え、退いた。そのころにはユイはすでに刃を抜き放っている。

ガリガリと床を削る音がした。それは徐々に近付いてくる。視認できる距離まで来たそれは、見たこともないような四足歩行の動物だった。

「複<sup>キメラ</sup>合生物……！」

背後でケイが呻くように言うのが聞こえた。ユイもこれの存在は知っている。どこかの実験で造り出されたであろう、地上にはありえない生物だ。不恰好にいろんな動物の特徴が残っているそれが、二匹。ベースは肉食動物のようで、足は太く、つめが鋭い。サルに似た顔にはありえない牙が生えていた。

凶悪このうえないこんなものまで同じ室内にいて、あつさりと開放されたところを見ると、少女のいたカプセルの嚴重そうに見えた封印もゆるんでいたのかもしれない。

少女が怖がるとかわいそうだ。こんなものに時間をとられるのもいただけない。

速攻あるのみ。

床を蹴る。空間を切り裂くように駆け、キメイラのもとまで瞬時につめた。やつらは油断していた。自分たちより小さく弱そうな生き物としかこちらを見ていない。

あわれなことに知能は並み以下だったようだ。

ユイの動きにあわてて鉤爪を振り上げ、その前足を斬り飛ばされる。怒りの咆哮はすぐに断末魔に変わった。首がぼたりと床に落ちる。

一匹は瞬時に始末したが、もう一匹はユイを警戒すべき相手と理解したらしい。

彼女が動く前に襲いかかってきた。太い前足が頭を狙って繰り出される。

直撃すればスイカのように彼女の頭は割られただろう。

しかしそれは、当たればの話だ。

悠長に待ってやる義理などユイにはない。床を滑るようにスライディングし、キメイラの下をくぐり抜ける。抜けるなり一挙動で跳ね起き、着地したキメイラの背後から跳躍、首の付け根に刃を差し込み、容赦なくひねった。

痙攣<sup>けいれん</sup>が強く手に伝わってくる。命の最後の抵抗だ。造られた歪んだ命でも生きようとする。

死にたくない、と。

歪んだ命でも命と言う者はいるが、そんな理屈はユイにはない。敵対した以上やらなければやられるのだ。だから彼女に躊躇<sup>ためら</sup>いはなかった。キメイラが絶命したことを確かめて、刃を納めずにケイ達のところへ戻る。

「あ」

戻ってまず最初に気がついた。少女がシャツを羽織っている。

「服を着せたのか」

ケイを見ると彼は気まずそうに頷いた。彼が持ってきていた上着だろう。少女にはぶかぶかで、出ているのは首から上と、足元だけだ。動きづらそうだが少女は嬉しいのか、袖を振り回してにこにこしている。

ユイのほうを見てにつこりした。可愛い。背中の翼さえなかったら、ごく普通の女の子だ。

「濡れてないんだよな。この子」

ケイが呟く。

「カプセル内は液体で満たされているのに、この子の体は乾いているんだ。何故だろうな？」

言われて見れば、少女の体は濡れてはいない。短い黒髪は濡れたかのような輝きを持っていて美しいが乾いている。

「それに、服着せて分かったんだが、この翼、物体を通り抜ける」服にいちいち穴を開ける必要はないらしい。

「純粹にエネルギーの固まりみたいだな。形として具現化しているってことは相当の力があるぞ。国家間でのトップレベルなんぞ楽勝で抜くくらいだ」

「そんな子がなんでここに。連れて行ってちゃんと教育すれば五皇国の役に立つこと確実だろう」

「俺に聞くなよ。知るわけないだろ」

もつともなので、その話題はそこで終わった。少女のことでこれ以上時間をかけるわけにはいかない。



「わたしたちは用事があるからここでお別れだけど、ひとりで出られるよね？」

『破滅』を目覚めさせるのに、この少女を連れて行くわけにはいかない。連れて行けばこの子まで死んでしまう。できれば一人で地上に出て、安全なところにいつてほしい。

安全な場所などなくなるようなことをこれからしようとしているのに、馬鹿げたことをいつているなと自分でも思った。

「これから俺たちはとても危ないことをするんだ。だから連れてはいけない。一人で出られるな？」

ケイもそう言っで一応少女を説得するが、通じたかどうかは分からない。少女はほわぁんと不思議そうに二人を見返すばかりだったからだ。

心を鬼にして、少女に背を向けた。広い室内の暗いほうへ向かって歩き出す。そちらにこそ『破滅』が眠っているだろうと見越してそう思っ歩き出したはずなのに　いつまでたっても暗くならない。

理由は一つ。光源がついてきているからだ。

### 参章・開放……ツバサ・3

「……ついてくるぞ」

背後から、ケイが報告してきた。気配を探ると、確かにケイの後方に気配がもう一つ。

振り返ると、生まれたてのひな鳥のように少女はついてきていた。ふわふわと浮いたまま。

「どうする？　ついてくるぞ」

彼には珍しく、心底困った様子でケイが言ってくる。心境的にはユイも一緒だ。

連れて行くわけにはいかないが、置いていくのも危険だろう。万一さっきのようにキメイラが現れたら、こんなか弱い少女はあっけなく食い殺される。惨事は間違いないだろう。

さすがにそれは気分が悪い。ユイが少女をカプセルからひっぱりだしたのだから。

「ううう……でも連れて行くわけにもいかない、よな？」

「当たり前だろ、何がいるのかわからんのに」

お互いに困りきった表情で言い合う。まさかこんなところに小さな女の子がいるとは想像していなかったため、対応に困ってしまう。

「まあ、明るくなって便利は便利だけどなあ……」

呟くケイに少女は抱きついてきた。あわてる彼にじゃれつくようにまとわりつき、次はユイへ抱きついてくる。まるで子猫のようである。

「わ、わ、わ」

少女はとても楽しそうだ。そんな可愛らしい表情をされたら、拒むのは可哀想になってくる。かといってこんな危険な場所を連れて歩く気にはなれない。この子が強力な能力者だとしても、子供なのだ。まして言葉も通じないような子である。

「なんとかしろ、ユイ・ヒガ。 magari なりにも女という子供を産む

生き物だろうが」

「わたしには向いていないということくらい想像がつくだろうが。お前こそその御自慢の脳みそからいいアイディアは浮かんでこないのか？ ケイ・カゲツ！」

言い合う二人をじつと見ていた少女が、不意にユイを指した。

「ゆい？」

「え」

今度はケイを指す。

「けい？」

喋った。たどたどしい発音ではあったが確かに言葉を発した。

「う、うん。わたしはユイ・ヒガで、こっちはケイ・カゲツだよ」  
さっきまで言葉などわからないようなそぶりを見せていたのに。

少女はこの短い間に『ユイ』と『ケイ』が二人の名前だということは理解したようだ。

「そう言えば……お前、名前は？ あるのか？」

ふと気付いたケイがそう尋ねる。

「ナマエ」

少女はにこにこ。覚えてたの言葉が嬉しいのか、輝くような笑顔だ。しかし、会話は通じていない。

「……わかってないな？」

ケイはユイを見た。お前も何とかしろと、目が語っている。

「え、ええと、名前。わかる？ わたしはユイ。それが名前。あなたの名前は？」

少女はきょとんとし、ユイを指した。

「ゆい？」

「うん、それが名前」

ケイを指す。

「けい？」

「そう。それは俺の名前」

そして少女は自分を指差した。

「なまえ」

さつきとは微妙に発音が変わった。なんとなく、要求されているような気がする。心なしに少女の視線も要求しているように見えた。「これって……」

ケイを見ると彼もそう感じているのか、こう言った。

「つけるってことか？」

自分に名前をつけてほしいと少女は言っているようだ。

「この子、名前もない……？」

初めてそのことに気がついた。カプセルにはそれらしい名称など一切書かれていなかったし、少女がいつから閉じ込められていたのか定かではないが、教育すら受けていないのであれば名前がないこともうなずける。

「なまえ」

少女は宙に浮かび上がり、くると逆さになってユイの顔を覗き込んできた。早くつけてとせかされているようで、かえってあせる。「え、ええっと、えっと、あ！ ツバサ！」

あせりながら考えて、とっさに頭に浮かんだ単語を口にしてしまった。

「なまえ、ツバサ？」

少女はぱあっと花咲く笑顔をみせた。そんなに喜ばれては、頷くしかない。

「う、うん、ツバサ」

少女の背にある光の翼が頭にあったせいだろう。ついそう言ってしまったとは今更いえない。だがケイにはすぐさまあきたように指摘された。

「……ひねりがない」

「う、うるさい！」

自分でも分かっている。反射的に考えたのだから仕方ない。それでも反発は覚えるので言い返してやった。

「だったらお前が苗字のほう考えろ！」

ユイのその突っ込みは予想外だったようで、ケイは数瞬黙った。少女も今度はケイの頭上に移動し、彼の顔を覗き込む。

「……………ひ、ヒツキ、とか」

どもりながらもそう答える。その様子から、彼もかなりあわてて考えたと知れた。

一見関連性がないように感じてユイよりはひねったようにも思えたが、待てよと彼女は少し考えた。

ようは日と月だ。そして、ユイの苗字はヒガ。

ケイの苗字はカゲツ　月である。

気付くなり猛烈な勢いでユイは突っ込んだ。

「わたしとお前の苗字からめただけだろうっ！」

人のことは言えず、ケイもまた単純に頭に浮かんだ単語を口にしただけに違いない。

「お前よりましだ！　俺はひねった！」

「半回転ぐらいしかひねってない！」

低レベルな会話である。なおもぎゃあぎゃあ続きそうだった口喧嘩はすぐに止まった。

「ツバサ・ヒツキ、ツバサ、ツバサ、ヒツキ・ツバサ！」

低レベルな争いを止めたのは少女　ツバサの嬉しそうな声だった。あまりにも嬉しそうな顔をするので、ユイもケイもちょっと後悔した。もう少し考えて、もっと可愛らしい名前にすればよかったと。

もつといい名前がないかなあ、と考えて、気付いた。

それどころではない。ツバサにせがまれつい考えてしまったが、状況はそんなのきななものではないのである。早く『破滅』を見つけて目覚めさせなくては警備が追いついてきてしまう。

「こんなことしてる場合じゃない。急いで『破滅』を見つけないと」ケイもはつとした。状況を思い出したらしい。ツバサに流されて時間をかなりロスしてしまった。いそいで視線を走らせるが、部屋が広すぎる。ユイには支障なく見渡せても、どれがそれらしいもの

か見当がつけづらい。見当をつけられるケイには暗いと周りが見えない。だからといって暗視スコープは危なくて使えない。光の翼をもつツバサのそばで暗視スコープなど使えば反対に目が焼ける。

問題のツバサが二人から離れる様子もない。鳥の雛が思い込むように、刷り込みでもしてしまったかのようなだ。名前をつけてあげたせいもあるのだろう、完全になつかれてしまった。

「くそ、せめてもう少し明るければまだ見えるのに」

ケイのぼやきに反応したのはツバサだった。

「けい、みえない？」

ただだどしくそう言って彼女はケイの頭上に移動した。

同時に光が室内にあふれる。驚いてツバサを見ると、彼女の光翼と尾羽が大きく広がっているのが見て取れた。先ほどまではツバサの体より少し大きいくらいのおおきさだったのが、今は室内全てを覆うくらいの巨大な光だ。どうやら伸縮は自在らしい。

「みえる」

これで見えるでしょ？　と言いたげにツバサは小首をかしげた。

ケイは言葉も返せず啞然としている。

あまりにも非現実的な光景だ。

光の翼を持つ少女。天使のような女の子。

「……神学をもっと研究しておくべきだったかな……」

ケイの呟きにユイも同感だった。天使など神学や伝承、おとぎ話の中だけの存在だと認識していたのに、実際にその存在を目にするとは。

しかも、『破滅』を求めて訪れた場所で天使に会うとは皮肉もいいところだ。

自分たちは世界を滅ぼしに来たのに。

「つ、ツバサ？　あのね、わたしたちは危ないことをしに来たの。お願いだから邪魔しないでね？」

世界を滅ぼしに来たと、この子が知ったらどうするだろう？　そう考えてぞっとした。

この子が天使なのだしたら、世界を滅ぼそうとする自分たちを止めるだろう。天使とは世界を護る神の使いだ。神学ではそう言われている。まかり間違っても、世界の滅亡を望んだりはいしないだろう。それならば、ツバサは自分たちの敵だ。戦うことになる。

だが、自分にこの子を斬ることが出来るだろうか？

今も無邪気にニコニコしてユイにすり寄ってくるツバサ。

か弱い女の子だ。可愛らしい女の子だ。弱く、善良な存在だ。護ってやらなければならない生き物だ。そして、この子をカプセルから出したのは自分だ。

五皇国の犠牲者のこの子を斬る　その覚悟はできるか？

無慈悲な裏神官として、手を下す覚悟はあるか？

考えながら、視線をめぐらせる。『破滅』を見つけたら。  
もしもツバサが天使なら。

(……自分たちはこの子を殺さなければならない。)

参章・開放……ツバサ・3（後書き）

絶望のまま世界を滅ぼそうとしている二人は、この子供を、殺すのか。

……殺せるのか？



## 参章・開放……ツバサ・4

何の罪もなくとも、世界を滅ぼすのために殺す。世界が滅んだらどうせみな死ぬのだ。

遅いか早いかの違いだけ、それだけだ。

自分に言い聞かせるようにそう考えた。それで納得ができるかどうかは別だったが。

ツバサは機嫌よく浮いている。ときどきユイやケイの顔を覗き込んでいては何が楽しいのか微笑ほほえんでいた。二人がやることなすこと全てが物珍しらしく、興味深々で眺めている。

……凄く、やりづらい。無邪気な視線のまえて『破滅』を探すという、わけの分からない状態だ。やりづらいことこの上ない。

それでもそのために来たのだ。警備の人間が来てしまったら自分たちは殺される。

警報が鳴り響く中、焦りを押し殺して辺りを探る。ごつごつした機械や、キメイラが閉じ込められている檻おりなどが目に入った。

「ケイ・カゲツ、あの辺の機械とかはどうだ？ 最終兵器っぽくないか？」

「あほ。あれはレーザーだ。あつちはただの銃。あの程度ならイグザイオに普通にある」

どれもこれもケイには目新しい物ではないらしい。『破滅』を呼ぶ最終兵器には到底なりえないものばかりだと彼は言った。

「それよりあのキメイラはどうだ？」

「いや、アレは弱い。『破滅』ではないだろ」

彼が指すキメイラの存在もユイから見たら同レベルのものである。これらのキメイラはとて『破滅』とは思えないくらいの弱さだ。裏神官にたやすく返り討ちにあうような『破滅』などありえない。首を振ったとき、ガシャンと音がした。同じような音が続く。

……先ほど、キメイラが出てきたときと同じ音だ。

「まさか……」

嫌な予感は的中した。多数の檻からキメイラが続々と現れる。十や二十ではない。さすがに数が多く、ユイ一人ではケイとツバサを護りきれないだろう。

「！　まずい……」

ケイが呻くように呟いた。キメイラだけでなく、機械が作動し始めたのがわかったのである。容赦なくレーザーや銃弾を撃ち込むタイプのもので、完全に侵入者を殺すための兵器だ。キメイラで動きを制限されたところへ、銃やレーザーを撃ち込まれたら避けようがない。ユイだけなら逃げようがあるかもしれないが、ケイはまず間違いないで死ぬ。

どうやら警備陣にここに侵入したことが知られたようだ。キメイラはともかく、機械が起動するには人の手が必要。それを考えると、キメイラの檻を開けたのも警備陣だろう。

確実に侵入者をしとめるために。

「ツバサもいるのに……！」

彼女の存在を切り捨てたのだろうか。それとも彼女は無事逃れることができるか。見越してのことか。

確かにツバサが逃れることは簡単だろう。彼女には翼があるのだから、それで天井近くまで行けばいいのだ。

「ここまでか……！」

ユイも呻いた。助からないという直感が、痛いほどの絶望感となつて心を覆う。ここまで来て、『破滅』に触れることすらできずに死ぬのか。

この腐った世界を滅ぼしてやりたかった……！

「ツバサ、逃げろ」

ケイが頭上のツバサに言い放つ。

「わかるな？　上まで飛んで、じっとしてるんだ。そうすれば助かるから」

「そうだよ、こいつの言うことに従ってね、ツバサ」

ユイもケイも、考えもしなかった。思いつきもしなかった。自分たちはここで死ぬのだと、覚悟していた。だから、失念していた。

ツバサもここに『封じられていた』ということ。

「だめ」

あどけない声がした。幼い少女の声。ツバサの声だ。

ツバサはだめと言った。制止とも思えないくらいの普通の声だ。そこには怯えはない。恐怖もない。キメイラや兵器に怖がる様子もなく、ツバサはすいとユイの前に出た。

「危ないっ！」

とつさに傘も刀も放り投げて、ツバサを抱え込んでかばったユイの目の前で、キメイラは地面に伏した。

暴れる様子もない。凶暴そうな面相とうらはらな従順さで、待てと指示された犬のようにおとなしく伏せている。あつけにとられるユイの背後でケイも気がついた。

「機械が停止した……？」

さきほどまでしていた作動音が聞こえない。目をやると、あちこちの作動を示す光が消えている。

「なんでだ？」

呆然とする。今何が起こったのだろう。ツバサが駄目と言ったらキメイラがおとなしくなり、機械が止まった。のだろうか？

確信は持てない。ツバサはユイの腕の中で抱っこされたことに満悦なのかにこにこしているだけだ。

「？ ツバサ、今なにかしたの？」

「なにか。なあに？」

本人はきょとんとしている。とぼけているようには見えない。こちらからの質問の意味が理解できていない可能性もある。さっきまで言葉も解らないような反応をしていたのだし、ツバサと意思の疎

通を図るのはまだ困難なようだ。

「この子がやった……？　いまいち確信が持てんが、可能性としてはそれが一番高いのか」

ケイはそう言っつてツバサを眺めた。にこおつと満面の笑顔を返される。

「解らん……」

すくなくとも外見からはそんなことができるとは思えない。大体、ツバサがまれなほどの能力者としても、能力ちからを使うのであれば必ず精神の集中が必要なはずだ。どんな能力者であれ例外はない。必ず一定の間集中しなければ能力は発動しない。ツバサが集中をしていたような気配はなかった。魔法に呪文が必要なように能力には精神集中が必須なのだ。これは常識である。熟練者であれば魔法も能力も短縮すくの術はあるようだが、今ツバサは短縮して能力を行使したのだろうか。

「……ツバサ？　短縮の方法って知ってるか？」

尋ねるがツバサはやはりきょとんとするのみ。

「たんしゆく。たんしゆく？」

言葉を理解できてはいるようなので、単純に意味を知らないのだろう。やたらと楽しげにケイの言った言葉を繰り返している。

「だめか。せめて意思の疎通は図りたいよなあ」

「そつー」

「……難しいようだぞ、ケイ・カゲツ」

ユイはツバサから手を離し、放り投げた傘と刀を拾い上げた。ツバサはそのままケイのほうへふわふわ流れてゆく。空気に乗っているかのようだ。

「とにかく、ツバサに助けられたんだらう？　ならお礼を言わないと。ツバサ、ありがとうね」

笑いかける。にこにこしながらツバサは返してきた。

「ありがとー」

「うん。感謝の気持ちだよ」

「かんしゃ」

……ひとつひとつ教えていくかなさそうだ。その時間があればの話ではあるが。

「それにしても、『破滅』はどこにあるんだ？」

まわりついてくるツバサの頭をよしよしとなでてやりながら、ケイがぼやく。

いまや室内にあるのは『おすわり』しているキメイラの群れと、動かない機械だけである。

ツバサの光翼はずいぶん縮んで小さくなっており、今は彼女の小さな背を覆うくらいの大きなので離れた場所は暗くてケイには見えないが、さっきまでの様子で大体のことは頭に入った。

どれも『破滅』とは思えないものだ。目新しいものなどない。珍しいと思っただのはツバサの存在くらいだ。翼と尾羽の生えた人間など見たことはないが、表現するなら『天使』だろう。『破滅』という言葉とは真逆のイメージである。

ここにいたのなら、ツバサが『破滅』の詳細を知っているかもしれないが、質問しても意味を解ってくれるかどうか疑問である。この子がもし天使なら、『破滅』のことなど答えてくれはしないだろうとの思いもある。

「ここには、ないのか？」

進退窮<sup>きわ</sup>まった。やはり当初考えていたように『破滅』の存在はデマだったのか？

五皇国がつくりだした、架空の存在。それを真に受けてここまで来てしまった自分たちがひどく間抜けに思える。

「どうする。これ以上ここにいても意味はないぞ」

かといって外に出てしまえば、警備に殺されるのは明らかだ。逃げようがない。ここに来るまではほぼ一本道だった。

その一本道に銃やいろいろなトラップが配置されているので、避けて通るのは不可能に近い。トラップの類は来るときは作動していなかったが、この分では間違いなく作動しているだろう。そのうえ

地上に戻る術はエレベーターのみである。

殺してくれといっているようなものだ。

もとから命が惜しいとは考えていないが、この状態は悔しかった。せめて『破滅』に触れてでもいればまだ満足して死ねたものを。

「他に道はないのか？ ケイ・カゲツ。『破滅』がいそうな隠し場所や隠し通路があったりはしないか？」

「可能性は薄いけど……一応調べてみる」

息をついてケイは端末を起動させた。その辺の機械に接続して、そこからハッキングをしかける。ユイには何をしているかさっぱり分からないが、これらの機械の大元に接続して何かするらしい。素早く端末を操作するケイの頭上でツバサが目を輝かせて端末を覗き込んでいる。

「なあに？ なあに？」

「これか？ これは端末。いろいろできる機械だ」

「いろいろきかい」

納得したのかコクコクと頷いている。本当に理解しているのかは不明だが。

それにしても人懐っこい子である。ユイとケイにここまでなつくとは、奇々な子だ。

ユイはあまり表情を表に出さないし、ケイもお世辞にも愛想が良いとはいえない。

特に子供好きでもないうえに、子供に好かれるタイプでもないはずだ。

天使のようなこの子に、どうして自分たちのような腐った人間がなつかれるのか不思議でたまらない。

「ツバサ、ケイの邪魔をしちゃだめ。大事なことしようとしてるからね」

言って少女を抱えてケイから離す。

「……呼び捨てかよ、おい」

ぼそりとケイがぼやいたのが聞こえた。

意識してはいなかったのと言われて気がついた。

「ああ、そうだな。気にしてなかった。気に障ったか」

「さわりまくりだ、暴力女」

「そうか。ではこれからずっと呼び捨てにしてやる。喜べ」

嫌がらせ以外のなにものでもない。ケイが嫌がるならずっとこう呼んでやろう。

いままで散々言われたイヤミのお返しだ。

「……この女どうにかして殺す方法ないもんかな……ゴキブリ並みの生命力だから洗剤か熱湯かければ一発か？」

ぶちぶち言っている。ゴキブリ扱いにはさすがに力チンときたので穏やかにやりかえた。

「うわあ、怖いねえツバサ。こんな大人になっちゃだめだよ？」

「ケイ、だめ？」

「そうだね、だめだね」

にこやかにツバサにそう教えていると、ケイは唸った。

「変なこと教えるなッ」

「わあ、こわい。怖いねツバサ」

わざとらしいまでの朗らかな声でそう言ってやる。

「く……ッ」

無邪気なツバサに言われてはさすがに強く出ることができず、ケイは齒噛みした。珍しく知恵使いやがってなどと口の中で呟いているのもユイには聞こえていたが、勝ったと思っているので不快には思わなかった。

「ケイ、ユイ、なかよし。けんかだめ。ツバサいや。かなしい」

プルプルと首を振り、ツバサはそう訴えてきた。真剣に二人がけんかするのは悲しいと訴えている少女の様子に、ケンカする気もしぼんでしまう。

仕方なくユイはうなずいた。それとなく話を逸らすつもりで。

「う……うん。分かった……ツバサずいぶん喋れるようになってきたね」

カプセルから出たときより大分語尾が増えてきている。このわずかな時間で、すさまじい学習速度だ。

「ツバサは一体何者なんだろうな」

端末を操作しながらケイは言う。言われた本人のツバサは不思議そうだ。自分のことを言われていると理解しているようだが、答えは持っていないようでキョトンとしている。

ツバサがここに封じられていた理由はなんなのだろう。危険な存在とは到底思えないし、危険度ならキメイラや銃のほうがよく高い。

「ツバサはどうしてここにいたの？ 覚えてることある？」

ふと思いついてそう訊いてみた。なにかあるはずだ、ツバサがここに封じられる理由が。

だが、ツバサが何か答える前に、物音が答えた。ズン！と腹に響く音だ。

「?!」

音がしたのは扉のほうだ。大分歩いたためツバサの光は扉に届かず、暗闇の中に隠れてしまっている。だから見えたのはユイだけだ。

あの重い扉が閉じている。

「しまった！」

あれだけの重い扉が自然に閉まるわけがない。警備が操作したのだろう。キメイラか銃で侵入者は始末できたと見越したのか。

「まずい。閉じ込められた」

ケイと力を合わせれば何とか開けられるだろうが、開けている間に狙われたらひとたまりもない。『破滅』にたどり着く前に終わるのは嫌だ。

とりあえずケイの検索が終わるまではヒマなので（キメイラも機械銃も動く様子は全くない）扉を安全に開ける方法がないだろうかと試してみる。刀で何度か斬りつけたら穴ぐらいは開かないだろうかと考え近付くが、内側にも呪符が貼られているので反動が危ないとあきらめた。



ケイが作業中の今は位置的に彼をかばうのが難しい。ましてツバサもいるのだ。

二人を背にかばって反動をうまくやり過ごすには、ケイにツバサを抱えてもらわなければならぬ。ユイの傘はいっぺんに複数を護れるほど大きいサイズではないのである。

「ツバサ、そっち行くな。ここにいてくれ、暗くて見えない」

ケイがツバサを呼んだ。ユイについてこようとしていたらしい。本当にひな鳥のようだ。

こんな状況なのになんだかほえましいな、などと感じてしまう。ツバサは本当に『天使』なのかもしれない。殺伐とした空気もツバサがいると浄化されるような気がした。

ケイのところへ戻っていくツバサを目で追い 必然的にケイの姿も視界に入る。

光源のツバサが近寄り見えるようになったのだろう。ケイは端末を覗き込み、そして彼の体に緊張が走ったのがユイには分かった。何かまずいことが起きたとユイは直感する。

「ユイ！扉を開ける！ 開けないと俺たちは死ぬぞ！」

ケイの叫びで直感は正しかったと知れた。

## 参章・開放……ツバサ・5

「分かった、こっちに来い！ 扉の内側にも呪符があるんだ、お前たちがそっちにいると反動が殺しきれない、こっちに来い！」

叫び返すとケイは機械につなげていたコードを引きちぎるようにして離し、ツバサの手を引いてユイのほうへ走ってきた。すぐさま彼女の後ろに隠れる。

「ツバサを抱えてろよ」

「分かつてる」

彼の声には緊張がある。よほどのことを端末から拾ったのだろう。急ぐべきだ。

彼がツバサを抱えたのを気配で察してから、ユイは刀を振り下ろした。

バチバチと火花が散り、彼女は愕然<sup>がくぜん</sup>とする。

呪符からの圧力で扉まで刃が届かない！

「……この！」

歯を食いしばって力を振り絞る。全力で刀を振り下ろそうとするのだが、呪符はそれを許さない。外側のものより内側の呪符のほう为数段強いものらしく、腕力ではびくともしなかった。

バチンと火花がはじける。ユイの刀は弾き返された。

「なんだ?! だめなのか?!」

「弾かれる！」

特殊な書かれ方をしているのだろう。扉の外側のものはユイの刀でも斬り裂くことができたが、内側のものは物理的な力ではどうにもできないものらしい。すくなくともユイの刀の強度では話にもならないレベルだ。こうなると魔法士でなければどうにもできない。それも並大抵の魔法士では駄目だ。国家間のトップレベルでないと無理だろう。

「どうにもならないのか?!」

ケイの声には焦りがにじんでいる。

ユイは何度も斬りつけたが結果は同じだった。この呪符には彼女の刃は通用しない。

「くうっ！」

何度目かの火花が散った時、ユイの耳は音を聞いた。

シュー。空気を排出するような音だ。

「！！くそ、終わりか……ッ！」

ケイが絶望に呻く。

「なんだ、この音？」

シューシューと音は勢いを増してくる。

「消火剤だ」

「？ 火を消すアレか？」

「そうだ。火を消すものだ」

どこからか注がれてくるのだろう。音は強くなるばかりだ。

ケイはツバサを抱えたまま、うつろに言った。

「……酸素をかき消してな」

「！」

それでユイにも理解できた。火が燃えるためには酸素がいる。酸素さえなければ火は燃えることができない。

そして、酸素がなくなるということは呼吸ができなくなるということだ。

扉が閉まった室内は密閉されている。窓どころか換気口もないのだ。すぐに息が苦しくなってきた。

「くう……！」

呻きながら扉に斬りつける。ここから逃げなければ。

自分たちが逃げるのが不可能なら、せめてツバサだけでも！

ユイの背後でケイのどを抑えてうずくまる。強化されていない普通の人間だ。耐えられる時間は短い。ユイでもさほど長くは耐えられないだろう。いくら強化されていても呼吸は基本だ。それができなくなれば無力化される。

「ツバサ……逃げろッ」

「そうだ、ツバサは通り抜けできるんだよね？　早くここから出て！　逃げて！」

ケイはツバサから手を離し、ユイはツバサを壁のほうへ押しやった。ツバサだけなら逃げられる。

「はやく！」

「行くんだ！」

彼女たちの剣幕にツバサは驚き、そして首をかしげた。苦しそうなユイたちを見て不思議そうなのと、ユイもケイも気づいた。ツバサは苦しんでいるのではない。キメイラでさえむこうで苦しみにのたうちまわっている中で、ツバサだけが平然としている。どんどん空気が薄くなってきたこの室内で。

呼吸をしていないわけではないだろう。この地上の生物である以上呼吸は必然的なものはずだ。

何故？　そう思う間はなかった。

「あっちいけ」

ツバサが一言呟いた途端、いきなり呼吸が楽になった。普通に息ができる。朦朧<sup>もうちゅう</sup>としていた視界が開けて、事態が見えてきた。身を起こしたユイとケイが見たもの。

自分たちの体を覆うように淡く光る薄い空気の膜がある。シューシューという音はいまだ続いていて、消化剤は注がれているようだ。膜の向こうでキメイラが痙攣しているのがうかがえた。

屈強なキメイラが絶命しかかっている、自分たちはなんともない。二人はツバサを見た。彼女たちよりも小さな少女を。

「……これ、ツバサがやってるの？」

空気の膜を指差しておそろおそろそう訊いてみる。少女はこっくりうなずいた。

「ユイ、ケイ、くるしい。くるしいのよってくる。ツバサ、くるしいのあっちいけした」

そう、胸を張る。ツバサがやったと思って間違いはないようだ。

「……うそだろ……」

呆然とケイがつぶやく。にわかには信じられない。消化剤からガードするだけでなく、同時にこの薄い膜内で酸素を造りだしているのだ。不自由なく呼吸ができるように。それもほぼ一瞬で。

とんでもない能力者である。いまさらながらそれが分かった。「ユイ、ケイ、くるしい?」

まだ苦しい? と本人は心配そうだ。

「あ、いや、平気。もう苦しくないよ、大丈夫。ありがと、ツバサ」ユイが笑いかけるとツバサはほっとしたのかやっと笑い、こう言った。

「ユイ、でたい?」

と、扉を指差す。先ほど必死で扉を斬りつけたので、よほどここから出たいのだと理解したらしい。

「う、ん。一応……」

気弱に答える。どう反応してよいものか。ユイでも歯が立たなかった扉だが、ひよっとしたらツバサには簡単に開けられるのではなかろうか。

そう思った次の瞬間には予想が的中したことを知った。

ツバサが扉に向けて手を軽く振っただけで、あの重かった扉がひとりでに音を立てて開いてゆく。

……もはや何もいえない。ぽかんと口を開けるだけだ。アレだけ苦勞して二人がかりで扉を押し開けたのに、ツバサはいとも簡単に開けてしまった。呪符も彼女には意味を成さないらしい。

「……どうする?」

「どうって……出るか、とりあえず……」

空気が抜かれていく室内に長居はしたくない。なによりも思考回路が停止してしまった。

室内へ出た途端、天井に設置されていた銃から弾丸が連射されたが、察知したユイはあっさりとそれを斬りおとした。

続けてツバサが「いや」とひとこと。それで全ての銃が沈黙した。銃だけではなく、さまざまなトラップが全て停止したようだった。ツバサがやったことはもはや明確だが、なにをどうしてこうなるのか。

魔法や能力ちからを行使したようには見えない。呪文どころか精神集中の様子もなかったのだ。

「いや」のたつたひとことである。

「こ、言霊ことだまか？ でもあれは法暦785年に迷信とオルタ博士が公式発表したはず……ん、いや、それ自体がすでに五皇国の情報操作で、実は隠していた？ それならツバサがここに閉じ込められていたことも説明できる」

なにやらケイがぶつぶつ言っている。脳内コンピューターで納得のいく理論を構築しているらしい。

「ことだま？」

聞きなれない単語だったので訊いてみる。侵入した道を戻りながら。

「ああ、言葉を使っておよそ不可能と思われることをやってしまう能力だ。理論的には魔法に近いが全くの別物で、魔法は元素にしかアクセスできないが、言霊は言葉が及ぶもの全てに影響を与えることができると言われていた。ほぼ万能だな」

「それはたいそうな力だな。で、ツバサがその言霊使いだと？」

「ことだまー」

わかっていないツバサがふわふわ抱きついてくるのを受け止めて、ユイは会話を続ける。

「でも今、迷信だと言ってたか」

「それなんだ。高名な研究者が三十年ほど前にありえないと発表してる。実際に研究が成功した例も残ってない。でもそれも情報隠滅の可能性がないとは言えないしなあ」

ケイが悩んでいる横でツバサはユイに構ってもらえてご機嫌だ。とてもそんなすごい力の持ち主には見えない。

「で、その『ことだま』ってやつはどうやって発動するんだ？」

何気なくそう訊いたユイにケイはあっさり答える。

「そりや言葉でだろ」

「……じゃあ喋れないと発動しない？」

「だろう」

「ツバサは最初カプセルの中にいたぞ？ あの中では喋ることなんて無理じゃないか？」

指摘にケイははっとしたようだ。カプセルを通りぬけてきたツバサを見て最初は能力者ではないかと思ったことを失念していた。

「そうか、そうだな、最初ツバサは言葉も理解していないようだったし……くそ、お前に指摘されるまで気づかんとは！ 屈辱だ！」

どこまでも腹の立つ男である。ツバサの手前、殴りたくてもできないのでなおさら腹が立つ。

「うーん、じゃあ一体ツバサの力は何に属するものなんだ？」

まだ悩んでいるので死ぬまで悩んでいるとほうっておくことにした。

今はとにかく『破滅』を探すのが先だ。悩んでいるケイはあてにしないでユイは自分で隠し通路などを探すことにした。あの部屋には存在していなかったことは明らかなので、どこかに隠し通路があるはずだ。

『破滅』が本当に存在していればの話ではあるが、ここまで来て何もなかったなど納得できない。あれだけの警備を敷いておいてないもないほうがおかしい。

絶対に何かあるはずなのだ。

視線をめぐらせるユイをまねているのか、はたまた単に周りが物珍しいのか、ツバサも一緒にきよろきよろしていた。

通路に生えている光るコケを触っては感心したようにうなずいている。

浮き上がって銃をツンツン触ったり、降りてきて床をじいっと見つめたりと、何でも珍しいらしい。外に出たことがないような態度

だ。そうするといつからあそこにいたのだろうと不思議に思う。どう見てもツバサは小学年ぐらいだ。幼児とはいかないが言語能力はそれに近かった。

言葉も知らないような女の子をこんなところに閉じ込めて、五皇国は何をするつもりだったのだろうか？

ほめられるようなことでないことは確かだ。

「ツバサ、わたしのそばから離れたら危ないよ。こっちにおいで」  
よぶと素直に戻ってくる。可愛い。なんだか妹ができたみたいで少しくすぐったいような気もする。こんな感情は初めてだ。

誰かを護りたいと思うことなど今までなかった。

任務で仕方なく護ることは多々あったが、自分の意思で何者かを護ろうと思うことなど初体験である。家族もおらず、友人と呼べる存在も作らなかったのも、ツバサのように無邪気に寄ってこられるのはちよつと照れる。かといって不快ではないのが不思議だ。

ケイも似たような心境なのだろうか。彼のツバサに対する態度もユイと同じように柔らかい。小さな女の子であろうとすげなくするようなタイプだと思っていたのだが、そこまで嫌な奴でもないようだ。

ツバサはケイのほうに浮かんでいつて彼のまねをして腕を組んで首をかしげている。

ほほえましいが状況はそんなに優しいものではない。警報はあいかわらずけたたましく鳴っているし、『破滅』は見つからない。

自分たちが追い詰められているのは変わらないのだ。

「ケイ、お前ここに何しに來たのか忘れてないか」

まだ唸っていたケイにやむなく突っ込む。この男の力がないと隠し通路を見つけるのは至難だ。

「あ？ ああ、そうだった」

思考の迷路からようやく出る気になったらしく、ケイは端末を起動させた。先ほど無理に連結を切ったので、起動に少しかかると言う。嚴重なプロテクトに押し入り、あげく強引に接続を切って、そ



れでも壊れていないあたり、さすがに天才の作ったものといえよう。  
なまじの端末ならとうに壊れている。

「早くしろ」

機械にうといユイには遅いか早いかの違いしか分からない。せかしてうるさいと嫌がられた。

「機械オンチはだまつてろ。なあツバサ？」

ツバサにふられては言い返せない。ユイは反撃の言葉を飲み込んだ。ケイがツバサに向かって言ったのはちよつとまへの仕返しだろう。ユイにしてやられたのがよほど悔しかったらしい。

今度はどうやってやり返してやろうかと考えていたユイのマントをツバサがくいくいと引っ張った。

「？ どうしたの、ツバサ」

「ユイ、くる」

ツバサは通路の先を見ている。何かが来ると言うのか。ユイはケイとツバサの前に出た。

警備が来たのだろうか。侵入者の死亡を確認に来たのかもしれない。扉が開けられたことを感知した可能性もある。どちらにせよ歓迎できる相手ではない。

できれば生け捕りにしたいところだ。ここの警備に『破滅』の存在を問いただすのが一番手っ取り早い。

ユイはそう考えた。油断なく刀をかまえる。

簡単にことをなせると思っていた。ここまで入り込むのは容易だったからだ。

それが甘い判断だったと、彼女はすぐに知った。

足音もなく現われたのはユイが知っている人間だった。  
すらりとした肢体しだいに銀色の髪。

五皇国の誰もが知っているだろう高名な 女。  
ユイは絶望的な気分でその名を呼んだ。

「セッラ・オウンゴン……！」

#### 四章・壁……越えるべきもの・1

「ここで何をしているのです」

冷たい声が通路に響く。武器を構えているこちらに対して身構えもしていないのは絶対の自信の表れか。

ユイなど自分が手を下すほどの相手でもない、と。

セトラ・オウンゴン　セイリオス第壹位の裏神官である。地位だけでなく実力もかねた第壹位だ。ユイの戦闘術の師でもあり、彼女がかなわない唯一の相手でもある。

「こたえなさい、ユイ・ヒガ」

答えも何もここにいること自体が答えだ。それはセトラにも分かっているはず。

それでもあえて訊いてくるということは、弁解しだいでは殺さないということだろうか？

……いいや、セトラはそれほど甘くない。ユイはそう理解している。たとえ技を教えた弟子であろうとも、必要となればためらわず殺す。

セトラがこだわるのは自身が仕える法王の身の安全だけだ。法王を護るためならどんなことでもする女である。法王を狙った暗殺者は全てセトラに阻まれ、返り討ちにあっている。

それが法王の身内であつても例外はなかった。数年前、法王の叔父が暗殺をたくらんだことがあつた。実行者は別の人間だったのだが、セトラはいとも簡単に実行者を捕らえて尋問し、黒幕の存在を知るなり暗殺に走ったそうだ。

襲撃からわずか数時間しか経過していなかったという。すさまじいスピードはセトラの有能さと非情さを示している。

ユイたちを殺すことなど瞬く間にやってのけるだろう。セトラにはそれができるのだ。

ましてこちらにはケイとツバサという足手まといがいる。ユイー

人だったとしてもおそらくはまだ勝てない。もう数年もすれば勝てると思っていた相手ではあるが、今はまだ無理だ。ケイとツバサを置いていけば逃げられるかもしれないが、そのつもりは毛頭なかった。

ケイだけならともかく、何も分らないツバサを置いていくのは大嫌いな五皇国がやることと同じことだと思うからだ。

弱いものを見捨てるのは 五皇国と同じになるのは死んでも嫌だ！

ユイは手のひらがじつとりと汗ばむのを感じながら口を開いた。

「あなたこそ、何故ここにいるのだ、セトラ・オウンゴン」

「訊いているのはこちらです。質問に答えなさい」

セトラは無碍<sup>むげ</sup>もない。隙あらばどうにかして斬りかかろうとユイは構えてはいるものの、無造作に見えるたたずまいには全く隙が見えない。これがユイとセトラの実力の差だろう。

動けない。動けば終わる、それが分かる。

どうすればいい？ ケイには無論のこと頼れない。ツバサに危険なことはさせたくない。

自分がおとりになってケイとツバサを逃がすことができればいいのだが、セトラを引きつけることができるかどうか。

陽動だとすぐに見抜かれる可能性が高い。セトラは仕事上、ケイのことも知っているはず。彼が戦闘に関しては素人に近いことくらい理解しているだろう。

セトラが陽動だと見抜けばケイもツバサも瞬時に殺される。残ったユイもいわずもがなだ。

生き残ることが無理なら、せめてツバサだけでも逃がしたい。五皇国の犠牲になるのは自分たちだけでたくさんだ。

「ケイ、覚悟を決める」

「……わかってる」

ケイは小声で答えた。彼もセトラのことは知っているのだ。恐ろしく強い女。おそらくユイでも敵わないとも理解しているだろう。

ケイから見たならユイも充分強い女だが、セトラはその上に行く。  
普段セトラは法王の神殿に常駐しているはずなのだ。法王を護るために法王から離れない。

そのために、法王の愛人なのではないのかと、下世話な連中に<sup>やゆ</sup>擲揄されるくらいに。

「……！」

雷光のようにケイの脳裏にある想像が浮かんだ。

セトラ・オウンゴン。決して法王から離れない女。法王から絶大の信頼を寄せられている存在。今ここにいるわけがない女性。

その彼女がここにいるということは　法王もここにいないのではないのか？

何故？　ぐるぐるとケイの中で思考が回る。

ラグドラリヴ。

『破滅』が眠る地。誰も入るはずがない場所。それなのに地図が存在している。

ここに入る何者かの存在を示唆<sup>しご</sup>する地図。どこの国にも存在する同じ地図。

それが意味することはなんだ？

法王が、セトラ・オウンゴンが何もいないはずのこの地に滞在する理由とは？

「ここにいる理由……まさか」

ケイはセトラを見た。依然として動かない『銀の殺戮者』を。

「あるんだな、ここに。存在しているんだな？！　『破滅』が！」

セトラは動かない。ただ、その目を細くした。

「賢いというのは不幸ですね。ケイ・カゲツ」

返答でケイは理解した。セトラは『破滅』が存在していると答えたも同然だ。

「あなたは優秀だと聞いていました、ユイ・ヒガも優秀な教え子でした。あなたたちが何を考えてこんなことをしでかしたのか……わたくしには分かりません」

口調は穏やかだが、決して優しくはない声が告げている。

ここでお前たちは死ぬのだと。

「残念です。とても」

セトラが動こうとした。そこまではユイにも分かった。そこからは一瞬だろう、そうも思った。

死ぬ。殺される。せめて一太刀でも浴びせてやりたい……！ セトラが踏み込んでくるタイミングさえ計れば一撃くらいは叩き込めるはずだ。

ユイの刹那の願いはかなわなかった。

「……」

セトラが動きを止めたからだ。あのセトラが愕然<sup>がくぜん</sup>としていた。視線はユイの背後に向いている。そこにいるのはケイと ツバサだ。さっきまでユイのマントに隠れている位置にいたツバサが、ユイの肩の辺りまで浮かんできている。

セトラが見ているのはツバサだった。

目を見張って驚愕に震えている。

「何故……！ どうやって……」

あきらかにツバサに対して言っている。この小柄な少女に怯えているようにも見えた。

その理由がユイとケイには分からない。ツバサは別段何かしようとしたわけでもなく、ほよんと浮いているだけだ。少女がセトラに怯えているような様子もない。まあ、ツバサはセトラのことなど知らないだろうから、怯える理由もないのだろう。

「おまえ、ユイとケイいじめるのか」

むっつりとツバサは言った。セトラが何者か分からなくてもユイ達に危害を加えようとしたのは分かったらしい。

「っ？！ もう話せるように……！ おとなしく眠っていればいいものを！」

叫んでセトラが腕を振った。ユイはセトラが使った武器を知っている。透明な極細の鋼線だ。強化された人間がそれを放つと視認する

のはほぼ不可能だということまで知っていた。

防ぐことはできない。ならばこの身をもつて盾とするしかない。運が良ければマントと制服でなんとか即死はしないだろう。

さすがにユイの体で邪魔されてはツバサに鋼線が届かないはずだ。そこからどうするかは考えてはいなかった。ただ、ツバサを護りたい一心だったのだ。

「おまえ、きらい」

ツバサはセトラに向けてそう言った。ただの一言。

そのひとことで、盾になったユイの体にさえセトラの鋼線が届かなかった。

じゅう。熱した鉄板に水を落としたときのような音。何が起きたのかユイは我が目を疑った。

魔法的技術を駆使したであろうセトラの武器が、あっけなく無効化されたと気付くまで数瞬。鋼線が蒸発したのだ。

防ぐとか、そんな問題ではない。

まるでお話にならないほどの無効化だ。ありえない。セトラが使う鋼系は特注のもので、最高クラスの魔法がかけられているはずだ。生半可な方法で無効化できるはずもない。

それを、ツバサは簡単に蒸発させた。

そばで見ていたケイにもツバサが何をしたかは分からなかった。

「……！ かなわない、というのですか……」

セトラはツバサを見ている。ユイもケイも無視して、彼女たちよりさらに幼い少女を警戒している。

目を逸らせばツバサに殺されるとも言うような警戒振りだ。セトラのような重鎮がツバサの何を一体そこまで恐れるのだろうか？

この天使のような女の子の一体どこが怖いというのだ。ユイには理解できない。

「なんだ？ 何故そこまでこの子を恐れる？ ツバサが一体何をしたって言うんだ」

分からない彼女の背後でケイはしばらく考えて、落ち着けとでも

言うようにユイの背をぽんと叩いてきた。

それから口を開く。

「セトラ・オウンゴン。一つ訊きたい。子供の質問に大人は答える義務がある。そうだろう?」

答えを待たずにたたみかける。

「この子は封じられるような存在か?」

『破滅』が眠るはずの場所でユイとケイはツバサに会った。他には目新しいものは何もなく、なのに厳重な封印がされていた。封印が向けられていたのはどこにだ?

『誰に』だ?

訊きたいことは一つ。

ツバサが五皇国にとってどういう存在か。

セトラは笑った。愚かな子供だと言いたげにケイを嘲笑<sup>あざわら</sup>った。

「知らずにいるのですか? ならば見たものが全てです」

答える必要はないと、セトラは言いたかったのだろう。

だがケイにはそれで充分だ。過ぎるほどの情報を得た。

そして確信した。

「なるほど。理解した。切り札ということはない」

その声にセトラは顔色を変えた。失言に気がついたのだろうがもう遅い。

「ツバサ、力を貸してくれ。あの人をどこかへ追っ払うことはできるか?」

そう言っただけでケイが指差すと、セトラに対していたときとは違って変わって上機嫌にツバサはうなずいた。

「できる。ケイ、あいつくらい? ツバサ、いないいないできるよ」

「そうか。してくれるか?」

「うん」

セトラが動いた。ケイを先に叩くべきだったと今更ながらに判断したのだろう。

だが、遅い。ツバサはセトラを見た。それだけである。何も言葉



は発しなかったし、特に念じたようにも見えなかった。

それだけでセトラは吹き飛んだ。まるで透明で巨大な手に突き飛ばされたかのように勢いよく吹き飛び、壁に激突するかと思いきや、壁をすり抜けてどこかへ消えた。

「???!」

ユイにはさっぱり理解できない。唯一わかるのは、どうやらツバサに助けられたということだけだ。能力者や魔法士との戦闘にも熟達しているはずのセトラをあっけなく退けたということ。

「い、今……一体何が起きた？」

振り返る。ツバサは変わりなく浮いていて、ユイにつこり笑いかけて抱きついてきた。

「ツバサが何かしたの??」

「いないいないしたよ。ケイ、あいつきらい。ユイもあいつきらいだからツバサもあいついや」

ユイとケイが嫌いな人間だからツバサも嫌いになったと言う。そして何らかの力を使ってセトラを退けたようだ。

「……なにをしたの？」

「いないいないって」

分らない。ツバサの今の語尾では説明されてもこちらが理解不能だ。

「なるほどな」

ケイは理解したようだ。ユイが説明しろと彼を見ると、彼は苦笑した。本当に苦い笑みだ。

「何で今まで気付かなかったのか不思議でたまらん」

「なにが」

促すと、ケイはツバサを見てまた苦笑した。

「『破滅』とはもう出会ってたってことだ」

彼の視線は、ユイにじゃれついているツバサに向けられている。

ユイが頭をなでてやっている小さな女の子に。

「……この子が? 『破滅』? 『厄災』?」

## 四章・壁……越えるべきもの・2

背中に光翼と尾羽をもつ天使のようなツバサが、世界を滅ぼす『破滅』？

ユイは思わずまじまじとツバサを眺めた。あどけなく、無邪気な笑顔が返ってくる。まさしく『天使』のような笑顔だ。

「……ありえないだろうそれは……」

納得できずに呟く。到底信じられる話ではない。信じろというほうが無理な話だ。

「こんな小さな子供が『破滅』？ 『厄災』？ 世界を滅ぼすもの？ そんなわけがないだろうが」

ユイの意見にケイは肩をすくめた。

「俺もそう思う。でもな、セトラほどの重鎮がなんであそこまでツバサを警戒するんだ？」

どうしてツバサはあんな場所に封じられていたんだ？ 考えてみろよ、あそこにあつたものは全て内側に向けられていたんだぞ。内側にあつたのはなんだ？ その中にいたのは誰だ？」

内側に向けての警戒が厳重な施設。通路を進むごとにこつこつとした封印と銃器が増えていった。

あげくのはてのあの封印されていた部屋。中にはキメイラの群れと強力な兵器が、これまた内側に向けられていた。

その部屋の中心にあつたカプセル。

その中にいたのは ツバサだ。死んでいると思っていた彼女は謎の液体の中でも生きていて、あげく厳重な封のされているカプセルからすんなりと抜け出してきた。

少なくとも、並の人間のことではない。ユイとてそのくらいは理解している。

それでも特殊な能力者か、魔法士なのだろうと想像していた。人間外だというのなら『天使』だろうと思っていた。清らかで、美し

く、世界を護るものだと考えていた。

どう見ても『破滅』を連想するような要素はツバサにはなかったからだ。この少女が『破滅』ならばユイにだって世界は滅ぼせると思う。

「こんな小さな女の子が『厄災』で『破滅』だなんて……五皇国は頭おかしい集団か。この子に世界が滅ぼせるようならわたしにだって滅ぼせる気がするぞ？」

「まあ、お前は人間凶器だから破滅といっても嘘ではないけどな」失礼なことを否定せずにうなずいてから、ケイはツバサに手招きした。ツバサは喜んで、じゃれつく子猫のようにケイにくつついていく。

「ツバサ、ここにはどうやって連れてこられたのか覚えているか？」問うと少女は首をかしげた。覚えていないのかとユイは感じたが、ケイは質問を変えた。

「そうか、じゃあ訊き方を変えよう。ツバサは連れてこられたのか？ それとも最初からここにいたのか？」

「ずっといたよ」

ツバサはあっさりと答えた。自分は連れてこられたのではなく、最初からここにいたのだと。

「ツバサがさいしょ。あいつらきた。ツバサのこときらった。ケイとユイ、ツバサきらいじゃない。だからツバサ、ケイとユイすき」

そう言っただけなく笑う。ユイはケイを見た。ケイは真剣な顔で考え込んでいる。今ツバサから得た情報でいろいろなことを予想し、整理しているのだろう。ユイには判断できないこともケイにはできるのだろうか、彼が何か言い出すのを待った。

頭を使うのはケイの役目だ。その視線の前で、何か思いついたのか彼は質問を重ねた。

「……嫌われているのか？ どうして？」

訊かれて少女は困ったように眉を寄せた。

「わかんない」

何故自分が嫌われているのか、その理由は分からないがとにかく嫌われているのは理解できるらしい。

「分からないの？ でもどうやってあんなふうに封印されたのかとか、ちよつとは覚えてないの？」

「ツバサ、ねてた。わかんない」

ユイの問いにツバサは怒られたと感じたのかしょんぼりと答える。  
「ああ、いや、ツバサは悪いことないよ？ そんな顔しなくても大丈夫。嫌いになったりしてないからね？」

そういつてあげると安心したのか笑顔に戻った。その表情を見てユイもホツとする。やっぱりこの子には笑っていてほしい。

「寝てた？ ……あの液体の中で呼吸もしないで生きていられるのか？ いや、仮死状態になっていたということもありえる……？ 純粹に睡眠なんてあの状態で取れるわけがないし……」

ぶつくさ言っているケイは、また自分の思考に入り込んでいるらしい。

ばかりと殴って引き戻す。

「ツバサを人間外扱いするな。どこからどう見てもかわいい女の子だろうが」

「あほ。別に人外とは言っていない。ただ五皇国の連中が俺やお前のように考えはしないだろうと言ってるんだ。それにツバサはどう考えても普通 능력者ではないぞ。な、ツバサ？」

ツバサはうなずいたが、理解しているかどうかはちよつと怪しい。  
「で、でも」

まだ納得できないユイにケイは壁を指してひとこと。

「あのセトラをあんな風に退けることが普通の人間にできると思うか？」

説得力のある言葉だった。さすがにそれには反論できない。ツバサがセトラを退けたのは間違いないだろう。ユイでもケイでもないのだから、ツバサしかない。

「……『破滅』？」

ツバサを見る。本人はそう呼ばれてもきょんとしていた。

背中の光翼、尾羽さえなければ普通の女の子で通じる。

それはユイとて同じことだ。

傘から刃を引き抜きさえしなければ、普通の少女で通じる。

ケイだって、口を開きさえしなければごく普通の少年だ。

特殊に育った彼女たちだって歩いている分にはとても裏神官や軍人には見えない。

ツバサもそれと同じなのだ。ユイはそう思うことにした。

たとえこの子が人間でなくても、『破滅』であろうとも、ツバサはツバサだ。

「で、どうする」

ケイにそう言われ、ユイは眉をひそめた。何を訊かれたのかが分からない。

「なにが」

「なにがって、何しに來たのか忘れたのか？ 俺たちは世界を滅ぼすために『破滅』を探してたんだぞ？ で、目の前にその『破滅』がいるんだ。どうする？」

改めて言われてようやく気がついた。そもそもラグドラリヴに潜入したのは世界を滅ぼすためである。この腐りきった世界を消し去るために、自分の命を捨てる覚悟でこんなところまで來たのだ。

……今、目の前には探していた『破滅』があどけない顔で存在している。

ツバサから視線を逸らしてユイは思わず叫んだ。

「宝玉でも魔法でも兵器でも火の神でもミイラでもないじゃないかっ？！」

ケイも負けじと言い返す。

「俺に言ってもしょうがねえだろうがッ？！」

言い伝えなど微塵も関係ない、可愛らしい女の子の姿だ。さすがにこれは予想していなかった。こんな事態は考えてもいなかったため、ユイもケイも動揺が隠せない。

いたいけな少女に世界を滅ぼしてほしいと頼むのははつきり言うて気が引ける。

これが兵器だの魔法だのミイラだの宝玉だの火の神だのと間違はなく人外の存在とわかるものなら、躊躇なく世界を滅ぼせと命令するなり頼むなりできただろうに、現実は天使のような女の子で、自分たちのような人でなしにさえ子猫みたいになつてくる。

いくら裏神官のユイでも、初めて護りたいと思った存在に世界を丸ごと滅ぼせとは言えなかった。

したがって、

「お前言え」

ユイはケイに押し付けた。

「てめえ、卑怯だぞ?!」

ケイも心境的にはユイと同じらしい。何を見ても大喜びするツバサに、世界を滅ぼせと頼むのは、酷なことを望んでいるのではないかという気がするのだ。少し金があれば誰でも手に入れられる（ケイの物は特注なので他にはないのだが）端末の存在さえ知らなかったツバサ。自分たちの言うことにいちいち楽しそうに反応を返してくる少女。

おそらくは封じられていたために外の世界を知らないのだろう。言葉も知らず、名前さえなかったこの子に世界を消し去ってくれとは頼めない。

「というか、ツバサにそれができるのか？ ひよつとして五皇国の連中がなにか勘違いしているということはないか？」

「ないとは言えんが……ツバサが何らかの力を持っているのは確かだぞ」

「それだつて『ちょっと特殊な能力者』くらいのもかもしれないだろう？」

どうにかしてツバサが『破滅』ではない可能性を考え始める。今までツバサが二人に見せた力はかなりレベルのものではあったが、世界を滅ぼすほどのものではないような気がする。命を奪うとか、

何かを壊すなどの破壊的な力は使ってはいない。

作動していた銃器は止めたが、あれも壊すというよりは穏やかに止めたという感じだった。

「……確かめる方法はある」

「本当か？ どうするんだ？」

身乗り出すユイにケイは苦々しく答えた。

「実際頼んでみればいい」

「却下だ!!」

「それしかないだろ、確かめるのは」

ツバサを見る。少女は二人が何を心配しているのか分かっていない。きょとんとして二人を見下ろしていた。

……何も言えない。ツバサの前で睨み合うわけにもいかず、二人は息をついて妥協した。

「……とりあえず、脱出しよう」

「……そうだな」

とにかくここから脱出するべきだ。セトラはツバサが退けてくれたが、他の警備が来ないとは限らない。ここは決して安全な場所ではないのだ。

#### 四章・壁……越えるべきもの・3

どうやって脱出するかも問題だった。地下道は一本道で、地上に戻る方法はエレベーターだけ。隠し通路でもないかと端末に残っていたデータで探してみたが、そんなものは一切なかった。

しかしこのまま進むのは自殺行為だ。エレベーターで上に上がったところを狙われたらひとたまりもない。出入り口が一つだけの場所では回避のしようがないのだ。

うつ、と悩み始めた二人をツバサは不思議そうに眺めている。

「でたい？」

何を悩んでいるのだろうと言いたげだ。

「うん、でもね、問題があつてね」

「この先には怖い人がたくさん待つてる。このまま行くのは危ないんだ」

説明する二人に、ツバサはコクコクと頷いてから、何か思いついたようだった。

目を輝かせて天井を指差す。

「ツバサ、できるよ。ユイとケイだしてあげる」

その声につられて見上げた二人の視界が一瞬ぶれた。

「？」

あれだけ鳴っていた警報音も聞こえなくなったと思い、その上とんでもないことに気付いたのは二人同時だった。

「……星……？」

視界一面を埋めるかのような星空。ちょっとまで、ここは地下だったはずだと気付いて周りを見渡す。

景色は変わっていた。瞬きをするまではどこを見ても地下の岩壁とコケだった風景が、今は緑生い茂る草原だ。

たった一瞬。

それこそ瞬きをするそのわずかな間で、自分たちは地上に出た、



らしい。

疑ってしまうような状況だが、ここの空気は澄んでいる。地下の換気もできないようなよんだ空気とは全く違った。

「ま、まぼろし……じゃ、ないよな？」

ケイを見る。彼もユイを見た。お互いの目には『信じられない』と太い文字で書かれている。今一体何が起こったのか。

自分たちは確かに地下にいた。逃れようがない状態で心底から困っていたはずだ。

それがなにをどうして地上にいるのか。言葉で説明するのは簡単だ。それを意味する言葉は存在している。たったひとこと 『瞬間移動』と。

「ツバサ、だよな、コレは間違いなく」

ツバサがやったこと意外に可能性はない。ユイは魔法士ではないし、ケイも能力者ではないのだ。

「……とんでもないな、しかし……」

あきれたようにケイは呟いた。驚くしかない。多人数を連れて、しかもタイム・ラグのない瞬間移動だ。ツバサが精神集中している様子はかけらも見受けられなかった。だしてあげるといった直後にこれだ。

ありえない。

すくなくとも五皇国に存在している公式記録上で、こんなことができる者は存在していない。裏の記録でも珍しいくらいのレベルだ。今現在存在している魔法士、能力者の誰をとってもこんなことができる者はいないだろう。

それは、ツバサがケイの知っているどの存在よりも強力な力を持っているということを表している。

「……『厄災』……この子が、『破滅』……」

再び唸り始めるケイである。どうしても納得できない。

その横でユイはぼかんとしていた。

目の前でこんなことをされると、さすがにツバサがとんでもない

力の持ち主と実感する。

当の本人はユイにニコニコ笑いかけていて、自分がどれだけ途方もないことをやったのかという自覚もないようだったが。

とりあえず、今ユイがやることはツバサをほめてやることくらいしかない。

「あ。ありがとうね、ツバサ」

手を伸ばし、なでてあげると本当に嬉しそうにツバサはにっこり笑う。

こんなにかわいいのに。とユイもどうしても納得できない。この子に『破滅』だの『厄災』だのという単語は似つかわしくない。

やっぱり何かの間違いだ。そう心に折り合いをつけたユイに現実  
は襲いかかってきた。

月だけが穏やかに照らしていたラグドラリヴの草原を、人工的な光が、音が切り裂いてゆく。

どうやら侵入者が屋外に逃げたことが警備に知れたらしい。一体警備の人間が何を感じているのかユイには分からなかったが、とにかくぼやぼやしていると危険だ。見つかったら容赦なく殺されるなにセラグドラリヴという土地は、中に入っただけで死刑になるような場所なのだ。のうのと突っ立っていたらあつというまに蜂の巣にされる。

「逃げるぞ」

「それしかないな」

我に返ったケイとうなずきあふ。とりあえず『破滅』には触れたようだが、世界の滅亡を頼むわけにもいかない『破滅』と分かった以上、ここで死ぬのは嫌だった。なによりこの、常識どころか何も知らない『破滅』を放り投げて殺されるわけには行かない。

『破滅』

ツバサを護らなければ！

「どっちの方向に行けばいい？」

「とりあえず、ヒニア方向に逃げよう。そっちが近い」  
端末を切り替えながらケイが指示する。

国境を抜けてしまえば、一時的にせよ追っ手はふりきれるはずだ。少しでも時間が稼げたら、どこかに潜入して隠れることができる。

「よし。ツバサ、行こう」

「いく？」

不思議そうにツバサは小首をかしげる。

「そう、逃げるの。外に行くんだよ」

「そと」

いまいち分かっていないようだが、ユイたちについてくる気はあるらしい。

「ほら、ツバサ、行くぞ」

『破滅』はケイの差し出した手に嬉しそうにしがみついた。それだけでユイにもケイにも充分だった。

この子を護ろうと思うにはただそれだけで充分だった。  
ぬくもりを知らない裏神官と軍人にぬくもりを教えてくれたのだから。

護るものを持たなかった彼女たちが、初めて護りたいと思うものを得たのだから。

たとえそれが万人に認められないものでも、もはや手放せない。  
手放すことなど考えたくもなかった。

世界を滅ぼしに来た先で『破滅』を護りながら逃げることになる  
とは 皮肉もいいところである。それに気付いてユイは苦笑した。  
世界を滅ぼそうと思っているのに、その気持ちに変わりはないの  
に、でも、妙に心は晴れやかだ。何故だろう？

『破滅』が目の前にいるからだろうか？

いつでも世界を滅ぼすことができると思っているから？

……そうじゃないな、と彼女は思う。

ツバサにその力があるなどと、全く信じていない。できるとは微塵も思っていない。

万が一ツバサにそんな力があるとしても、ユイにもケイにも頼む気はさらさらなのだ。

この子に腐りきったこの世界を背負わせる気など毛頭ない。押し付けることなど考えたくもない。もっと他の未来をツバサにあげたい。そう思うようになっていた。

自身の未来など何一つ求めず、希望も持たなかった少女と少年は、あるうことか『破滅』に対して未来を、希望を与えてやろうとし始めていた。

それは他人から見たならば滑稽こっけいなことに見えるだろう。

愚かなことだと笑うものもあるだろう。

けれど、きっと、ほかのどんなことよりも彼女と彼には。

どんなに急ごうとも強化されていない者と一緒に走っていれば追いつかれるのは時間の問題だ。まして追っ手は、丈の長い草に邪魔されないフライングカーに乗っているのが独特のエンジン音から判別できた。距離がかなり離れていたが裏神官のユイには聞き落とさず判別できる。魔法を惜しげもなくつぎ込んだ空飛ぶ車だ。やたらと高価な上、コストがかかるスピードもあまり出ないので、そこらで見られるものではないが、ラグドラリヴの警備には採用されていたらしい。足場の悪い草原を四苦八苦して逃げているユイたちにはすこぶる分が悪い。

その上、夜には目立ちすぎる光翼のツバサを連れている。追うのはさぞかし楽だろう。

なにせ他には何もない土地である。遮蔽物しゃへいぶつがないため、草の上を飛んでいるツバサの光はかなり距離があっても丸見えのはずだ。

「ツバサ、その羽しまえない？」

さほど期待はしていなかったが、ユイは一応訊いてみた。このま

ま走っていると追いつかれてしまうのは目に見えている。せめて目印になるツバサの光翼が抑えられるなら、まだ視覚的にはごまかせるのではないだろうか。

「しまう」

ひょんと光が消えた。光源がいきなり消えたので、月の明かりに目が慣れていないケイが足元を取られてすっ転ぶ。

「な、なに？ その羽しまえるのか？！」

起きあがってそう叫ぶケイの気持ちが悔しくも理解できるユイである。しまえるのなら最初からそうしてもらえば良かった。

「しまう。できる。だめ？」

ツバサは不思議そうだ。何故か地面に降りてしまっている。

「ううん、だめじゃないよ。できれば外に出るまで夜の間はそうしてほしいな」

ユイがそう言うつとツバサはコクコクうなずいた。

「行くぞ」

とにかくツバサの光が消えたのなら、わずかの時間でも追っ手をごまかすことができそうだ。今のうちに距離を稼ごうと走り出そうとして、気付いた。

ツバサが飛ぼうとしない。さっきまでユイたちにあわせた速度で飛んでくれていたのに、今はユイたちと同じように地面を走っている。いかに『破壊』とはいえ子供の足だ。速度は格段に落ちている。まして、ルバサは裸足なのだ。

「……もしかして、ツバサは羽出してないと飛べないのか？」

「とべる」

言うなりホワンと浮かび上がる。が、そのすぐ後に背中に光翼が現れた。

「……ツバサ？ 羽、出てるよ??」

ユイが指摘すると本人は困った顔になった。

「むずかしい」

どうやら本人としては光翼が出ている状態が普通らしい。しまう

とかえって意識してしまい、力を使うのが難しくなるようだ。この分では力の制御方法も知らないのではないだろうか。それはそれで気になることではあるが、安全な場所まで逃れてから改めて心配することだ。

「……仕方ない。わたしが抱っこしていくから、ツバサは羽しまつててね」

時間が惜しいので、ユイはツバサを抱えていくことにした。ケイを担いでいくよりは百万倍ましである。ツバサは小さくて軽いのでその点でもケイより楽だ。

「行くぞ、ケイ」

「ああ」

さすがにケイも今は毒舌を発揮しなかった。ユイとしては怪力怪獣女くらいのことは言ってくるかもしれないと予想していて、言ってきたら即座に全力で足を踏んでやろうと準備していたが、彼が何も言っでこなかったので惨劇は起こらずに済んだ。

そのまま走り出す。ツバサを両手で抱え込んだ状態で追っ手に追いつかれたら対抗の仕様がなない。

#### 四章・壁……越えるべきもの・4

今のうちになんとかして国境まで近付かなくては。ヒニアはセイリオスとあまり国家間の関係が良くない。今ここにいるのがセイリオスの要人ならヒニアに入ってしまったえばそう簡単には手出しできないはずだ。ユイはそう考えていた。

甘い予想かもしれない。ケイは走りながらそう考えていた。五皇国のどこからでもいける土地、ラグドラリヴ。どの土地にもある『破滅』の伝承。どれも全て実在の『破滅』であるツバサからは遙かに外れたものではあるが、裏を返せばそれは本物を力モフラージユするためではないのか？

あれだけ外れたものを世間に広めておけば、いざ本物と出会ったときそれが『破滅』とは思えない。

実際ユイとケイはツバサと行動を共にしているのに信じられずにいる。

そして、だからこそヒニアへ逃げることは甘い予想ではないかと感じる。

『破滅』の伝承はどここの国にもあるのだ。

それが意味することはすなわち、どの国も『ツバサの存在を知っている』のではないかということ。

セイリオス、イグザイオのみならず、ヒニアやホマレ、シルメリア　五皇国の全てが知っていてツバサの存在を隠しているのではないか。

だとしたら、この件に関して五皇国は結託しているのかもしれない。『破滅』に関することだけは国家間がどうこう言える問題ではない。国家うんぬん言っている間に世界自体が消えてしまう可能性があるので、自国を滅ぼすよりは他の国と手を結ぶほうを選ぶだろう。そう仮定すれば、自分たちが逃げる場所などどこにも

なくなる。

世界の全てが敵になるのだから。

……今更だ。ケイはそう気付いて薄く笑った。世界を滅ぼすつもりでここまで来たのだ。世界が敵に回ろうが怯える必要はない。『破滅』であるツバサを護ることを決めるよりも先に自分たちは世界に絶望し、決別したのだ。

滅ぼそうという気持ちに変わりはない。ただ、それをツバサに頼む気がないだけだ。

自分たちに世界を滅ぼす力があれば、とうにやっている。

ただ、それはツバサに会う前限定の話だ。会ってしまった今となつては、ツバサを連れてとにかく生きて逃げることにしか考えていない。命を捨てるつもりでラグドラリヴに入ったのに、出るときはどうやってうまく逃げるかを考える羽目になるとは、人生というヤツは分からないものである。

「……ケイ、止まれ」

思考しながら走るケイの背後からユイは待ったをかけた。

「？　なんだ」

「囲まれた」

言葉短く彼女に指摘され、ケイは言葉を失った。

「……本当か」

「間違いない……後ろの連中はこっちの気を引くためのおとりだったらしい」

苦くユイはそう言った。草むらに隠れている連中は気配を隠しているものの、裏神官の彼女には感じとれる。その数、十数人と見た。

無論、ユイにとってはたいしたことのない相手である。それでも片付けるまでにはそれなりの時間がかかるだろう。その間に後ろの連中に追いつかれたらそれで終わりだ。

こんな簡単な陽動に引っかかるなんてとユイは唇を噛みしめた。



足を止めた彼女たちの周りに次々とフライングカーが停止する。それと同時に身を潜めていた追っ手も姿を現した。全ての人間が武器を携帯している。それも確実に人を殺傷する類のものだ。

自分たちを生かして返すつもりはなさそうだ。せめてツバサだけでも逃がしたい。

けれど肝心のツバサは周りを囲まれているというのに光翼を出すそぶりさえ見せない。

武器を向けられているのに、怖がる様子もなかった。フライングカーを見て、不思議そうにしている。ユイは苦笑してツバサを地面に下ろした。

ツバサはどうしたのと言いたげにこちらを見上げてくる。もう駄目なんだよと答えるのはあまりにこの子が可哀想で、ユイには答えることができなかった。

「待て」

追っ手がいまにも発砲しようとしたとき、男性の声がそれを止めた。

追っ手は発砲をやめたが銃口を下ろそうとはせず、道だけを開ける。

まるで質の悪い映画の一シーンのようだ、とケイは考えた。ありがちすぎる。威厳を出すための演出だと、すぐに理解できた。

ユイも声を聞いて誰が来るのか確信した。何度か画面越しではあるが聞いた声だったからだ。

開けた人壁の間を歩いてくるのは五皇国の住民なら確実に知っている顔。

「まだ子供ではないか」

そんなことを言いながらユイ達に近付いてくる　その男。

法王、リリド・セイリオス。セトラが仕える金髪の男。もう青年というような年齢ではない。けれど中年とあらわすのは気が引ける、そんな感じの男性で女性に人気があるとはユイも知っていた。顔が良いだけではもちろんなくて、政治的手腕もかなりの腕前だとケイ

は知っている。

そんな男がなぜここにいるのだろう。自分たちは侵入者でその上『破滅』を連れているのだ。ここの警備の人間から見れば危険この上ない存在のはずである。

そんな危険な連中の前に、何故、法王は姿を見せたのだろうか？

…… ユイにもケイにもなんとなく予想はついた。  
腐りきった五皇国。

そのてっぺんにいる人間。

普段なら己の保身ばかりを考える人間が、こんな場面で姿を現す理由などたかが知れてくる。

「見る、怯えているではないか。ああ、そう怖がらずとも良い、余がそなたたちを護ろう。安心するが良い」

陳腐な言いように、ユイはしらけ、ケイはあきれた。法王が言っているように怯えているわけでは断じてない。あまりにもあからさまなのでかえって呆れたのだ。

始めから大人に絶望しきっている子供たちに、とってつけたような薄っぺらい言葉など通用するわけがないのに、法王はそんなことにも気付かず続ける。

「興味本位でここに入ったことも許そう。罪には問わぬ。そなたたちがどこから迷い込んだのか分からぬが、そなたたちもその子も余のほうで保護しよう。さあ、その子をこちらへ」

はー。ユイとケイは同時にため息をついた。予想は的中している。法王の視線はツバサに向いていた。

「…… あほか」

ユイが言い、

「…… いや、自分は賢いと思っているんだろ」

ケイも言う。

『破滅』が解き放たれたと知ったら、まず上の人間はどう出るか。その見本の二つ目がここにいる。

一人目はセトラだ。彼女は手に負えぬ力を持つものを再び封印し

ようにした。

二人目が法王。彼は多大で強力な力を持つものを手中に収めようとしている。

「……わかりやすいな」

手に取るように考えが分かる。法王はツバサを利用する気満々だ。  
「法王閣下？ この子はわたしの妹です。迷い込んだのではなく、ここまで一緒に来ました。だから一緒に処断してください」

さつくりとユイは言い切った。ここで法王にツバサを渡す気など毛頭無い。ツバサを渡してしまえば、少女にとっていいことなど何一つないだろうと容易に予想できる。

「何を言う。処罰などせぬよ。そう警戒せずとも良いだろう。とにかくこのような場所ではなく、暖かい部屋に入ろうではないか。車に乗りなさい」

表面上は優しい声に聞こえた。だが、その視線はツバサからちらちらと離れない。

警戒と好奇、欲望が見え隠れしているのはよく分かった。『破滅』に触れるのは恐ろしいが、その力は魅力的なのだ。

ユイの陳腐な嘘など意味がない。向こうはツバサが『破滅』と分かっている。如何にしてユイたちからツバサを引き離すか、それだけを狙っている。ツバサを渡してしまえばユイもケイも用なしだろう。即座に殺されること確実である。

ツバサを渡せば殺される。ユイはそう予想していたのだが、ケイの考えていた予想はもつといやらしいものだった。

「法王閣下。俺……いや、私たちの罪は問わないと仰せですか？」

ケイの問いに法王は鷹揚に頷いた。いかにも懐が深そうに。

「なんと寛大なご処置、いたみいます閣下。ですが一つお伺いしたいことがあります」

「なんなりと申してみるが良い」

笑みと余裕をたたえ、法王は質問を促した。

「この子は本当に『厄災』と呼ばれるほどの存在なのでしょうか？」

もしそうならば、一体何をして『厄災』と称されるようになったのです？」

彼の問いに法王は瞬間惑いを見せたが、答えた。

「そなたたちも存じておろう、五百年前のアツパード山脈の崩壊を。あれは事実上では天災ということになっておるが、実際はその少女が起こしたことなのだ」

「！」

ユイは目を見張って自分のマントにくっついていているツバサを見下ろす。

史上最大の地震で跡形もなくなった山脈のことは、歴史学で必ず一度は習うほどの有名な天災だ。ラグドラリヴの東に数十キロにわたって存在していた山脈で、それが一夜にして全てなくなったという。それほどの規模だったにも関わらず、周囲の町などに被害はなかったため、セリオスの加護だの奇跡だの言われていた。

それが、ツバサがやったことだというのか？！

「ちょ、ちよつと待て！ ツバサがそれを？ だってこの子は外も見たことないような感じだったぞ？！ ずっとあのカプセルに封じられていたんじゃないのか？！」

あまりの驚きに敬語も忘れたユイに警備が銃を向けたが、法王はそれを制して続けた。

「そうとも。その子はずっとあの地下にいた。地下でまどろんでおった。あの天変地異はその眠りを邪魔した当時の人間に向かって放たれた寝言のようなものだ」

言葉を失うユイに法王はたたみかける。

「それをようやくあのように嚴重に封じたのがわれわれの先祖なのだ。だがその封も解かれてしまった。何度も言うが罪には問わぬ目覚めてしまったものは仕方がなからう。如何な『破滅』と言えどその子とて一個の命。再び封じるのは忍びない……不憫でならぬ」

とくとくそう言う法王に見えぬ角度でケイがユイのわき腹をつついてきた。彼が隠し持っている端末を見ると指図されているよう

だ。法王に気付かれないようにユイは視線の角度をわずかに変えた。画面にケイが打ちこんだらしい文字が見える。

『法王は俺とお前がツバサを制御できると見ている。俺たちを手中にすればツバサも手に入ると思っている』

ユイはあまりの勝手さにめまいのような怒りを覚えた。法王は『破滅』は欲しいが危険は避けたいのだ。危険を少しでも低くするために、ツバサになつかれていているユイたちから先に手なずけるようとしているのだと、ケイはそう指摘している。

その予想は外れてはいないだろう。そうでもなければ自分たちが助かる理由がない。

……断じて受けたりするものか。懐柔などされるものか。ツバサは自分たちが護るのだ。

こんな腐った連中にむざむざこの子を渡してなるものか。

つん、とケイが再びユイのわき腹をつつき、何かを押し付けてきた。『それ』を密かに受け取りながら端末に視線をやると、さつきとは違う文字が画面に出ている。

たったひとこと。

『法王を人質に取れ』

なるほど、とユイは内心うなずいた。この場で一番偉い立場の間で、他の人間に指図できるのは、目の前でユイたちをなんとか丸め込もうとしている腐った男だ。

さすがケイ、性格が悪いだけあって考えることがエグい。ユイは心底感心した。

#### 四章・壁……越えるべきもの・5

ひとつつなずいて、ユイはケイの意見を実行に移そうとした。法王さえおさえてしまえば、他のやつらは手出しできまい。法王はごく普通の人間のはずだ。ユイなら労せず捕まえられる。動こうとしたとき、ユイの中の何かが止めた。それはいままで培った経験<sup>つちか</sup>が告げたものだろうか、やばいと彼女の何かが告げている。ケイの襟首をつかみ、ツバサの肩を抱き法王から距離をとる。ケイが、げふつとか言っていたがとりあえず無視した。

「どうした？ 怖がらずとも良い」

法王はそう言っていたが、反応したのは今まで黙っていたツバサだった。

「またきた。やなやつ」

本当に嫌そうだったので、ユイにも誰をさしているのか理解できた。ツバサと出会ってからまだ短い、短いゆえに少女が嫌いだと言言する相手はたったひとりだけ。

この嫌な予感はそのせいかな。

「セトラ・オウンゴン……」

気配はしない。ユイに気配を悟られるようなセトラではないだろう。だがこちらにはツバサがいる。どうやって感知しているのか不明だが、ツバサが言うならセトラはどこかでこちらの行動をうかがっているのだ。法王に手などかけたらその瞬間にバラバラにされる。どうする？ このままではギリ貧だ。法王の要求を受ける気など爪の先どころか細胞のいつペンほどもない。

「ユイ、ケイ、こまってる？」

ツバサが見上げてきた。どうにもならない雰囲気を感じ取っているのだろう。

「あいつら、じゃま？」

包囲網を指さす。ツバサにさされて怯えたのか包囲は一步下がっ

た。

「あつちいけする？」

ツバサにあどけなくそう訊かれユイは言葉に詰まった。たしかにツバサに頼めば、確実に安全に逃げられるような気はする。だが、安易にこの子に頼ってはいけないとも思うのだ。

ツバサには幸せをあげたいから、汚れた自分のように人を害する術<sup>すべ</sup>を覚えて欲しくない。

地下でケイの頼みをツバサはあっさりとかなえた。ユイが頼んでもかなえてくれるだろう。簡単にツバサに頼むことができるし、ツバサが頼みを聞いてくれるとわかっていいるから、なおさらこの子におぶさるような真似はしたくない。

「うつん、いいよ。わたしが何とかするから」

安心させたくて微笑みかける。

「何とかする？ どうしようというのだね。罪は問わぬと言っておるだろう？ 警戒することなど……」

なおも何か言おうとする法王をユイは睨みつけた。ツバサへの態度とは真逆<sup>まぎやく</sup>である。

さつきまであった一応の礼儀も捨て去り、彼女にあるのはいまや完全な法王への敵意だ。

殺意ほど強くはないが充分に相手を警戒させるもの。さすがの法王もあからさまな態度に数歩後退した。それで充分に間合いが取れる。先ほどケイが押し付けてきた品を投げつけると同時にツバサとケイを抱え込んで地面に伏せた。

鼓膜を揺るがす炸裂音とうめき声。それからユイは身を起こした。

「ひょー？」

ツバサが目をくるくるさせながら起き上がる。ケイは頭を振ってから起き上がった。

「……いきなりだな、おい」

「お前が渡してきたんだぞ」

小型の閃光破裂弾である。音と光と衝撃で相手を気絶させるシロ

モノだ。直撃すればトラでも倒れる。ユイたちは伏せていたし、法王や包囲の人間が盾になったようなもので、多少耳が遠いが無傷であった。

「あんなもの持っているならもつと早く出せ」

ケイに言いながらユイは刃を抜いた。倒れている人間はあと一時間は起きてこない。

「……というかわたしは余分なものは置いて来いと言わなかったか？」

「言つてたな。余分じゃなかったからいいだろう？」

言いながらケイはツバサを抱えてユイから距離を取った。その視線の先にはさつきまではなかった銀色の影がある。

「わたくしと戦うつもりですか」

「そのほかにどう見える？ セトラ・オウンゴン」

「あなたではわたくしにはかないません。無駄な抵抗はおやめなさい」

「そうだな、多分その通りだ」

セトラにはかなわない。それはセトラが愛用している鋼線を使っていた場合なら、だ。その鋼線はツバサが蒸発させた。同じものはないのだろう。セトラは予備の武器なのか、手に剣を持っていた。それはいつもの武器とは全く違う。

いかにセトラが達人でもそれならば。

「でも、万が一ということもある。それに」

ユイは自分の背中の気配を感じる。

「わたしには負けられない理由ができた」

そこにはケイがいる。すこぶる嫌なのだがいまでは同じ想いを持つ者だ。

その腕の中にはツバサがいる。何も知らないユイとケイの可愛い『破滅』。

彼女が護るべきもの。なによりもただ、護りたいと思うもの。この世界で唯一輝いていると感じるもの！



「……愚かですね、『それ』はあなたに護られるほど脆弱おころがへな存在ではありません」

「そうだろうな」

セトラの声にもユイは揺らがない。

「なんせ『破滅』だもん？ ツバサは」

ケイも言う。彼も揺らがない。ツバサは分かっているのか、ケイに抱っこされてご満悦だ。嬉しそうに笑っている。

「そんなもん、確かに護る必要はないんだろう。でも、俺たちはそうしたいからする。理屈なんて知るか」

「理屈男のお前が言うか？ えらい方向転換だな」

ケイをちやかしながら、ユイはセトラと向き合った。そこに気負いはない。地下でセトラと向き合ったときは全く違った。ツバサがなんなのか理解したうえで、自分がこうしたいのだと確信したからだろう。余分な力が入っていない。

化けたな、とケイは思った。今のユイを倒すのは結構骨だろうとなんとなく思う。開き直っただけかもしれない。けれど今のユイは過去の彼女とは違う。空虚で絶望しか知らなかったケイと同じものを持つ女。

ラグドラリヴに来て、ケイが変わったようにユイも変わった。

「ユイ、がんばる」

無邪気に応援する『破滅』と出会って彼女も彼も変わったのだ。「がんばるよ」

ツバサに答え、ユイは刃を師に向けた。

負けるかもしれない。死ぬかもしれない。昔はそんなことなんて怖くなかった。自分がいつ死んでもなんとも思わなかったろう。

今は、怖い。死にたくない。生きていたいと思う。

ユイの心に生まれたものはなんなのだろう。彼女自身にも分からない。

「……その子は人間に見えても人間ではありませんよ。形が似ているだけです。少女の姿をしていても内実は全く違う」

セトラは剣を構えた。落ち着いた声で落ち着いた態度でユイに刃を向ける。

「いわば化け物です。それでも護るといいますか？」

その鋭い眼光にさらされてもユイはひるまなかった。以前ならこうして向き合っただけでセトラにはかなわないと感じていたのに、不思議だ。

丈の長い草の中で走り回ることには出来ない。リーチでは背の高いセトラのほうが上で、さらに彼女はユイよりも強化されている。薬物だけでなく機械強化も受けているはずだ。まさしく人間兵器である。普通に考えたら勝てる可能性などないに等しい。

「愚問だ、セトラ」

ユイの返答にセトラは速く、正確にユイの喉を狙ってきた。もはや問答は不要、処分すべしと判断したのだろう。『破滅』を開放しただけでなく、法王にまで狼藉を働いたユイたちを許すつもりなど最初からないのだ。

そしてユイもセトラのその考えを理解していた。躊躇なく急所を狙ってくるだろうことも予想できる。セトラに迷いが無いようにユイにも迷いはない。刀を突き上げ、火花を散らしながらセトラの剣の先を逸らす。空を切った剣先が戻る前に身を沈め、下方から再び突き上げた。セトラは軽く身をそらしてすんなりと避け、剣を振り下ろしてきた。

月光を裂くような刃の輝きがユイの頭上に落ちてくる。ユイは足もとから身を滑らせた。

靴先から小さな刃が飛び出ている。逆立ちするような体勢で、つま先を蹴り上げた。

セトラはかろうじてそれをかわしたが、ユイは宙で一回転しながら刀を振るい追撃する。刃先はそれでもセトラの頬をかすっただけだ。

「……人間か、あれ」

互いに体勢を整え、再び対峙するユイとセトラを眺めながら、ケイは引きつって呟いた。

さすが裏神官のトップクラス。見ているケイの手のひらも、じつとりと汗がにじんできた。

「……わたくしに手傷を負わせられるほどになりましたか……惜しいです、ユイ・ヒガ。もう一度考え直しなさい。あなたほどのものを殺すのは忍びない」

「何を心にもないことを。法王に乱暴を働いたものをあなたが許すわけがない」

セトラが法王に関することを譲らないように、ユイにも譲れないものができた。ここで甘言に乗ることはできない。

「あなたが法王を裏切ることがないように、わたしにも裏切れないものができた」

水平に刃を構える。リーチを補<sup>おぎな</sup>えるものは突きしかない。セトラもそれは理解していて、同じように剣を構えた。

ユイの意思を阻むように。

「……残念です」

決して相容れない、世界を護ろうとするものと滅ぼそうとするもの。

その意見が交わることは無いのだ。

護ろうとする腐った大人たちと、滅ぼそうとする病んだ子供たちが、互いを理解することは無い。

もはや道は分かたれた。

ユイは刃を突き出した。

セトラもほぼ同じタイミングで剣を突き出す。

全ての音が消えたのをユイは感じた。セトラの剣が迫ってくる。それはとてもゆっくり見えた。自分の腕もとてもゆっくり進んでいく。こんなこと本の中だけの現象だと思っていたが、実際あるんだと妙にのんきに考えた。

このタイミングのままなら間違いなく先に貫かれるのは自分だ。だが、セトラも死ぬ。剣がユイの目を突くのとわずかに遅れて、刀はセトラの首を裂くだろう。

相討ちか、悪くない。わずかの時間でそう思った。ツバサはケイが護ってくれるだろう。

この場さえしのげば、ケイはツバサを連れて上手く逃げられる。セトラを道連れにできるのならたいしたものだ。

剣が届くその瞬間にユイは笑った。

護れるのなら、命を懸けてもいい。そんな存在に最後に出会えた。だから、いい。ひそかな自己満足に浸った瞬間、聞こえたもの。

「ユイ！」

自分と呼ぶ二種の声。

考えるまでもない、二人の声だ。

ああ、と思った。

わたし、死ねない。

渴望のような死への誘惑が完全に断ち切れた瞬間だった。

ユイは身をひねりながら自分でも驚いた。自分にこんな動きができるとは思っていなかったからだ。セトラの剣はユイの頬を削り、ユイの刃は空を切る。けれどユイは勢いよく身を回転させて、マントを跳ね上げた。

特殊鋼糸が織り込まれたマントは、刃が空振りしたことを見て追撃を重ねてこようとしたセトラの両目を切り裂いた。

その瞬間に勝負はついて 大人と子供の決別は成された。

四章・壁……越えるべきもの・5（後書き）

次回、エピソードを載せます。

## 終章・できること

「……許されることはありませんよ……」

滴る鮮血をおさえながら呻くような声音でセトラは呪詛を吐いた。両目は完全につぶされた。目が見えなくとも彼女なら戦うことは可能だが、いまは相手が悪い。

生徒は師を超えた。ほんの一瞬だったとしても、その一瞬が全てを分けた。

セトラはそれを理解していた。

そして、たとえユイを倒したとしてもその後ろには『破滅』がいる。

「その子を……『破滅』を解き放てば、この世界は終わるのです。全てが滅ぶと……理解しているのですか？」

「そのつもりで来た」

ユイはあっさりとそう答えた。

「わたしもケイもともと世界を滅ぼすつもりでいた。そうでなければラグドラリヴまで来るわけがない」

『破滅』が世界を滅亡させる終焉を望んでいた。自身の死も含めた一切の終わりを求めてここに来た。世界と一緒に心中するつもりでいた。

「でも。ここにいたのはツバサだ。外を知らない、何も知らない女の子だ」

光翼の少女は心配そうにユイのそばにふよんと飛んで来た。ユイの頬から流れる血を見て痛そうに顔をしかめる。それから手を伸ばしてユイの頬にふれた。

「いたいのだめ」

それだけで、かなり深かった傷は瞬時に消えた。

「ツバサは治癒もできるのか。万能だなあ」

ケイがそう言ったのでユイはそこで初めて自分の負った怪我が治

ったことを知った。頬に触れてみる。さっきまでの熱のような痛みはなく、指先には血もついてこない。

必ず傷跡が残るだろうと思っていたがこの分では跡形もないよう  
だ。

「ありがと、ツバサ」

笑いかけると『破滅』の少女は嬉しそうにくつついてきた。

「本気で……言っているのですか」

セトラが呻く。

「世界を滅ぼすと、本気でっ！」

「その気だったさ」

ケイもまた、至極あっさりと言つてのける。

「過去形だけだな」

世界が嫌いなことに代わりはない。今でも吐き気がするくらいこの世界が嫌いだ。滅ぼしたいとも思う。なくなってしまうとも思う。その力を求めてここに来た。

「でも、実際に会つた『破滅』がツバサだったからな」

「そうだな」

ユイはうなずいた。

「いたのがツバサじゃなかったら確実に世界を滅ぼせと頼んでいたんだが」

それは本心だ。あの場所にいたのがツバサじゃなかったら、ユイたちは迷わず世界を滅ぼしている。

「まあ。世界も俺たちも命拾ひしたってことだ。ツバサをほうつて死ぬわけにいかなかった」

ツバサに向かっておいでと手を振る。子犬のようにツバサはケイの方へ飛んできてじゃれ付いてくる。

ユイとケイのかわいい『破滅』。

この子をこんな風に思うのは自分たちだけだろう。他の人間は少女を恐ろしいとは思わない。利用しようとは思わない。

「行こう」

ユイはケイにそう言っ て刃を納めた。セトラが襲っ てくる様子はない。こちらの考えが理解できなくて呆然としているのだろ う。セトラは護るものであり、滅ぼすものではない。

だからこちらの考えが理解できない。

その気持ちも今のユイたちには分かった。自分たちがどれだけ馬鹿なことをやるう としていたのかはよく理解している。

ただ、死にたかったのだ。死に場所を探していたのだ。戻ることなど考えずにラクになろうと思った。この腐った世界で生き続けるのは苦痛だった。

未来は真っ暗だったから、道のないところを歩くのが怖かった。この先に何があるのかも分からないのに、希望など持てなかった。自分勝手なものだ。全て『破滅』に押し付けて、自分たちだけラクになろうとした。

いまはそれも理解できる。

ユイとケイはツバサを連れてセトラに背を向け、歩き出した。向かう先にヒニア。

けれどそれから先はどうなるか分からない。

状況は以前より遥かに暗く不透明なのに、今の彼女たちにはそれが重荷ではない。

苦しくつらい未来が待っているのは確実だ。

なにせ連れているのは『破滅』なのだから明るい未来などありえない。

「これからどうする？」

それなのにケイの声は明るい。

「どうするって、逃亡生活しかないだろう」

それなのにユイの声も楽しそうだ。

「とーぼー」

ツバサはいつもどおり、分かっている。少女に苦笑してからケイはユイに訊いた。

「お前、金いくらくらい持ち合わせある？ 俺は旅行を装ってきた



からそれなりに持つてる」

とりあえずこれからのことを考える。まずヒニアに抜けてからどうするか。

何をするにしても金が必要。

「わたしは給付金が出たばかりだから……」

歩きながらお互いの手持ちを言い合ってその時点で何ができそうか考えた。

幸いというか、ユイもケイも結構な額を持ち歩いていた。これなら三人でも二ヶ月は何とかなる。二人とも自国の銀行に口座を持っており、そこには年齢から考えると不相応な額が入っているが、こうなってしまった以上、預金を下ろすのはまず不可能だろう。

と、なると無駄遣いはできない。

「まずツバサの服を買わないと。いつまでも上着一枚じゃかわいそうだ」

「俺たちのもだろう。このまま制服着てると目立つ」

言いながらケイは耳のイヤリングを外して投げ捨てた。ユイも髪留めを草むらに放り込む。

五皇国の僕である証の六芒星がついた制服。多機能で便利ではあるがもう自分たちには必要ない。彼女たちはもはや五皇国の奴隷ではないのだ。

これから、自分たちの足で歩いていく。

他の誰にも真似できない道を、他の誰でもなく 自分たちで。

「当座の金はあるか。飢え死にすることは避けられそうだな、良かった」

「あー、国境を出たらまず腹ごしらえだな、それから睡眠だ。いい加減疲れた」

夜が明けようとしている。ずっと歩いていたし、徹夜だったのでケイは疲れきっているようだ。ユイもセトラと戦ったので精神的には疲れてはいたが、体力的には元気である。一晩や二晩でどうにかなるようなら裏神官などやっていない。

「腹が減っているのか？ チョコならあるぞ」

「くれ。疲れたときは糖分だ」

遠慮しないケイにウェストポーチからチョコを出すと、ツバサが興味津々覗き込んできた。

「これはね、チョコレートだよ」

「ちょこ」

ちょうど二枚買っていたので一枚をツバサに手渡す。受け取るとツバサは物珍しそうにひっくり返したりして眺めている。食べ物と分らないのだろう。

「食べる物。ほらケイが食べてるでしょ？」

半分ほど包み紙を剥いでぽりぽりかじっているケイをさす。

それを見て理解したのか、はたまた単に真似したいだけなのか、ツバサも嬉々として包み紙を剥いでいく。単に紙をはがすこと自体が楽しそうにも見えた。

「かじってごらん。美味しいよ」

うながすとツバサはパクリとかじりついた。

かりぽりとしばらく噛んで、目を輝かせる。どうやら気に入ったらしい。

「ちょこ！」

あつという間にパクパクと食べてしまった。なんだか木の実を食べる小動物を連想してしまったユイである。可愛い。

「ジュースもあるよ」

果汁を買ってあったことも思い出し、ポーチから出してツバサに渡した。ペットボトルも初めて見たらしいツバサは、大喜びでさかさまにしたり振ってみたりしている。

飲み物というより遊び道具と思っているのか。そうじゃないんだけどなあと笑って、

「これはね、飲み物。こうやってふたを開けて、ここから飲むんだよ」

ふたを開けてやり、飲み方を教えてやるとちよつとこぼしながら

も何とか飲んだ。

「じゅーす！」

これも気に入ったらしく、嬉しそうに目を輝かせている。

「……餌付けしてるみたいだな……」

ケイも苦笑して呟く。それからふと気付いたようにツバサに注意した。

「ツバサ？ 俺やユイからならいいけど他の人間から食べ物をもらっちゃ駄目だぞ？ 外には食べ物買ってあげるとかいつて連れていこうとする変なやつもいるからな」

「へんなやつ」

コクコクうなづくツバサである。分かっているのかは非常に怪しい。

常識をいろいろと教える必要がある。なにせ法王の話ではツバサは五百年も眠っていたのだ。当時の常識と今とはかなり差があるだろうし、そもそも少女は一般常識を持っていないように思える。

…… ゆっくり教えていこう。ユイはそう思った。

時間はたくさんある。状況は緊迫していても、ツバサと過ごす時間はこれからたくさんある。ケイと二人でこの子にいろんなことを教えてあげよう。

常識も言葉も、嬉しいこと楽しいこと、いろんなことを教えてあげよう。

絶望ではなくて、希望を。暗いものではなくて明るいものを。

そんなことを考えながら、セイリオスの裏神官とイグザイオのエリート軍人は『破滅』を間に進んでいく。

ツバサを解き放った以上、国には当然戻れまい。禁忌の地で眠っていた『破滅』がこんな少女とは夢にも思っていなかったが、今となってはこれで良いような気がしている。

『破滅』は開放されたが、世界はまだ続いている。終わるどころか『破滅』は外の景色に興味津々で目を輝かせて日の昇りかけてきた周りを眺めている。

そのうち飽きれば世界を滅ぼすのかもしれないが、今のツバサを見ていると浮かぶ言葉は『破滅』ではなく『天使』だ。

「しっかし……見た目に騙されてる可能性高いぞ？俺たち」

ケイがぼやく。法王に聞いたことが今更ながらにみえる。

五百年前の天変地異。圧倒的な力。人間ではないもの。

『破滅』。『厄災』。世界を滅ぼすもの。それはこちらの考えでは図りきれないものだろう。人間の考えでは到底理解できないものだ。分かり合えないかもしれない。

「ツバサが気を変えて俺たちをさくつと殺す可能性もある」

とは言うもののケイは大して警戒してはいない。

「ツバサになら殺されてもいいって気はするが」

「わたしもだ」

なんてことはない。ツバサが世界を滅ぼそうとするならそれでいい。

世界を護ろうとするならそれでいい。

そう考えているだけだ。

ツバサの意思を護ろうと思った。

この子に世界の滅亡を願うことはできなかった。

けれどツバサが『破滅』であることは間違いない。それは避けようのない事実だ。

ならば 世界を敵に回してもこの子を護ろう。

世界は醜い。腐っていて、澱んでいて、歪んでいて、病んでいて、汚れていて、壊れている。簡単に絶望する現実がそこかしこに転がっている。

でも。

「あれは？ なあに？」

ツバサが水色の目をキラキラさせて訊いて来る。

こんなに醜い世界でも喜ぶこの子がいるうちは捨てたものではない。

いのかもしれない。

護りたいと思う何かがあるうちは 世界の存在を祝おう。

この腐りきった世界でも、輝く何かがあることをユイとケイははじめて知った。

## 終章・できること（後書き）

これにて「みえるもの・できること」は完結です。

きつと、三人には追っ手がかかるでしょう。それでも、三人とも幸せに過ごすでしょう。

ユイとケイはできることをみつけ、ツバサは信頼できる相手を見つけたのですから。

長らくお付き合いありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4453c/>

---

みえるもの・できること

2010年10月8日12時19分発行